

學の進むと共に法律經濟に志して明治大學の商科、早稻田大學法科の校外生として講義録を讀破し將來會計士として立つ基礎的知識を獲得したのである。

趣味は圍碁、謡曲、養蜂、魚釣長男の元尙君は昨年市商を出て大阪なる奈良貿易商店に勤めてゐる

前田芳吾氏

世間で普通に謂ふところの「温厚」とか「篤實」とかいふ人物の形容詞は左程價值のあるものではない。上手な猫は爪をかくすと昔から云ふ通り、虫も殺さないやうな顔をしてをつて存外狡猾であつたり謙遜の風を装ふてその實なかく虚榮心の熾烈な人物を見かけたりする世の中である、眼光紙背に徹するにあらずんば正しき人物評は出来ない。要は名を賣りたがる人間と、道德に棲守する眞人と區別を辨知しなくてはならぬ。君子の才華は玉つゝみ珠かくる人をして知り易からしむべからずと古人は言つてをる。前田芳吾氏の如き乃ちこの範疇に屬すべき人物ではなからふか。

氏は慶應三年九月十八日をもつて吾川郡弘岡上ノ村に生る。少年時代より製紙業に興味を有し製紙の職工と爲つて晝夜を分たす研究を重ね、明治二十八年十月高知市に出で現在の場所たる通町一丁目において製紙業を創め逐年發展し擴張して、今日の「諸紙製造輸出業前田製紙場」を輝やかしく建

設する成功の喜びを見るに至つたのである。氏は生れ有つ製紙の趣味に加へて、旺盛なる研究心と不撓不屈の精神力を藏してゐるから、一意専念製紙技術の向上にいそしみ、眼を紙業の大局に注ぎ明敏なる頭腦を活用して製紙器具機械等の改善進歩に貢献すること多大であつたが爲めに、大正十四年土佐紙業組合は氏を紙業の功績者として表彰したのであつた。一職工より身を起して土佐紙業界の重鎮となつた終始一貫の事業的操守そのものが能く氏の人と爲りを表はしてをると思ふ氏はその資性が文字通り廉直であり敦厚である、だから芝蘭幽谷にあつて衆香その下風を拜する如く、徳望招かすして到り、土佐紙業組合常議員、中央製紙業組合長、土佐脂紙製造組合聯合會長、高知信用組合理事等々の現職に在り、曾ては高知市會議員に三回、高知商工會議所議員に二回當選し、市政のため實業のため頗る盡瘁するところがあつた。斯くて氏は私人として公人として既に功成り名遂げてをる譯だが、氏の富と氏の名譽とは決して自ら求めて得たのでなく、その廉直敦厚の資性に對する天の報酬である「富貴名譽の道德より來る者は山林中の花の如し自らこれ舒徐繁衍す」とは有名なる菜根譚の言葉であるが、氏は當にこの言葉に該當する人物であることを朗らかに認識する。氏には賢息前田嘉郎氏あり、明治廿三年四月生で氏の業を繼承し、從七位在郷陸軍歩兵中尉、帝國郷軍高知支部上街分會長、高知倉庫株式會社取締役、高知市消防組上街消防部々長小

頭、高知市警備隊上街班長、高知市會議員等々の要職にあり第一線に立つて盛んに活動してをるから、功成り名遂げたる氏は老後の娯樂として淨瑠璃を研究し縣下素義界の横綱格たる地位に推されてをる。蓋し稀に觀る幸福人なりとの折紙を附けて擱筆する。

松岡寅八氏

昭和十一年五月上旬、高知市において第三十四回全國料理業同盟大會が四日から六日まで三日間に亘り開催され、北は樺太、西は支那上海、大連、朝鮮南は台灣に至る無態五百名の代表者が出席し、本縣では空前絶後とも謂ふべき豪華繪巻が展開されたが、此の大會の委員長を勤め完全にその任務を遂行した人こそ實に高知和洋料理業組合組長の松岡寅八氏であり、そして氏はこの大會に於て滿場一致の推薦を受け最高の名譽職たる東京本部の理事に擧げられて大に面目を施したことであつた、斯くて松岡寅八氏の名は全國的に禮讃さるゝことになつた。

此の料理業界の巨人松岡氏の經營する得月樓は土讃線開通後益々天下的となり、四國は申すに及ばず、大阪、京都、神戸を始め、中國、九州地方から、中京、東京、東北、北海道、台灣、樺太にまで其の名が聞へてをる、勿論それは得月樓の有つ歴史や、建築裏別館に通るトンネルの如きや、設

備有名なる鉢梅の如きやが斷然光つてをり、大樓の大樓たる面目が花のごとく縣外人の眼に映する爲でもあらうが、一つには亦た第一世の寅八氏、第二世の寅八氏が立派な紳士紳商であつて、従業員の訓練が自からにして大樓式に出來てをり、他の樓と比較し斷然氣品が高いからでもある、得月樓創業の主たる第一世寅八氏は立志傳中の一偉人である、氏の傳記は寺石杜山氏の筆に成つたものだが、他日寺石氏が「續々土佐偉人傳」を著す時には氏の業績は必ずや其の中に收めらるゝであらふを疑はぬ。第二世寅八氏は、熊喜氏の名で著聞し市會議員にも擧げられたが第一世の逝去後襲名したものだ、氏が如何に第一世を徳とし孝道を盡して遺憾なきかは、潮江小石木山上にある第一世の莊嚴なる墓地を一見すれば判る氏は先代寅八翁の長男に生れ市立商業の前身高知商業學校に興び長ずるに及んで家業を繼承した、それは恰度日露戰役の直後で氏が二十三歳の頃であつた、然るに生れながらに聰明に、生れながらに抱負の大なる氏は海南第一樓の若大將を以て満足する能はず、料亭が社交機關として必要欲ぐべからざるを持論とし、その持論を實現すべく一族により合資會社を組織し、諸種の設備に、接客法に、調理方に改善又た改善の積極主義を執り、時代と共に推移する賢明なる大道を邁進したのである、そして今や功成り名遂げて自ら第一線より退き、長男寛兵衛氏が本店を擔當し、次息松喜氏は早大出身の秀才で得月花壇を經營し、從兄鹿吉氏は總監督者と

して痒ひところに手のとゞく妙手腕を發揮し、得月樓の名をして九鼎大呂よりも重からしめてをる得月樓は本店、中店、花壇の三店を包擁し従業員三百名を算する盛況であるが、先代寅八翁以來文字通りの温情主義をもつて従業員にのぞみ主従の關係親子の如く他で見える能はざる美風を存してをる、一例を擧ぐると昭和八年の最不況時代に三百名の従業員は自發的に賃金俸給の二割引を申出た、その時其の麗はしき心事を受け納れ一割引に止めたが、本年四月より舊の待遇に復せしめたので一同深く氏の義侠に感激したのである、氏は資性圓滿、血もあれば涙もある情熱の士だ、だから其の温情主義は能く徹底し得月樓の一大特色として美望の的となつてをる、得月樓は先代の時代より宮殿下、貴顯の方々が御來縣あらせらるゝ其都度、奉饌饗仕の御下命を蒙り、明治四十四年十一月、閑院宮殿下の御台臨をはじめ、今上天皇陛下が攝政宮におわしませし大正十一年御行啓のみぎり、山内侯爵邸において御饗膳を奉り、昭和九年再び閑院宮殿下に奉饌の恩命を辱ふし、昨年澄宮殿下御來縣の節も同様の御下命を蒙り、本年五月高松宮殿下の御來縣に際し茲に五たびの有り難き恩命を拜したので松岡氏は深く感激し沐浴齋戒して總指揮者となり、調理主任三好靜夫氏、同岡崎進氏、助手山中宗吾氏、同藤本秋湖氏を督勵し、奉饌の御膳部に殿下の御嘉詞を賜はり、無上の光榮に浴したのである、筆者は二世松岡寅八氏が茲に有終の美を濟したるを縣民と共に祝福し、こ

の一文を氏及び得月樓のために永久の記念たらしめたい。

氏の趣味は先代より傳統的で喜多流の謡曲を極めて堂に入り、山内公の使用してゐた能舞臺を拜領し現に秘藏してをる。

小松義卓氏

健全なる精神は健全なる身に宿る、古い諺ではあるが嚴として冒す事が出来ない、世の文化は此健全さを養ふが爲めにハイキング時代を現出した。本縣於けるハイキングの創始者は、小松義卓君である。小松氏が一度び之れを世に問ふや、吾れも／＼と共鳴する者多く、今日ではあらゆる階級を網羅して會員數百名を算し、回を追ふ毎に旺盛となりつゝ發達してゐる、而も小松氏の主唱するところのものは、實に日本精神の涵養であり、單なる娛樂的ハイキングではない。同會の發達する所以亦此所にある。

小松氏は、安藝郡井ノ口村の出身である。小學時代には首席を通して秀才の譽れがあつた。安藝三申一年級時代、折柄發行された實業之日本を讀んで成功者の立志傳に感奮すると、學校を退いて商業に志したが、空想と實際とは懸隔甚しく、忽ち失敗してペンヤンコとなつた。

一時高知署の巡查を拜命したことがあつたが見出されて丸一會社の工業部監督となり、勤務中、人間は輿問がなかる可からずと奮起上京し、中央大學に入つて苦學を續けた。大正十四年同校を卒業すると、現辯護士細川彦太郎氏等と共に辯護士試験を受くべく勉強中、遂に病に罹り、中途に之れを放擲して歸縣したが、此の病氣の体験が、言はゞ今日のハイキング俱樂部創設の動機であつたと言へる。氏は再び警察界に入つて京都に勤務し、初志貫徹のため受験勉強をしてゐたが再び三度び病魔の襲ふところとなつて遂に之れを斷念歸縣したが、それが愈よ、健康第一主義への發足となつたのである。直情徑行の人で苟も不正を許さざるの概があり、感激性に富んで他の困難を見るに忍びず、義侠、之れを救援するの肌で、竹を割つたやうな性質である。すべてに熱心であり、燃ゆるやうな熱烈さを有してゐる故に氏を知るものは信賴して氏の事業を援助する。氏の發行せる「旅の友」が有力なる人々の支援を有するの亦偶然ではない今後の發展も期して待つべく。氏の活躍も亦之れからである。

山西房次郎氏

土佐を代表する菓子は何かと問はれた時、子供でも大人でも異口同音に「金陵堂の松魚つぶ」を以て

答へるであらふ「松魚つぶ」は帝都復興博覽會において金牌を受領し爾來第二回國産調査會や、全國製菓共進會や、帝國實業獎勵會や、第六回より第十回に至る全國菓子飴大品評會等において一等賞や名譽賞の金牌を受領し文字通り土佐代表名菓の筆頭を占めてをる、高知市四ツ橋畔の金陵堂は實に山西房次郎氏と賢息磯吉氏の經營せる高知市切つての大菓子店で其の名は縣外にまでも知られてをる。此の金陵堂の創業者たる山西房次郎氏は慶應二年の生れ、香川縣琴平町の出身である、琴平は古くから煎餅の本場たさうなが山西氏は十八歳の時琴平で煎餅屋を開業したところ、偶々道路關係から裏町となつたのが發憤の動機となり志を立て、高知へ來たのである、當時高知の菓子界は驚く程幼稚であつたが、氏は露店商人を振り出しに明治廿二年常盤町に二間間口の小さい店を創めた、勿論徒手空拳の奮闘だから困苦欠乏に悩まされたが當時榎崎町で名を取つてゐた「大新堂」が氏の特長技術を買ひ、日給二十五錢を出すから來てくれまいかとの交渉を受けた、此の時代は米一升四錢、大工の日當十五錢と云ふ世の中であり、二十五錢は破格の優遇であつたが、獨立獨行で一旗揚げる大望を抱ひてゐた氏は斷然其の交渉を斥け、常盤町で家を替へること三回、替へるたびに店を擴張し、三回目には二階建の大きな家に引き移り、大正元年には四通八達の要路たる豊人町大鋸屋橋もとに發展し、昭和元年現在の四ツ橋畔に二階建の堂々たる店舗を新築し山西金陵堂の名を

して大高坂城よりも高からしむるに至つたのである。氏は時勢を見るの明があり、人の未だ見ざる處を見、爲さざるところを爲すと云ふのが獨特の成功術である何れの都市へ行つても名物の菓子は澤山あるが本縣の名物は犬つぶ、ケンピ等にて郷土色豊かな名物が無いのに着眼し松魚つぶを考案したのである、評判の(松魚つぶ)は犬正十三年に苦心して意匠登録及び登録商標を受け、昭和三年には更に土佐の名物珊瑚に因んで珊瑚糖の登録商標を受けて賣り出し、續いて土佐名物の蒲鉾に因み、鐵道開通前から『菓子蒲鉾』の登録を受け盛んに賣り出して之れ亦た好評を博し、更に縣外觀光客を對象とする七色七味の『土佐つぶ』を賣り出し、愈よ出で、愈よ新味たつぶりの(龍河洞菓子に意匠を練り其の名も龍河)と銘名し已に登録を受けたので近々賣り出すことに爲つてゐる、氏は時代の尖端を行く流儀で夫れが悉く中つたところを見ると其の頭腦のよさを知ることが出来るであらふ、金陵堂の名は縣外は愚か、米國にまで響き最近米國から見本を所望して來た事實がある、斯く名聲が天底的に普くなつたと云ふのも不斷の研究心が旺盛なる爲で全國の菓子商大會へは必ず出席して採長短補の人知れぬ刻苦を重ねてゐる。

氏の令息磯吉氏は明治廿四年生れ、市商專修科を卒業して家業を佐け専心勉勵し、磯吉氏の令息健次郎氏は城商の出身で當年二十六歳、これも熱心に家業を手傳つてをる、父と子と孫と三夫婦揃つ

ての朗らかな家庭こそ羨望の的であらねばならぬ、そして茲に特に紹介すべきは斯く成功の身分でありながら親子共に木綿の着物で活動してをる其の勤儉振りである。

趣味は新舊別々で房次郎氏は素人義太夫の名人、磯吉氏は旅行と登山などと承はる、山西金陵堂が明治製菓の縣下一手特約店たることは余りにも有名である。

エピソード

山西氏は中々の凝り性で昨年九月から使用してゐる新案陶磁器松魚型容器の如き態々三河の陶磁器釜元へ注文し、松魚型の意匠を凝らしてをる、最初注文したところ、三河の人は松魚の實物を知らないものだから不備の点多く肝腎の筋が入つてをらぬので、とうとう三回まで三河に出掛け、三日の出来上りでやつと満足した、この容器は中のつぶが無くなると、食卓上の容器、花瓶代用、茶器用菓子器、灰皿、床の置物或は香爐などに利用して頗る便利重寶に出来てをり一般から歓迎されてをる。

森木恒之助氏

土佐紙株式會社の沿革史に依つて土佐紙業界の名士森木恒之助氏の地位を瞥見するに重役在任期間表では中内松次氏と肩を並べ、大株主としては小谷順一氏と同列に在る、この名士も伊野精紙合資會社の創立當時には一給仕で先輩の恩顧を蒙り爾來累進して着々力量手腕を發揮し、明治四十年前後には土佐紙合資會社横濱支店長に拔擢せられ、大正四年頃歸郷し土佐紙工業會社の支店長を命ぜられ、後ち土佐紙株式會社と改稱せらるゝや同社の重役となり、次いで合併に依る日本紙業株式會社の取締役に擧げられ、斯くて功成り名遂げて後進に路を開くの賢明なる處世道を實行して昭和十年一月圓滿に隱退し會社の内外から其の進退を賞讃された、一給仕より身を起して資本金一千五百萬圓の取締役と爲つた其の操守は他の模範だと言はれてをる。

氏は溫雅謙讓の美德を内に藏してゐるので隱退後伊野信用組合の理事に推され地方のため盡力し町の聖人と崇められる風景は如何にも和やかだ、氏は書畫骨董に對する鑑識あり多くの珍品を藏してをる。

國吉八十一郎氏

坊さん簪のヨサコイ節で名高い播磨屋橋に有名な玩具店がある現在の店主は國吉八十一郎氏で明治三十一年生れと聞くから當年三十九歳、祖先是長宗我部元親の一門國吉備前守秦親綱で八十一郎氏は近綱より十六代目の嫡流に當るが玩具店を始めたのは先々代(十四代目)の徳三郎氏で明治二年五月に店舗をハリマヤ橋畔に開いた明治二年と云へば今から約七十年の昔である其當時徳三郎氏の取扱つてゐた玩具は舟、ゴマ、おきあがり、面、雛首、人形等約六十種の多數に上つて居り明治十五年頃迄が全盛期であつた商機を見るに敏なる二代目の徳三郎氏(襲名、八十一郎氏の父十五代目)は明治十七八年頃から早くも小型汽船で紀州灘や遠州灘の荒波を乗切つて上京し當時東京で流行の珍らしい日本で初めて出來たと云ふ銅版の繪本歌本や摘繪、錦繪、新式ゴマ、うつし繪、のぞき眼鏡等殆んど全種類を仕入れて盛んに賣擴めたものだから忽ちにして土佐玩具界の面目を一新するに至つた其中で繪本、歌本、摘繪は東京唯一の有名なる牧金と云ふ店から取つて遠く土佐で販路を拓いた爲め其牧金から大に感謝されたとの事である其後明治三十八九年の頃から時代文化の波に乗つて廣く東京、大阪、名古屋方面よりゼンマイ仕掛の最新式玩具や岐阜灯籠、花火、モール、電氣花

、東京雜、ゴム玉、折花、食料玩具、樂器、幻燈等を取寄せ縣下一手販賣と云ふ調子で大努力を拂つた結果是亦た忽ち土佐の玩具界を風靡し明治四十四、五年頃迄全盛を極めたが父徳三郎氏死後八十一郎氏は大正二年頃から大に郷土玩具の復活宣傳をなし名稱を變へ縣外へも輸出して昭和三、四年頃迄多大の賣れ行きがあつた現在では新式と郷土の兩玩具を取扱ひ盛んに販賣して居る

叙上の如く國吉玩具店は開業以來三代を通じて約七十年の古き歴史を有し常に土佐玩具店の元祖たるのみならず新式玩具の輸入者として郷土玩具の輸出者として土佐の玩具界に貢獻せることに實に夥しく依つて斯業界の功勞者として内地、朝鮮、臺灣、大連等に於て開催せる博覽會、展覽會等より功勞賞、有功狀、感謝狀、記念賞、褒狀等を授與せられたる事が實に二十數回の多きに及んで居る

當主八十一郎氏は資性濃厚篤實旅行に興味を持ち現在縣出品協會評議員、高知玩具商組合會計、高野寺總代等に擧げられ社會公共の爲めにも盡瘁してゐる

門田學氏

高知市の木材界には相當の人物がゐるが、傑出した人物は誰ぞやとの設題に對し、筆者は躊躇なくそれは材木町の住人、土佐木材同業組合代議員、評議員として颯爽と活動してゐる門田學氏だと答

へる。氏は明治三十六年安藝郡北川村田中次氏の四男に生れ、稍々長じて同郡伊尾木村門田惠之助の養嗣子に迎へられたが、大正十三年郡の先輩包國可治氏の知遇を得、慶應大學商工部に入り拮据勉勵してゐるうち、不幸病に罹り半途退學の已むなきに至り郷里に歸つて健康舊に復するや、包國氏の經營せる株式會社一加商會に身を委ね茲に事業家たる第一歩を踏み出し、昭和四年高知製材會社に轉じ同七年三月會社の解散と共に、翌四月斷然獨立して製材業を經營し、鋼鐵の意志と、明敏なる頭腦をもつて着々堅陣を築き遂に今日の隆昌を見るに至つたのである。

高知の實業界には人材を愛惜する感心な先輩がゐる、西山龜七氏、横山龜太郎氏の如き即ちそれだ此の兩氏は門田氏と一面識が無かつたに拘はらず、鋭脱せるその手腕を認め、西山氏の信任と後援とにより、相生町元堅田製材工場の跡に約七百坪を有する工場を設け、五十余名の職人を使役し、主力を官行材に注ぐ關係から秋田木材會社、山長商店等阪神地方に於ける一流商店の絶對信用を買ひ幾んど無資不同様の身で縦横に活躍が出来、グングン發展して製產品の二割は地元、八割は阪神地方へ廻し年産額三十万圓に達する盛況である、赤手空拳、所謂腕一本を以てこゝまで躍進した其の力は強い、だが併し氏今日の成功は第一に包國氏の恩誼であり、第二に西山龜七氏、横山龜太郎氏の特別なる庇護の御蔭だと深く感謝してゐる。

家庭には賢夫人との間に三男二女ある、氏の趣味は事業その物で製材のあの鋸の音が何よりの楽しみだと承はる。

飯田俊廣氏

日本一の神代杉で名高い長岡郡大杉村に「局長の家がある」

飯田實吾……………同 格 満……………同 俊 廣……………同 正 福

と父子四代相承け相繼いで土地の郵便局長を勤めてをる、蓋し全国的に珍らしい「局長の家」と思はるゝが、三代目の俊廣氏は明治二十一年十二月廿六日生れ、明治四十一年三月縣立農林學校を卒業するや直に高知大林區署に奉職したが、間もなく輻重兵に合格して入隊し、退役後の大正元年十一月嚴父の後を承けて杉郵便局長となり、昭和八年十一月令息正福君に局長を譲るに至る在職二十一年間、高知縣三等郵便局長會幹事、局長會部長、局務整理會長等々として終始したが、功勞多々ある其の中で特に郵便貯金獎勵の功顯著なるに依り貯金局長、大阪逓信局長より表彰せらるゝこと前後二回、傍ら余力を青年團の向上發達に用ゐる大正四年三月大杉村青年團組織さるゝや推されて其の團長となり在任十五ヶ年の長きに亘つたが此の間縣聯合青年團評議員、郡聯合青年團長、嶺北聯

合青年團長に擧げられ、尙ほ縣社會事業協會評議員、縣體育協會評議員となり、貯蓄獎勵並びに社會事業功勞の廉により郡長より表彰を受けるなど氏の閱歷は斷然光つてをり、從七位勳八等の位階勳等がタダでないことを思はせるに充分である。

氏の祖父實吾翁は徳川末期の番所頭を勤め、明治四年我邦に郵便制度の布かるるに及んで杉地方の郵便取扱役を命ぜられ、氏の嚴父格満氏は少壯戸長であつたが實吾翁の後を繼いで郵便局長となり正八位勳八等を賜はり退職に際して林逓信大臣より表彰を受けて居る。氏は資性豪放磊落、鬪志滿々、能く論じ能く語る趣味は俳句と書畫、号は霞洞、蓋し嶺北人物群像中の一異彩たるを失はない

上田熊吾氏

十人十色の人間を二つの色に綜合すると地味な人物と派手な人物と云ふことになる、派手な人物は虚名を好み、地味な人物は實力の蓄積に力める、灼々たり園中の花 早く開けば却つて先づ凋む、遅々たり潤畔の松鬱々として晩翠を含む我が尊敬する上田熊吾氏の如き乃ちその後者に屬する人物である。

氏は明治六年九月八日をもつて吾川郡伊野町に生る、嚴父は大工業を渡世としてゐたので氏は高等

小學校を卒業すると直に父の仕事を手傳ひ、高知の尋常中學校を一年間修業して茲に學校生活を疊み、斷然退學して益々大工業に精進し全魂をそれに打ち込んだのである、古今東西の偉人傳を讀むと大工から身を起し國家棟梁の材と爲つたものが尠くない、蓋し大工が自己の頭腦で構圖計畫しつゝ家を建てるのと、學者や政治家が天賦の創造力を應用して國家經綸の基礎工事に鴻業を樹てるのと其の行き方は一つである、上田氏が大工を以て身を立てんとした少年時代の職業選擇眼は流石に正鵠を射てをる。

四十四聯隊の兵營が朝倉に置かれる時、氏は二十五歳の若木の花であつた、そして兵舎の一部たる庖厨と浴室の建築を請負ふた、これが氏が請負に身を投ずる第一歩で、爾來各所の建築業に關係して次第にその實力材幹を認められ、同時に蓄財も出來たから明治四十五年町川仁仙太其他二三氏と協力して土佐精紙合資會社を創立し、後ち財界の波瀾に乗つて野中幸右衛門氏などが土佐紙業株式會社を起し土佐精紙と合併するに及んで、氏は會社を去り元の大工職に復し、鐵道省高知建設事務所の工事や丸一會社の増設工事などに持つて生れた天稟を發揮したが、土讚線開通により鐵道建設事務所が岡山へ移轉となつたので、後の保線區の仕事を引き繼いで現在に至つてをる。

此の間昭和七年渭南製氷會社を目論見、工場を幡多郡清水町に設け本店を自邸に置き自から同社の

社長を擔當してゐるが、最近同社が日本食料工業株式會社と合併の機運に向つてゐるとの事で製氷の前途に輝やかしき希望の光が閃々と照りつけてをる。

如上の如き事業の經過に依つて氏は不動の産を成し、第二世の活躍と相俟つて最早自ら第一線に立つて苦勞する必要も無くなつたので、請負業は隱居仕事に弗々やる位のもので悠々閑日月を楽しみ、全家庭を擧げて我が世の春の幸福譜を奏でゝをる。

家庭には一男一女がある、長男虎介君は城東中學校卒業後、神戸高等工業學校に學び建築科を卒へ一時高知縣廳に勤務してゐたが現在は文部省宗教局保存課に奉職中で當年三十三歳の少壯官吏、豫備工兵少尉の肩書を有する前途有爲の士である、本年七月中旬には國寶高知城の腐朽に伴ふ修繕調査の官命を帯びて視察のため歸縣したが、親子三代傳統的建築術の大才は三代に至つて万葉の花となり虎介君は全国各地の國寶建造物を専門的に調べてをる、同君の夫人は銘酒富士川で知らるゝ高知市の實業家中屋虎次氏の令妹と聞くが長女貞猪嬢は高坂高女卒業後山本重春氏に嫁し朗らかな新家庭を作つてをる。

上田熊吾氏の趣味は釣と小鳥で、藝術的の嗜好が趣味の上にも現はれてをるところ如何にも奥床かしい。

安藤治三郎氏

『中納言力餅』の名は高知市のみでなく東西七郡の津々浦々にまで人口に膾炙されてゐる、筆者は天神橋通りの本町二丁目角を往來する毎に、中納言力餅の名が頗る奇抜で且つ俚耳に入り易く、三尺の兒童でも一度聽ひたら忘れない宣傳力、記憶力百パーセントの名物力餅たることを思ふて主人公安藤治三郎氏の人と爲りに同じく百パーセントの興味を喚起する、土讃線が全通して土佐の名物が世に出る時節柄、四國の餅黨に力餅の存在を認識せしむることは縣産發揚のため極めて有意義のことだと考へる。

この安藤治三郎氏は讚州觀音寺町がその原籍地で審かに言へば御一新直前の慶應三年をもつて香川縣三豊郡觀音寺町に生れた讚岐男子であり嚴父安藤平次氏は綿商を渡世としてゐた氏が十四歳の時に死亡し一家は忽ち逆境に顛落の憂目を見、實兄は一家の窮乏を救ふべく七十圓の資金を調達して陶器商を始め九州方面を目指して行商に出かけたが不幸にして失敗し、資金の皆済が出来ず三十圓余の不足を生じたので氏は子供心にも奮起し斷然紺屋に奉公し一ヶ年十圓の金を全部實兄の借財拂ひに充て三ヶ年の月賦で債務を果すべく決心した、時に氏は十五歳の少年であつた。

然るに神は何處までもも氏に艱險を與ふるのみで天の其人に大任を授けんとするや先づ試るに艱險を以てすの文字通りを其の儘三年の凶作が打ち續き穀物代の支拂さへ不可能の状態と爲つたので僅かに五十錢の小遣を懐中し明治二十一年頃高知に來り血縁に當る大西爲吉氏に手頼つた、大西氏は當時本町二丁目の西角に於て餅商を營み中納言力餅の名で賣り出してゐたから早速その店員として約二ヶ年間忠實に働き、二十五歳の時、大西氏の下に本町筋二丁目に住居を定め爾來十有餘年間、鏡川の河原市に餅屋を營み獨立獨行、日夜精進に精進を續けた結果、艱難汝を玉にして氏の奮闘努力は次第に酬ひられ若干の蓄財を有するまでに漕ぎつけた、

然るに此の一方大西氏は折角の力餅が漸く悲運に向ひ、家主がその家を賣却することになつたので氏はそれを購入すると共に中納言の暖簾を譲り受け、本町筋より現在の場所に移轉して品質の向上と宣傳に力癪を入れ爾來四十年の歳月を重ねて遂に今日の成功を築き上げたのである。

大西氏は力餅の店舗を氏に讓渡し、後ち農人町で待合「うごん屋」を開店したが失敗に終り、更に動物興行に手を出し阿波に航行中、佐喜濱沖で暗礁に乗り上げ悲慘の最後を遂げたから、氏は深く同情し且は多年の恩誼に奉謝するため自宅の祭壇に氏の遺碑を建て其の靈を祭祀してをる。

氏も最早老齡となつたので嫡子庄太郎氏が氏を補佐し専ら外部の交渉に當つてゐる、庄太郎氏は春

喜夫人との間に三男あり長男進一君は海南中學四年在學中、二男禎彦君は市第三の六年、三男は當年六歳である。

川田豊太郎氏

川田豊太郎氏は明治二年二月十二日を以て高岡郡佐川町に生れ、同九年四月公立佐川小學校に入り同十四年十月縣立須崎中學校に學び佐川中學校に轉じ同十七年十二月同校卒業後、同二十三年八月縣立農學校に入り同二十五年卒業以上が其の學歷である。

農學校を卒業して三年を経た明治二十八年に早くも佐川町會議員に推された、これが公人生活の第一歩で翌二十九年十一月を以て佐川郵便局長に任命せられ、明治、大正、昭和の三時代に亘つて勤續し従六位勳六等に叙し高等官六等に待遇せられたが、昭和四年八月退官するに及んで時の小泉逓信大臣より三十有二年終始一日の如く斯業に盡瘁し拮据精勵、その効績顯著なりとの折紙附で積年の功勞に對し褒賞を受け同時に逓信協會名譽會員に推薦せらる、斯くて氏は地方の郵便局長として功成り名遂げ、天晴れ模範を示した譯であるが、その間

四國三等局長聯合協議會代議員、高知縣三等局長會副會長より進んで十五年間同會長を勤めたこと

とや、或は明治三十七八年戰役當時の功に依り賞勳局總裁より嘉賞を賜はりたることや、

又た各方面の公益團體に關與し地方の改善啓發に貢獻し大正五年縣知事より「資性溫厚志操堅實にして事を執る公平、苟も名利を求めず」云々の文辭をもつて多年の公共事業に對する功勞を表彰されたことなど錦上花を飾るものとして後世に傳ふべきものである。

「後世に傳ふべきもの」と云ふ感想の生ずると共に、茲に特筆大書すべき二つの大なる事績がある、その一つは明治四十三年、氏が銀婚式記念事業として自己所有地を開放して「和樂園」と稱する公衆遊園地を設け今日でも佐川櫻花三名所の一となつたこと、他の一つは天下に著聞する「青山文庫」その物である、青山文庫は明治四十三年一月、氏が自己の邸内に私立圖書館を創設して「川田文庫」と名づけ公開して社會教育に資し、十有六年の歳月を閲した後、人文の進展に伴ひ規模擴張の必要に迫り、大正十四年五月十日御大婚二十五年御祝典當日を以て財團法人青山會の事業に移し、新に本館並に書庫を建築し、川田文庫所藏の圖書七千冊を基礎として、佐川の生みたる大先輩であり、幕末志士中唯一の生存者であり、生ける國寶と稱へらるゝ元宮内大臣正二位勳一等田中光顯老公の特技により資金に併せて、畏き邊りの御下賜品及び公が多年心血を注ぎて蒐集されたる勤王志士の遺墨と、公の藏書一万數千冊を寄贈せられ、公の雅号に因みて「青山文庫」と改稱して公を總裁に戴

き佐川町の代表的人士十名進んで理事となり氏は館長の職に任じ枯据盡瘁以て今日の大を成したものである、青山文庫は現在の蔵書二万七千余冊に達し就中東洋古美術、歴史、國文學に關する稀觀の圖書充棟し、宏壯優美なる料裝陳列館には、明治、大正兩帝の御衣並に昭憲皇太后、今上、皇后、皇太后三陛下の御下賜品、歴代御宸筆をはじめ雲上の至寶を奉安して一般に拜觀を許し、更に幕末維新の志士の面影を彷彿せしむる遺墨數百点を陳列し、附屬郷土博物室には郷土關係の歴史資料、化石、珍植物などの標本を備へ、其の質に於て斷然超優越を誇り今や全國無比の特殊圖書館として名聲を馳せたる青山文庫は、昭和十年八月十日澄宮崇仁親王殿下台覽の光榮に浴した新記録を作つたのであるが、この青山文庫こそ實に川田氏の生命で、氏が後半世の血と魂とは之に打ち込まれてをる、だから青山文庫を語るは即ち川田氏を語る所以、左に文庫の總裁田中光顯公志納ならびに寄託の貴重品目録を掲載する

貴重品目録

青山文庫實藏

- 一 明治 天皇 御下賜 御齊服 一 領
- 一 明治 天皇 御下賜 御寢衣 一 頰

- 一 明治 天皇 御名御璽 任宮内大臣宣下狀 一 通
- 一 明治 四年 正月 任大藏少丞宣下狀 一 通
- 一 明治 天皇 御下賜 御紋章附銀製盛花器 一 個
- 一 明治 天皇 御下賜 御紋章附銀製花瓶 一 對
- 一 明治 天皇 御下賜 御紋章附蒔繪文庫並硯箱 一 組
- 一 明治 天皇 御下賜 赤阪離宮寫眞帖 三 冊
- 一 明治 天皇 御下賜 名古屋離宮御襖寫眞 四十六枚
- 一 明治 天皇 御下賜 仙洞御所御庭寫眞 四 枚
- 一 昭憲 皇太后 御下賜 沃懸地蒔繪手箱 一 個
- 一 大正 天皇 御下賜 御軍服 一 領
- 一 大正 天皇 御宸筆 四 通 一 卷
- 一 大正 天皇 御下賜 御紋章附蒔繪文臺並硯 一 組
- 一 今上 天皇 陛下 御下賜 御紋章附銀製花瓶 一 對

- 一 今上天皇、皇后兩陛下御下賜 巖上龜置物 一 基
- 一 皇太皇陛下御下賜 鷄置物 一 基
- 一 皇太后陛下御下賜 小型蒔繪硯箱 一 個
- 一 後伏見天皇御筆以降 在竹帖 附金枝玉葉集二冊 九十二葉 一 冊
- 一 歷代御宸筆御短冊和歌 御懷紙和歌 一 冊
- 一 靈元天皇御宸筆 御懷紙和歌 一 冊
- 一 竹田宮御殿寫真帖 一 冊
- 一 有栖川宮熾仁親王御親翰 二 卷
- 一 有栖川宮威仁親王御親翰 六 卷
- 一 小松宮彰仁親王御親翰 一 卷
- 一 久邇宮邦彥王御親翰 一 卷
- 一 各宮殿下御親翰 竹園芳翰 十 通
- 常宮昌子內親王 一通 周宮房子內親王 一通 有栖川宮威仁親王 一通 伏見宮貞愛親王 一通 久邇宮邦彥王 四通 梨本宮守正王 一通 閑院宮載仁親王 一通

- 一 各宮妃殿下 御短冊和歌集十三葉 笑の葉かせ 一 冊
- 有栖川宮妃 伏見宮妃 山階宮妃 賀陽宮妃 久邇宮妃
- 久邇宮多嘉王 梨本宮妃 朝香宮妃 北白川宮妃
- 竹田宮妃 閑院宮妃 東伏見宮妃
- 一 周宮房子內親王御親翰 一 卷
- 一 山階宮妃常子殿下御親翰 一 卷
- 一 北白川宮妃富子女王御親翰 一 卷
- 一 北白川宮滿子女王殿下御書 一 軸

川田氏の趣味は讀書と書畫

第二世信敏氏は昭和四年八月、嚴父豊太郎氏の局長退官と同時にその後を繼承し、現に佐川郵便局長として劇務に携はる傍ら、亦た青山文庫の司書を擔當して嚴父を補佐してゐる。

上田虎次氏

上田虎次氏は現在伊野町長として全町民から神様の如くに尊敬せられてゐるが、氏は嘗に伊野の上田虎次氏でなく、高知縣の上田虎次氏であり、縣會の副議長をも勤め、高知商業會議所副會頭にも

推され、高知市會議員に當選したこともある、一言にして氏の人と爲りを盡せば常に明朗常に、無我、竹を割つたやうな胸襟の持主であり、従つて如何なる方面にも敵がない、土佐の名物男として大に持てる所以でもある。

氏はその性格性情が多角形である如く、その趣味も亦た多角形で書畫、骨董、淨瑠璃、演藝、俳句、盆栽、活花、劍舞等々多々益々辨するの概がある、就中演藝にかけては縣下劇通のナンバーワン醉粹坊魯半痴の名は余りにも有名だ、淨瑠璃も疾くに素人の域を脱し竹廼屋巴といへば斯道の權威者として尊重せられる、俳句も一家を成し翠松軒白鶴の俳号は伊達でなく鶴九阜に啼く品位を備へてゐる、行くところとして可ならざる莫しとは蓋し氏の謂ひか。

氏は實業家として人氣の焦点に立つたことが久しい、試みに既往の肩書を擧ぐれば

株式會社高知座社長、高知洋服株式會社々長、富士漁業株式會社取締役、三和汽船株式會社取締役、高知電氣株式會社取締役、高知瓦斯株式會社取締役、土佐園藝株式會社取締役、土佐帆船株式會社取締役、土佐牛乳株式會社取締役、徳島水力電氣株式會社取締役、高知製材株式會社監査役、阿波鐵道株式會社監査役、株式會社堀詰座監査役、高知市水産會々長、伊野上水道株式會社々長、高知縣商工聯合會々長、高知縣稅務署管内郡營業稅調查委員、丸龜稅務監督局内營業稅

審査委員、高知縣稅務署管内相續稅審査委員、同土地賃賃價格調查委員、高知縣信用販賣購買利用組合監事、土佐紙株式會社取締役、土佐紙工業株式會社監査役、土佐製材株式會社々長等で一々記憶することが出来ない程澤山で亦た以て其の隆々たる徳望を想見するに足るのである現在は日本赤十字社高知支部商議員、大日本武徳會高知支部常議員、高知稅務署管内所得調査委員、高知地方森林會議員、土佐山林會議員、高知縣耕地協會副會長、伊野町耕地整理組合長、高知縣經濟更生計畫委員、土佐中部木炭同業組合代議員、土佐木炭組合聯合會常務委員、伊野町長、伊野商工會々長、等々である

氏は又た有名な子福長者で長男は京都帝大經濟部卒業後大學院に入り昭和十一年四月大阪昭和高等商業學校の教授と爲り、二男は桐生高等工業學校卒業現在横濱高等女學校教諭、三男は高千穂高等商業學校卒業後日本紙業株式會社に入り神戸輸出部に在勤、五男は東北帝大工科卒業後川崎市富士塗料株式會社に就職、六男は臺南高等工業學校に在學中

西岡寅太郎氏

安政四年七月十七日高岡郡宇佐村に生る、父庄太郎氏は雜魚商であつたが家は貧乏に喘ひてゐた、氏は七八歳の頃から父に従ひ附近の村落へ行商を始め寒暑を厭はず精勵したが十三歳の春を迎へた時、一家の生計は悉く氏の双肩にかゝつたので奮起して家運の挽回を圖るべく明治の初年以來高岡郡上ノ加江、久禮、佐川方面へ雜魚を賣り歩き、二十歳に達するや吾川郡北部に進出して販路を擴め、更に時々幡多郡柏島方面へ生魚買ひの船頭を兼ねて往來し其の間饜節の製造に志す傍ら藍、甘諸、棉等の試作を爲し八面六臂の活動をつゞけたが併し此等の仕事は相當の資本を要するので中止し、再び吾北の行商に粉骨砕心した結果、而立の三十歳に至り家政に春光を認め郷里宇佐に住宅建築を思ひ立ち將に工事に着手せんとする際偶々火災に罹り家財用材を焼失して無一文の境涯に轉落したが、剛毅にして奮闘心に富む氏は困難益々甚しければ益々多く勇氣をあらはすの勇猛心を催揮し、この火災を一轉機として斷然墳墓の地を去り全家八人吾北下八川村弘瀬に移動して一室を借り日夜行商に従ふうち、明治二十四年日用雜貨店を開き、魚類の小賣と製紙原料類の取扱をも兼ねたが之れが實に今日の大を成す第一歩と爲つたのである。

「忍の一字は衆妙の門なり」氏は下八川に開店後眞に驚くべき忍耐力をもつて店の經營に涙ぐまじき努力を拂ひ、忍苦又た忍苦、奮闘又た奮闘、爾來三十有余年にして漸く素志を達成し遂に宏壯なる

現在の大店舗を建て、伊野町にも豪華な支店を設け、製紙原料商の傍ら酒造業を兼ね、今や川畑九町一反、山林三十町、宅地七百坪の外、十數軒の貸家を有し資産實に數十萬圓と稱せられ吾北屈指の資本家に指を屈せらるゝに至つた、

氏が成功の要素は、放漫を戒め着實を旨とし、勤勞と信用を唯一の資本及び家憲とした其の實行力にある、そして入つては親に孝、兄弟に悌、且つ親戚故舊に厚く、出でゝは社會公共の爲め最善を盡すなど悉く世の模範となるものゝみであるから敬服せざるを得ない。

氏は亦た子福長者で三男は西岡里吉氏、四男の寅四郎氏は稀に見る實業の天才であり伊野町を本據として花々しく活躍し町會議員に推さるゝこと既に二回、積善の家に餘慶ありとは蓋し氏の家庭の爲に作られたる言葉であらふ。

井上武重氏

新市町の「魚竹」といへば高知市内各階級の家庭間に知られてをる有名な仕出屋だ、主人公の井上武重氏は未だ三十七歳の青年で此の青年が一本の庖丁で經營せる「魚竹」があれ程までに評判を取つてゐるかと思ふと、人間の力と云ふものは實にえらいものだと思つて感服させられる。

氏は香美郡赤岡町の出身、十歳の時高知へ来て御櫓の楠瀬で仕出し料理の初稽古をしたが當時は楠瀬の全盛時代で従つて見習生たる氏は各階級の家庭へ頻々出入りすることになった、然るに楠瀬の主人の仕込み方が餘りに厳しいので、とうとう辛棒が仕切れなくなり赤岡の生家へ歸つた、すると兩親から大目玉を頂戴して復た泣く／＼楠瀬へ戻つたが、此の時から大勇猛心を發揮し如何なる困苦にも打ち克つてみせる決心をし最後は楠瀬支店の料理部を擔當するだけの信用を得、更にその得意をもらふて新市町に「魚竹」を開業し今日の隆昌を呈するやうになつた、細君は楠瀬の親戚の者で中々の俐口ものだから内助の功も大きい譯、従つて最近家も増築して設備万端完璧を期しており、サラチの如き實に六百枚の用意があり、何百人の注文を一時に引受けても極めて迅速に調達することの出来るのは此の「魚竹」だと言はれてを程だ、だから北街一圓の得意のみならず知事官舎をはじめ、官吏、實業家方面より愛顧を受け益々發展の途上にある

氏は別に趣味と云ふ趣味はなく、自己の職業に忠實と云ふことをモットーに組合も斷はり板場仲間の交際などもせず、全力を商賣道に打ち込んでをる。

秋田芳馬氏

吾川郡八田村の出身、十六歳の時から紙業の權威長野合名會社伊野支店に入り當時の支店長一柳喜之助氏の薫陶を受けたが一柳氏がその後、高知信用組合の組合長と爲るに及び其のあとをうけて支店長に昇格した、そして大正十五年長野合名會社が解散となり合資會社に變更せらるゝや氏は依然として伊野探題で丸一、上田と鼎立する勢力を有し現に長野の代表社員である。

氏は温厚篤實の勤勉家として聞へてをり土佐紙業組合の評議員や伊野町會議員にも擧げられてをる本年五十歳、家庭には一女一男あり長女は縣立第一高等女學校出の才媛、氏の趣味は鮎の投網、謡曲、圍碁などだと承まはる。

吉田具司氏

高岡町鳴川の出身十七歳で出高し土佐電鐵に入り日給十八錢を振り出しに技術部見習の電工に進み十九歳にして大阪電燈に轉じ更に同市金平町の製作所へ傭はれ約二ヶ年間を送つてをるうち徴兵適齡に達し、その後京都奥村電氣製作所、大阪砲兵工廠電氣部等にて腕を磨き、益々研究心の高潮と共に上京して専心向上の一路を辿り大に得るところあり大阪川北電氣企業社に聘せられ尙ほ研鑽怠らず二十八歳の時高知に歸り金子橋に電氣店を開業したが、小成に安んずる能はざる氏は再び上阪

し川北の名義で店を開き三十三歳の時復た歸縣して帶屋町に開業、斯くて次第に信用を博し土佐バス、野村組自動車部を得意として輝やかしき發展幸運を掴み、昭和八年徳島に進出して驛前に支店を設け母堂と長女の二人が職工を使ふて、高知の本店と徳島の支店と相呼應して躍進の波に乗つておる。

氏は資性剛直、従つて信用が厚い、趣味は八面鋒だが就中刀劍と盆栽が好きで、それに亞ぐのが狩獵と釣りである、頭腦の働きが冴へてるので農家用一輪車リアカーの新案特許を出願中だと聞く。

瀧川知章氏

明治時代殆ど廢れてゐた蒔繪が大正の末期に復興して文展に美術工藝の一課目として採用せられ昭和の現代に及び漸く全国的に活氣を帯びて來た、だが事實上中央に於てこそ二三名家が宗家の流を汲んで僅に餘端を保つてゐる有様であるから地方には殆んど見るべき作家がない、恚うした關係が斯道衰退の原因かも知れない、所がこれについて甚だ意を強ふするのは瀧川知章氏の存在である。

氏は明治二十四年四月を以て東都下谷區櫻木町に生れ、幼時祖父母に伴はれて土佐に來り鐵砲町に止まり永住したもので技術は祖父寛齋師自ら手を取つて教へてゐる、寛齋師は明治四十五年八十の

高齡で逝去したが、何でも徳川の直參の一人で幕府の末期好めるまゝに文政天保の時代に於て蒔繪師として胡民、古満環齋棍川清兵衛、半遊齋等の如きは江戸幕府の名工としてその名耳を馳したがその一人である古満環齋を師として蒔繪を習得し當時噴々の名を博してゐた一代の名匠であつた。氏は祖父の丹精と自己の熱心から小學校時代より繪筆に親しみ環齋と號し一家を繼いだ二十三歳の頃には市内は勿論東西郡部の好事家より聲望を謳はれてゐた、然るに名人氣質の彼は氣持の向かない限り一年でも二年でも筆を採らない、それで彼の作品は僅少であると謂はんよりむしろ皆無である、殊に破損の修繕などの依頼者が多いので近時専ら古美術陶器、茶器茶道具の破損修繕を專業としてゐるがその技術に於ては縣下唯一で他に比肩する者なく氣の向かない限り高價の器物に至つては數年を経るも容易に手を下さない。

恚んな調子だから寡慾恬淡金を得れば忽ち酒に代へて太平樂をならべその行には甚だ奇なるものがあつたが家をおさめていさゝか當年の意氣を缺ぐといはれてゐる、因みに洋畫の大家石川寅治氏は氏の血縁に當ると。

趣味は盆栽、骨董その他で詩吟は圓嶺と稱し最も熱中してゐる。

石坂岩太氏 石坂勝英氏

近時本縣に於ける鐵工業の殷盛は驚くべき程で従つて其の技術も優秀で規模の大小こそあれ設備其の他の内容に至つては大都市のそれに比して敢て遜色がない、就中高知市常盤町石坂鐵工所は斷然群を抜ひて光つてをる。

石坂鐵工所の主人公石坂岩太郎氏は本年四十六歳の働き盛り、氏は今から七、八年前即ち昭和三年頃までは城見通り二番小路の荻田古鐵商店の一隅を借り受けて些やかな營業に従事する一介の鐵工修繕商に過ぎなかつたのであるが、それが十年を出でずして今日の如き大工場の主人公となつたその契機は、氏の手腕を白井商事株式會社の認むるところと爲つたからである、一介の室借り修繕工の實力を認めた白井商事も流石だが、亦た以て氏の手腕が如何に卓絶してをつたかを知るに余りがのらふ。

斯くの如き因縁に恵まれ、氏の工場は白井商事の指定工場として現在の常盤町に磐石の基礎を据へたのである、そして氏が不斷の奮闘努力は果然工場の躍進飛躍となつてグン／＼發展し俄かに世人

の注目を引くやうになり、別に發動機の製作と其の修繕に至つては縣下第一の折紙附と爲つてをる賢息石坂勝英氏は當年取つて二十一歳、花ならば蕾の時代だ、氏は昨年縣立工業學校を優秀の成績にて卒業するや、嚴父の事業を繼承する志を立て、發動機並びに重工業の原圖製作修業の爲め大阪方面を始め關西地方に出向して學理と實地の兼行で約一ケ年の修養を積み、今春歸高するや嚴父を補佐して製圖のかたはら工場内部の統制に當つてをる。

斯の父にして斯の子あり、勝英氏は稀に見る寧馨兒であり事業にかけても出藍の譽れを耳にする、斯様に父子相携へての經營振りに工場内は何時も春風が吹き、現に同工場に十一年の勤続模範職人谷岡秀喜氏など現在の給料は九十圓で往年の好況時代と變らぬ待遇振りである、此の一事で勞資協調の如何に圓滿に行はれてゐるかを朗らかに認める、蓋し石坂氏人格の反映で酒色を絶対に慎み、事業その物が趣味で使用人を家族同様に可愛がる雪の如き高潔心こそ實に尊敬の極みである、だから弟子十一人、職人五人何れも石坂氏を親のやうに慕ふてをる、この愛の結晶たる石坂工場の名聲は高知市は勿論、長濱、御疊瀬、浦戸、種崎を始め東は室戸、安藝、西は須崎幡多方面に迄も宣傳せられてをる——我等は石坂氏父子に至大の敬意を表する。

門田福壽氏

縣下唯一の石版印刷専門の誠進堂門田福壽氏の名は高知市の印刷界を壓するかの觀がある氏は長岡郡大篠村大桶の産年四歳の頃父が大工職の都合上高知市の人となり小學卒業後文具印刷店（主家は約十年前廢業）に奉公しているうちに將來印刷業を以て身を立てんと志し大正四年八月二十二歳の時三十五圓の資金で本丁筋一丁目に職工一人の微々たる店を始め茲に將來への第一歩を踏み出し滿三ヶ年間一生懸命に働いたけれども生活費に困る様な中で漸く五十圓の金を持參して大阪に上り専心印刷業の研究に没頭し刻苦精勵幾多の苦難を経て大に得る所あり歸縣した時が恰度歐州大戰の余波を受けた好況時代出現の初期であり氏はその波に乗つて酒造界が小賣用の容器を樽詰より瓶詰への改革期に當りレツテル使用率が約卅倍となり其を全般的に引受け大阪仕込みの新智識新技術を應用したのが大當りで盛んに歓迎せられ又商店官廳、會社等より注文殺到晝夜不休の繁忙を極め善戰健闘全力を石版印刷に傾盡した結果多少の蓄財も出來たので大正九年最新式機械を購入して發展の内容を整へ大正十一年に本丁筋から本町に移轉して次第に地盤を築き昭和九年中島町二丁目現在の場所に二百坪の敷地を購入して斯業に最も適當したる工場、店舗を新築しオブセット輪轉機械も増

設して二十四五名の職工を使用し縣下全般に亘る取引は日に月に隆昌を加へ文字通り躍進の繁昌譜を奏してをる斯くて門田誠進堂は名實共に縣下第一の石版印刷業となり土讚線開通後はその名が隣縣に知らるゝに至り技術の精巧が呼び物となつて現在は縣外酒造業者よりも注文を受けてをる、何んと颯爽たる飛躍振りではないか氏は本年四十三歳趣味は釣、家庭には夫人との間に二人の子寶があり立志成功傳中の一人物なりとの折紙を附ける眞價たつぷりの自助的男子たるを失はない。

中島和三氏

慶應元年八月一日安藝郡土居村に生る、明治十六年縣師範學校卒業後大井小學校訓導となり、十七年井ノ口小學校に轉じ、同十八年退職後一時安藝郡役所御用係を拜命したるも官制改革により解職となり、同二十年再び教育界に入り土佐郡潮江尋常小學校より第一高等小學校に轉じ、二十四年幡多郡視學に轉任、三十年高知縣屬となり學務課に勤務したが四十一年香美郡長となり、大正元年吾川郡長に轉じ勲六等端寶章を下賜され、同三年高等官五等に叙し從六位に叙せられ、同年十月高岡郡長に轉じ同六年十二月三十四日一級俸を下賜、依願免官と同時に高知市長に推され就任、同十年十二月任期滿了、十一年三月高知縣教育會長に當選引續き現に勤務中にて同十一年七月高知信用組

合長に當選、大正十四年四月辭職、同十二年十月縣會議員に當選、昭和二年十月任期満了となり同十四年四月水道工事敷設事業並に須崎埋立工事完成の爲め所望されて高岡郡須崎町長に就任、昭和二年六月退職し、昭和四年一月八日城東商業學校長に就職、同七年一月退職したが高知市長、須崎町長、並に高知市水道工事敷設事業、高知信用組合創立、或は御大典記念運動場建等の爲め盡瘁したる功勞により金員、記念品感謝状を受けてゐる、謹嚴そのもの、様な氏は現高知縣教育命長の傍ら高知信用組合、土佐女學校協會、城東商業學校等の理事として携はる、趣味として嘗てヘボ碁を樂しんだことがあるが現在には別に無い。家庭には二男あり長男精一氏は大阪市役所技師、次男清君は南海鐵道株式會社にそれ／＼奉職中。令兄は回天窟で有名な中島氣峰氏、高知日報の主筆時代から日本精神を高調することに於て一貫した熱血漢、國民新聞の參事として中央の操觚界に重きを成したことは人の知るところ、今夏二豎の侵すところとなり易簣されたのは惜しむべき極みである。

谷 流 水 氏

文久二年十二月十四日土佐郡江ノ口村に生る、氏は十一歳にして郷國を出で自由黨壯士として殆ど縣外に奔走する所ありしが一度歸國し明治十六年板垣氏の岐阜遭難當時二十一歳の齡を以て岐阜に

見舞ひ諸國を轉々して同年歸國後二ケ年餘を土佐に送つたが壯士では飯が食へないので上京し仙石氏等の關係事業により鐵道局に雇となり測量の職に當つたがその後海南鐵道會社に入り明治三十八年病氣のため歸省之が療養に八年間を釣魚に暮し身体の強健につれ再び上京し播州鐵道に大正五年まで勤めたがその後歸縣し大正六年一月土佐銀行の創立さるゝや入りて管理部長となり後常務取締役として一ケ年その職に在りしも退いて大正十年土佐貯蓄銀行の創立と同時にその重役となり現にその職に關係し今日に至つてをる。

その間山内神社建設の中心人物として活動をつづけ現に山内神社奉贊會の會計を勤め傍ら瑞山神社の建立に老齡を事とせず活動してをるし、尙ほ高知武揚協會、土佐史談會長となつて努力を惜しまない。

趣味は壯年より鐵砲を好み關西方面にはその名手を謳はれてゐたが近來専ら釣を樂しみ玄人筋で嘗て往時仁井田沖へ釣魚に出掛け波浪のため船が轉覆の憂目にあつた逸話が傳へられてゐるほど釣好きである。

宮本楠保氏

明治二十五年六月十一日土佐郡森村の素封家に生る、大正二年三月縣師範學校を優秀の成績で出た俊才で卒業直ちに郷里土佐郡土居尋常小學校訓導となり二ヶ年奉職後師範附屬小學校に轉じ大正八年迄教鞭をとり同年三月長岡郡杉村准教員養成所に二ヶ年その後高岡郡須崎町准教員養成所に奉職二ヶ年轉じて高岡郡高岡高等小學校校長となり大正十五年九月縣視學となり縣教育課に勤務すること二ヶ年にしし旭小學校長となり昭和十一年九月市教育課長となる。

性温厚篤實頗る頭腦明晰にして教育課長として適任者と稱せらる。

家庭には夫人との間に一女信さんあり昨年第一高等女學校を卒へたので養子を迎へた、養子久喜氏は今年高等師範理科部を卒業し、現に洲本中學校に奉職中である。

山本博章氏

幡多郡佐賀村の産、若い時代には村で三等郵便局長をやり、後ち高知へ出て來て菓子製造もやつた、そして氏の爲に最後の事業として與へられたのが土佐人形(一名九重人形)である。

潮江橋の南詰に在る人形の工場には百八十名の従業員を使用し、一日二千四百個の仕上りを製造してゐる、高知には三十名程の同業者がある様子だが、氏の人形は質に於て量に於て斷然群を抜ひてをり、氏の製造品が土佐人形の代表となつてゐる。

氏が此の事業に係した動機が振つてをる。昭和四年十一月ある製造者から縣外への販賣方を依頼されて關東關西一帯に亘り注文をとり歸縣してみると出發前契約の値段に相違あるため發憤し店頭で販賣してゐるものを四十五本買つて來て研究を続け遂に自分で製造するやうになつたのが初めて開業する動機であつた。以後研究の暇をみては製品を提げて東京柳島、大阪千日前の夜市で演説交りの販賣戦を展開したが他の夜市商人の壓迫を受けて非常苦しい目に遭つた相だ。その後絶へず研究を続け品質を向上し全國行脚によつて販路を開拓したが土讚線開通により劃期的に今までブエルに包まれてゐた土佐の實體が縣外人の眼にふれる様になつた結果、縣市産業關係當局者達の全國各地の催しへの出品斡旋もあり今まで顧りみなかつた人まで人形さへ作れば賣れると思つて作り初めたのが品質を低下せしめ過剩を來す原因となつた。現在全國津々浦々で見受けるとはいへこれは賣れ残つてゐるからであつて顔は剥げ落ち髪は亂れたものが軒につるされてゐる状態であるが大衆玩具といへば上下を通じて賣れるもので商店でも店頭の大座に置いて呉れる様な製品にならねばなら

ぬ。現在では悲観すべき状態であるがこれは販賣統制を圖る前に生産品の品質統制をはからなければ本年度の全國各種催し物への出品中賣上總金額の四割を占めた土佐人形の聲價も落日の如く消え去るのではないかと氏は心から嘆聲を洩らしてをる。

氏はアタマも好い、雄辯でもある、従つて議論に筋が通る、理髮組合の顧問時代には市會議員の候補の呼聲があつたが、市會へ押し出しても斷じて恥かしくない人物である。

坂本嘉治馬氏

坂本嘉治馬氏は慶應二年三月十一日を以て宿毛町字坂下に生誕された、嚴父は當時の村長職にあつた人であるがもと藩老伊賀氏に仕へて足輕二人扶持をうけた有祿の農家であつた、明治十七年一月年わづか十八、父君戌辛役の北越戦地より歸隊後大病にかゝつた時に一命を救はれた恩人でその頃會計検査官であつた酒井融氏をたより宿毛より單身上京、當時政界の先覺者として大隈重信侯のイアクに參し掌事として改進黨の結盟を成就し、また東京専門學校をはじめ今の早稲田大學の礎石を築いた功勞者の一人たる幡多郡の先輩小野梓氏に師事しつゝ、勉學のかたわら小野氏がその理想とす政治社會教育における第一段の試みとして經營する出版書林東洋館（神田小川町）の店員となつた

しかも小野氏は公事多忙、加ふるに晩年病漸く繁く東洋館の經營は殆んど擧げて弱冠坂本氏の負荷するところとなつたのである、いくばくもなく明治十九年二月小野氏逝ひて館の事業も亦た廢絶したが坂本氏は屈せず飽くまで先師の遺業を大成する志を決し、小野氏の義兄日本鐵道會社々長小野義真氏により、最初金二百圓の資本を得て、明治十九年三月一日はじめて神田裏神保町九番地に家賃三圓六十錢の富山房を創設したのであつた、時に二十歳、明治廿九年小野氏との合資組織となり三十五年小野氏の出資全部をゆつり受け全然坂本氏一個の經營となつた。

爾來四十七年、その間數度の火災及び財界の恐慌に遭遇しながら百折不撓、常に小野氏の遺した、「益世報効」を社是として今日に至り富山房の基礎を確立するに至つた、今や富山房はその最も久しき信用と、光輝多き歴史をもつて東洋の代表的な大書店の班にあり、刊行するところの圖書は實に三千餘種の多きに上り、亦た數百種に上る男女中等學校の教科書は始終堅實の努力によりて統一せられ、教育界に於ける信頼甚だ篤い、坂本氏は本年七十二歳年と共に益々健かに能く青年の熱意と氣力を失はれず、常に新しく遠き出版事業の計畫に老の至るを知らない、關係事業としては合資會社富山房に社長たるほか、さきに株式會社國定教科書共同販賣所、日本書籍株式會社等に各取締役をつとめ、現在は財團法人原田積善會理事、中等教科書協會々長、日清印刷株式會社監査役を兼ね

られてゐる、先年ロンドン留學中に前途頗る有望なる次男金太郎氏の夭折を見たことはまことに悼惜の至りに堪へないが、長男守正氏、三男榮一氏ありて家業を扶翼し、現在の社員一百二十餘人、此の多數の社員が克く融和親睦、まことに大家族のごとく、此等の社員は坂本氏を父として崇敬してをる、二百圓の資本から一千万圓の大會社に造り上げた坂本氏の力行こそ、世の青少年を奮起せしむる絶好の立志談にあらずして何んぞ。

鈴木彌太郎氏

氏は明治十五年十月九日を以て吾川郡富岡村に生る、明治三十七年三月師範卒業後小學校本科正教員免許状を受領し高知縣師範學校訓導に任じ明治四十二年吾川郡池川尋常高等小學校長になり同池川村立裁縫女學校長を兼ね同年農林學校農林別科を修業す、大正四年吾川郡長濱尋常高等小學校長兼長濱村立裁縫女學校長となり同七年一月安藝郡視學、十年五月高知縣視學となり内務部教育課に勤務し、大正十五年公立高等女學校長に任じ弘岡實科高等女學校長となり昭和七年三月吾川郡弘岡農業補習學校教諭兼同校長となつた。十年三月弘岡高等小學校長を兼務し十一年三月十二日學校視學委員を委嘱され高知縣擔當となり十一年四月願に依り本職兼務を免じ同年五月高知市に入り社會

教育主事となり現在に至つてをるといふのが氏の閱歴の大要である、氏は昭和七年十一月勳六等に叙し瑞寶章を授けられ次で同八年六月正六位に叙せられてゐる。性イゴツなれど正直で通つた人格者だから危なげはない。趣味は動植物の研究で高知博物學會の會員となり之が研究を唯一の樂としてゐるらしい。

濱川金十郎氏

明治十九年十一月を以て安藝郡田野に生れ、現在は高知市内有数の事業家として重きを置かれ、濱川商會、マルキン自動車商會等を經營し、帝國商船株式會社の取締役とも爲つてをるが、氏が代表取締役として縦横に活動してをる堺町の株式會社濱川商店は其の内容が宇田友四郎氏と野村茂久馬氏の事業をエキスしたやうなもので乃ち海運部、陸運部、倉庫業及び金融並びにその仲介業、賣買業、貸自動車部が事業の主体を成し、海運部は全国各地はもとより朝鮮滿洲國行きの貨物を取りあつかい、陸運部は全国各地行き鐵道貨物の一般取扱をその職能とし四國四縣の主要地、高知縣内の各地トラック貨物取扱にも最善の努力を拂ふてをる、此等陸上の運送部は當分「四國運送合資會社」の名をもつて取り扱うさうだが其の會社の所在地は廿代町だ、賣買業の内包には木材、製材、セメ

ント建築材料の外、動産、不動産、有價証券類までも含有してをる、以上の營業を總括する株式會社濱川商店は資本金が拾萬圓で重役には代表取締役濱川金十郎、取締役宇田耕一、同川崎庄五郎、同畠中義雄、同片岡武雄の諸氏が名を連ねてゐるので事業の發展は無限に約束せられてをるが氏の事業は尙ほ之れ以外に農人町の肥料店や、土佐船主自給組合などもある氏の嚴父は濱川金太郎氏、嚴父の時代から材木業や廻漕業をやつてゐたもので事業家の血は長男の丑太郎氏、次男の茂助氏、三男の金十郎氏に遺傳し、茂助氏は宇田氏に見込まれ其の片腕となつた逸材だつたと聞くが、金十郎氏の度胸と手腕と眼識とは亦た夙に宇田氏の愛するところとなり第二世耕一氏が氏の後授者となつて有力なる背景をなしてをるところに百パーセントの強味がある好漢乞ふ自愛せよ。

山脇國馬太氏

氏は明治十七年十月二十六日を以て潮江に生れた、嚴父は高知の名士廣瀬重正氏で縣營水電に功勞のあつた人だ、國馬太氏は帝大工學部を出て潮江の山脇家へ養子にいつたものだ、そして鳥取電燈株式會社の主任技術者から高知縣廳に轉じ、大正五年高知縣の地方技師に任せられ縣營水電の方を擔當した、氏は本縣下に於ける電力需用の増加底止するところを知らざるを見、電氣益金二十七萬

圓、縣債八萬圓計三十五萬圓を平山發電所の第二發電所建設に當て八百キロ増加計畫完了した當時需用益々増入せるため供給區域の一大擴張と共に更に三百キロ平山發電所の出力増加に成功した、かくて大正十二年電氣事務局長に昇進するに及び東豊永發電所建設に着手し大正十三年十一月總工事費二百二萬圓にて二千二百キロ發電の工落成、次いで平山發電所、第二發電所、東豊永發電所の渇水時による出力減退を補充し及び故障に備ふるため大正十四年に至り火力發電所の建設に従事し出力一千八百キロを落成した、氏の志は初より電氣統制にあつたのであるが、大正十五年二月白髮山水力電氣株式會社の譲り受けを斷行したことが抑も縣營電氣の統一に一步を踏み入れた最初の試みであつたことを知らねばならぬ、後ち昭和三年十一月東豊永發電擴張工事により千八百キロの増加及び供給區域の擴張が成つたが、その前年即ち昭和二年四月をもつて高知市西弘小路に水力電氣事務所を移轉改築して「高知縣電氣局」と改稱し山脇氏は同時に電氣局長となつた是において氏はその宿志たる電氣統一に乗り出し一つの基礎工作として土佐東部安藝水力、土佐製氷冷蔵會社と電力供給の契約を成立せしめ、立川變電所より室戸東部電氣變電所までの送電を定めた、これは東郡における電力統一に一大拍車を加ふる前提で、氏の周到なる用意を窺知することが出来る。

昭和八年に完成した仁淀川發電所は實に一万五百キロの出力を有し、その工費四百五十萬圓、これ

ぞ本縣電氣の四王座を構成したもので其の着眼の満点が稱讚の的となり従つて氏の功業の上より言へば縣に遺した一大功績で永久に縣の利益を増進する記録である、土佐東部電氣、日本紙業伊野電氣部、香美電氣の買收を行ふて統一に數歩を進め昭和十年安藝電氣、四國電氣、佐賀電氣、七郷電氣、地藏寺電氣、橋原電氣、伊豫電氣の幡多郡區域、南海水力電氣等々を買收統一の念願を達成したので、間もなく職を辭し閑地に就ひた、筆者は氏の功績を不朽に傳へるが爲め此の一文を草した所以である。

島田傳氏

舊い昔はいざ知らず近代の高知署長で比較的評判の好かつたのは小川沱滋氏であつた、だが同氏には多少の政黨色があり、それが後々まで祟つて短かき幡多支廳長を最後に今は幡多郡の上灘村で漁師の生活を送つてをる。時代の要求は政黨色のない民衆本位の署長にある、この觀點において現署長島田傳氏はすでに理想的である氏は明治三十四年六月二日幡多郡七郷村に生れ本年四月の異動期に廣瀨部長の眼鏡で保安課長警部から一躍して地方警視、高知署長に榮進したことは世間周知の通りだが、三十六歳の地方警視は土佐の國では空前の事柄に屬する。年が若いのに頭腦が冴へて度胸

が据つてをり、それに極めて平民的で極めて親切味を有つてをるので署の内外で好評噴々、この少壯署長を迎へて署内は明朗の空氣に満ち／＼てゐる、特に島田署長に就ひて敬服することは人權尊重の不言實行である。即ち容疑者を取調ぶるに當り萬一の過ちがあつては其の人に對して實に相濟まぬからと云ふ心から先づ刑事に調べさせその次に主任に調べさせ、それでなほ腑に落ちないならば署長自身が丁重に調べ直すと云ふ三段構へだから引つ張られて来る容疑者も悉く満足する、これこそ人民保護の任をあてがはれてをる警察署長様々だ、島田署長を得た高知市民は文字通り幸福だ、何十年でもをつてもらひたいと願つてゐるだらう、だが若くて頭腦のいゝ捌けた署長だから中央にも後援者が澤山控へてをることを考へて見ねばならぬ、島田氏の前途は光明に輝やき向上の道が開けてをるから何時までも高知に引き留めることは出来ぬかも知れぬが、こゝ四五年は是非居つてもらひたいと云ふのが全市民の希望らしい、情に厚い島田署長は屹度この希望に副ふてくれるであらう。

野中慶太郎氏

四國銀行佐川支店長として令名がある、明治二十九年十一月二十日高岡郡北原村に生れ大正三年縣

立農林學校卒業後高岡郡農會技手となつたが、間もなく方向を一轉し大正八年高陽貯蓄銀行に入社後佐川支店に勤務するに至つた。昭和五年高陽が四國銀行と合併するや氏は本店庶務貸附に勤務の身となり、昭和七年中村支店に轉じ、昭和十一年一月佐川支店長に榮進し現在に及んでゐる。資性質實人に接するに誠意を以てするので評判が良い家庭には二男一女ある、長男俊雄君は城東中學の三年、二男は北原小學校の四年、長女は家政を手傳つてゐる。趣味は狩獵と乗馬、就中乗馬は相當研究を積んでゐるらしい。最後に特記すべきは現北原村産業組合は氏が農會技手時代、當時村民の認識薄かりしたため極力指導啓發して之が創立を實現せしめたもので郷里への置き土産である。

竹村貞次郎氏

氏は明治二年十二月高岡郡佐川に生る、同家は藩政時代から佐川地方の名家で通つてをり代々酒造業を營み國老深尾家の御用酒屋として家號を「黒金家」又は「弘屋」と稱したものだ。先代彌惣太氏の時代には味淋「花椿」を醸造してゐたが、現代貞次郎氏の代となり銘酒「笹の露」を醸造し高岡、吾川北部一帯を地盤として其の販路を擴張し名聲を高からしめたことは世間周知の如くである。氏は佐川小學校を卒へ、次で佐川中學校に學んだが同校の廢止と共に家庭の人と爲り、専心父祖の業を繼

ひだもので、大正七年の好景氣に乘じ率先して佐川醸造株式會社を創立し、爾來昭和七年に至るまで同社の社長として圓滿振りを發揮し司牡丹の基礎を定め、昭和七年同社が司牡丹酒造株式會社に改稱せらるゝと共に社長職を辭し同社の取締役に納まり隱然重きをなしてをる。この間、氏が徳望のあらはれとして所得稅調査委員、郡會議員、町會議員等を永年勤め、就中町會議員は前後通じて三十余年間の久しきに亘り現在とても無理にくゝりつけられてをる、その郷に入つて芝蘭の香りありとは氏の謂ひであらふ。趣味は書畫で殊に維新志士の遺墨を蒐集するを唯一の樂みとし門外不出の品が澤山ある盆栽も好きだが近時は農家の副業を獎勵すべく自らその範を示すの意味においてメロンの栽培を始め、メロンの栽培では本縣の嚆矢と稱せられてをる、その他果樹、溫室等の設備を施し傍ら養鰻事業などもやつてゐる。家庭には二男一女ある、長男の寧君は京都立命館大學の法學士で現に大阪府廳に勤務し、長女幸枝女史のため養子に楠治氏を迎へ同氏は高岡尋常小學校の主席訓導を奉職してゐる。

前田基晴氏

氏は明治十二年七月二十五日吾川郡仁西村西畑に生れ舊名を用次と云ひ村の小學校卒業後農業に従

事し、大正元年頃高知へ出て來たが其の時の所持金は僅かに三圓五十錢であつたと云ふ。當時中島町下一丁目に濱田愛藏といふ源氏流の元祖である投網の名家が住んでゐたのを幸ひ、その人に弟子入りし段々と上達するに及んで且那衆に雇はるゝやうになり自然にそれが生業となつた譯で、且つ好きこそ物の上手なれの通り投網の結き方も普通人の倍も結き氏の投能は縣下一流として持て囃やされ網打ちも亦た第一流組と爲つたのである。後ち志向一轉、土佐電氣會社の車掌に採用せられたが十圓の保證金に事を缺ぎ親族から融通して貰ふた程であつた、そして最初の見習當時は日給二十八錢で十人或は十五人役の割増勤務に努め、勤勉力行、誠實濫健に勤續すること約七ヶ年に及び大正七年九月退社して八軒町に住し紹介業を始め後ち本町二丁目に移り爾來二十有餘年の歳月を重ねその間組合長たること五回、副組合長を一度、會計、評議員を七回、都合十三回役員となり現に會計兼副組長を勤めてをるが、組合の爲め盡瘁せし功勞により銀牌及び賞狀を授與さるゝこと數回、業者間における珍らしい誠實濫健の人物と稱されてをる程あり、町總代を勤むること十年に及び其の間山内神社建築期成同盟會或は道路補裝問題等に對する寄附幹旋に貢獻せる功勞多大である。趣味は書畫、盆栽などで特に朝顔と杜鵑花とに興味を有つてゐる。

山本輝美氏

山本輝美氏の名は随分久しい間、新聞紙などで見受けもするし、亦た人々の話頭に上つてをるのを聞かされもして、之れ程眼と耳とに慣熟しておる姓名はない、要するに高知の名士であり、名物男でもある。南國土佐博覽會が縣の内外で寄附金を募集しなくてはならぬ事となるや、市會議員達平生の豪語にも似やらす何れも尻込みをして三十六計遁ぐるに如かすの浮腰を立てた時、唯だ一人敢然として其の大任を買つて出たのが誰あらふ山本輝美氏であつた、寄附金の募集は勿論難中の難であり誰とて遁げを張るのに無理はない、或る場合には鐵面皮の如く見られ、或る場合には蛇蝎の如き感じをも與へる、餘程の隱忍力があり餘程の自信が無いと引き受けても實績が擧がらない、山本氏が文句なしに寄附委員長を甘諾したところに難局擔當の犠牲心を認めることが出来る。氏は明治十七年七月廿七日をもつて高知市中島町に生れた、別に學歴のあげつらふべきものは無いが少年時代より俐口者で知られ、次第に長するに及んで種々の事業に關係し、同時に可成り儲けたものだ、中津水電の常務取締役をしたり、大柝水電會社や佐賀水電の社長をしたりなどして最後まで山本式手腕の發揮につとめた、そして其の間高知座の取締役に擧げられたこともある、現存は高知商工會

議所常議員、工業部長、土佐園藝株式会社取締役、高知市會議員の職にあり、傍ら江ノ口郵便局長をやつてをる、北へくと發展する高知市の將來を考慮して黨的神社の隣りに郵便局を設けた慧眼には敬服する……何如なる場合にも人をそらさない交際家で且つ世話好きとして一般に知られてゐる。

横山又吉氏

幕末から明治、大正、昭和の四時代を經過して今尚ほ壯者を凌ぐ元氣の持主に黄木翁横山又吉先生がある、肉付きから血色は四十代だが頭腦も亦た中々新鮮で近頃の若い者は三舍を避ける、土佐では新らしいサカナをブエンと云ふが翁の脳味噌は何時でも無撻だから感心する、漢詩人としては天的との定評があり日本漢詩壇の雄なるもの、文章と文字は夙に一家を成し飛龍騰踏の概がある、單にこれだけでも一方の先輩たる資格を備へて余りがある程だが、保安條例の彈壓に屈せず、林有造氏や片岡健吉氏など、石川島の獄に繋がれた當年自由黨の志士で怪傑星亨と肝膽相照らすものがあつたと聞かされて、巨人群像中の一異彩たるを想はすのである。安政二年の生れだから大地震の兒である、その天地の怒氣が翁の休中に宿つたのか翁の生涯は徹頭徹尾反抗の一本槍で押し通して

をる、この謀反好きが後年市立高知商業學校長に納つたのは世間から不思議がられたが、それでも海南學校の吉田數馬氏と並び稱せられたから凡俗の眼のとごかない知恵と力の持主たることが分らふ、二千の門下生が翁の徳を慕ふて立派な壽像を建てた一事で偉人の姿が永久に輝く、晩年に自分の教へ兒から推されて高知商業銀行の頭取となつたのは西郷が士官學校の生徒に擁された心事と似てをりはしなかつたかと想像する点もあるが財界の反動無くして彼の銀行が順風に帆をあげたとすれば翁の名聲は天にまで推し上げられたであらふ、成敗をもつて人を毀譽するは凡俗の常習であるだから人間の眞價は棺を掩ふて定まると云ふではないか、商銀問題に就ては一言半句の辯解をせざるところに翁の本領が閃く、筆者の如き翁に師事する一人である。

大石泰象氏

長岡郡本山町の出身、現住所は高知市潮江壠屋崎、明治八年九月八日生れだから本年六十二歳だ、還暦は過ぎてをるけれども矍鑠として眞に壯者を凌ぐその元氣に先づ敬意を表せざるを得ないのである。本山には森下高茂と云ふ嶺北切つての名士があつた、人格高く識見秀でた國士型の人物で片岡健吉氏の信用を得、高知へ出て來てからも岡本方俊、富田幸次郎など云ふ政界の巨人と並び立つ

て仕事の出来た土佐の先輩であつた、この森下氏の全盛時代には本山には狐と政友會とはをらぬと言はれたものだ、そして氏は晩年自己の後継者を置土産にすることを忘れなかつたが、世間は大石泰象氏こそ森下氏の衣鉢を繼ぐ嶺北の重鎮だと折紙を附けるやうになつた。氏の家は本山切つての名門であり嚴父は徳望と信用において地方の生神様であつた、氏は致養も深く剛毅の性格を備へてゐるから縣會議員時代には民政黨内の鬪士として推重せられ副議長にも推されたことがあつたが、近時は政界とも遠ざかり高知無盡株式會社の社長に納まり、社の發展のために全力を傾盡し成績頗る良好だと聞く、前には白髮山水力電氣株式會社の社長を勤めたこともあり、企業や事業に相當の經驗があるから堅實な實業家として屹度晩年に花を咲かすであらふ。

宮田繁樹氏

高知市に面白い老人が三人ある、曰く町田且龍、曰く横山又吉、曰く宮田繁樹の三翁がそれだ、町田老は御醫者で政治が好きであり、横山老は詩人の様子でありながら政界の謀叛人をもつて目せられ、宮田老は女郎屋の澤山樓を經營しつゝ政治に關係することが三度の飯よりも好きらしい、稱してこれを高知市の三幅對と云ふ。宮田老は戰國時代の黒田如水の如く、知者であり策士であり世話

焼きである、表面に立つて人に見らるゝやうな仕事をするのは其の欲せざるところであつて、何事も獨斷で自己の善なりと信じたことを黒幕の裡で仕上げ流儀だと拜見するが此の觀察は當つてをるや否や、老は政友會主義で一貫し御家の一大事といふやうな場合には敢然として單獨に飛び込み有象無象を尻眼にかけて何時でも必ず中心点を掴み、自費を投じて毫も勞を厭はない、この犠牲献身的の精神、腐敗墮落した當代政界の衣服清涼劑で若い者等に飲ましてやりたい、從來政友會支部が選挙に大捷して萬歳を唱へたと云ふ其の背後の黒幕には必ず宮田老が隠れてゐることを見遁がしてはならぬ、老がさい／＼東京の政友本部へ老体を運ばすの時には屹度支部に重大事件のある場合である、千圓でも二千圓でも自金を投じて本部へ出掛け、最高幹部に向つて正論を眞正面から吐くのだから幹部も耳を拂つて老の言に聽従すると言つた場合が今まで度々であつた、政黨不振の時代を迎へて老の如き政界の奇篤者を思ふや頗る痛切である。

淺井茂猪氏

市會議員、縣會議員、土陽新聞記者の三役を兼ね縦横に活躍しつゝある少壯政治家の雄なるもの、号は白水で通つてゐる、明治二十二年一月四日をもつて安藝郡羽根村に生れ、縣立第一中學校卒業

後、早稲田大學に學び政治と經濟を修めた閱歴が結實して現に土陽の政治經濟部長を勤め、市會でも縣會でも一方の鳴き鳥として重きを置かれてをる。氏は筆まめであると共に口まめであり亦た足まめでもあるから各方面から頗る調法がられてをる、それに性質が至極溫良で何時會つても春風駘蕩の和やかさがあり何人に對しても城府を設けず、心から打ち解けて赤心を他人の腹中に置くから人から好かれる先天的の徳を備へ、この徳が大衆の中へとろけ込んで人望となり人氣となり選舉毎に多數の票を獲得する譯で、高知市を中心に今や抜くべからざる勢力を扶植してをる、氏は土陽の記者としては社長橋田早苗氏から絶対に信任せられ、市會議員、縣會議員としては中川恒之氏や吉村近次氏など少壯實業家の支持を受け、高知市公友會長として政友會支部各長老から二つ無きものと愛せられてをる、既に此等の背景があり同時に大衆間に嵐の如き人望と人氣があるから近き未來の代議士候補をもつて囑望せらるゝ風景は如何にも春風春水一時に到るの感を深からしめる、氏の如きは誂へ向きの政治家で民衆に推し上げる力さへあらばグン／＼伸びる人物である、富田幸次郎氏が今日の地位に達したのは富田ファンが推し上げた爲である、浅井ファンたるもの宜しく六尺褌を緊めて地方の議會から中央の議會へ推し出すことだ。

森 淳太郎氏

土佐の小京都と稱せらるゝ高岡郡の佐川には種々の人物がある、その中で最も名の著はれてをる一人が森淳太郎氏である、氏は政治家でもあり實業家でもある、疾くの昔に縣會議員をくゝりつけられて厄抜けをしてをり現在では優に代議士級の人物だ、線が太く腰が強くネバリがあり奮闘力もある、随つて政治家として味方もあれば敵もある、こゝが亦た政治家としての取柄であつてニコボンの中に然諾を重んずる武士的精神を備へてをるから頼母しい。嘗ては高陽銀行の取締役、土佐五三商會の代表社員、土洋運輸株式會社の監査役、土佐防水紙布の取締役を勤め、現在は土佐電氣株式會社取締役、土佐バス株式會社取締役、司牡丹酒造株式會社取締役、財團法人青山會理事に擧げられ魂爽たる姿態を閃かしてをる、筆者が本稿執筆中には政友會高知支部長に決定したと新聞紙の辭令が出てゐた。氏は宇田友四郎氏にも善く、水野吉太郎氏にも善く、下元鹿之助氏にも善い、政民兩黨の長老で献立てられた大松俱樂部は實に氏のキモ煎りだと傳へられたが、新聞紙辭令が實現せられた曉に、凝り性の氏が民政黨を前に廻はして如何なる芝居を打つてあらふかは既成政黨員が多大の興味をもつて待ちうけてをる、力の森氏、智恵の森氏だから人の意表に出づる藝當を演じて大

向を唸らすであらふ。

氏が土佐の産業を開發するが爲に神戸製鋼所の資本を誘致して潮江にマンガンの精煉所を設けたこと、ブラジルの父と仰がる、水野龍氏の事業に同情して海外移民會社をこしらへたこと、極めて有意義だとして一般から稱讚されてをる、大器晩成の四字は晩年に當て嵌めて頗る適切だと思ふ、好漢自愛せよ。

宇田友四郎氏

近代土佐の生んだ大實業家は誰か、この問に對し縣民は異口同音に宇田友四郎氏の名を連呼するであらふ、氏の全盛時代は歐洲大戰の前後即ち大正三、四年頃から大正十一、二年の頃で土佐の實業界に宇田時代を劃し、餘力が當時の政界にまで及んで大小の黨人悉くその膝下に摺伏する場面を展開した、大御所の名はこの全盛時代の氏に冠せられた尊稱の代名詞であつた。

新聞記者など云ふものは由來口の悪いことにおいて共通性を有つてをり、大臣大將などの前へ行つても減多に頭を下げず、シビレを切らして門を出ると必ず悪口を言ふ癖がある、これ程口の悪い新聞記者が今日に至るまで氏に對して一言半句の悪口を吐かず、宇田さんは偉い、宇田サンは慕はし

いと心から敬服しておるところを見てもその相場が分る、川崎幾三郎氏にしても、横山慶爾氏にしても新聞記者の口にかゝつたら決して無疵ではなかつた、新聞記者に惚れられて嬉しい顔をする宇田氏ではなかつたが、不思議に記者連がなつてゐた、單にこの事だけを考へても何處かに普通の實業家と異つたところがあることを思はずに十分である。

氏の關係した事業は随分廣範圍に亘つてをつた、試みに其の肩書を列擧すると

白洋汽船株式會社々長、土佐電氣株式會社々長、土佐セメント株式會社々長、高知商工聯合會々長、高知商工會議所會頭、合同汽船株式會社取締役、大東漁業株式會社取締役、土佐電化工業株式會社取締役、土佐東部電氣取締役、高知製氷株式會社代表社員、三重合同電氣取締役、太平洋火保取締役、土佐電氣と香美電氣の顧問、四國銀行と高知新聞社の相談役

等々で此の間、スラ／＼と衆議院議員から貴族院議員に當選し、藤原頼長ではないが「この世をば我が世と思ふ望月の欠げたることもなしと思へば」の満足感に浸り、人間最高の愉悅を満喫したことゝ想像する。

この成功の親玉は萬延元年三月廿五日をもつて香美郡岸本町に生れ、青年時代に赤岡町で商業に従事したと思はしくなかつたので赤手空拳高知市に出で徐ろに待機中、幸運めぐり來つて三菱汽船會

社の支店に入り更に大阪商船に轉じて漸く其の手腕を認められ、後ち土佐商船株式會社の設立せらるゝや取締役の推されたが、解散と共に土佐電氣鐵道株式會社を起し爾來トン／＼拍子に前記の各事業に關係することゝなつた。

そして高知縣民が氏に永遠に感謝するのは、川崎幾三郎氏と共に英才養成の機關として私立土佐中學校を起をしたことで、これは不朽に生かす精神的の大事業だと言はれてをる、偉人宇田友四郎氏の名は百代にのこるであらふ。

川崎源右衛門氏

八百屋町川崎本家の現當主川崎源右衛門氏は明治三十八年十月十六日の生誕、先代源右衛門氏の長男で幼名を源之助と稱したが大正十年先代逝去後家督相續により襲名したもので、正八位在郷陸軍砲兵少尉の肩書があり、多額納税者など云ふことは書かずとも分り切つてをる、城東中學校の出身で夫人は乗り出し川崎幾三郎氏の令妹喜志子女史（川崎庄五郎氏の長女）縣立第一高等女學校の卒業、婦道の嗜みはすべて之を修め家事萬端をくるめてゐる。

川崎家の家憲といふのがあつた、四代目源右衛門氏が子々孫々へのこした左の條々で自筆で美濃紙へ

書かれたものだ

條々々々 (原文のまゝ)

- 一、親孝行の事
- 一、商家においては賣物買入れ亦た賣付のこと極要の事
- 一、朝起常に心懸のこと、家人これを勤むること
- 一、人來る時は随分あいさつをのべ、念ごろに話いたし、諸國相場彼是れ考へ方第一のこと
- 一、常無事、見聞行儀守方第一のこと
- 一、兄弟仲能く、親ぞく念ごろ之れある筈のこと
- 一、片時一只居無之様に相應の心懸は水のながれのごとく有之筈のこと
- 一、向顔宜いたし家内うるわしく、にぎあいし様に年わたる者心持有之筈のこと、惣じて身分不相應の衣類萬事或はごしやうぎ、すぐろくなご海山のなぐさみ事もまれによし
- 一、酒肴色道は常に心得たしなみ(原文五字位不明)は常に不可用事

川崎家各代とも此の家憲を守り救恤博愛の志に 富み勤儉地味にして奢りをなさず博愛衆に及ばずの本義を忘れず、殊に川崎家の特色は謙善や寄附をなすにも世間に知れないやうにする其の隠徳で

あり、先々代先も先代も亦た現當主も皆な其の實行者である。氏の趣味は乗馬と寫眞、資性濃厚着實にして尊敬すべき人格者であり、富豪の青年なれども未だ會て遊里に足を入れたことがない、實に近代青年の龜鑑である。支配人は畠中源吉氏で志實と熱心をモットーに日々事務を取扱つてをる。

中内松次氏

紙業王國の土佐に、業界の名門として誇るべきものに中内家の三人兄弟がある、長は中内久太郎氏仲は中内彌三郎氏、その次が中内松次氏である、この三兄弟は伊野町の生れで後ち高知に出で南與力町と、北奉公人町と、鷹匠町とにソレ／＼門を分けて何れも豪な生活振りに世人をして其福徳を健美せしめたことであつた、長兄は濃厚にして篤實、仲兄は剛膽にして策略あり、松次氏は堅實で溫健で最も中庸を得てをる、昔し毛利元就は三人の子に矢を與へて兄弟の同心一体を訓戒したと云ふことだが、中内家の三兄弟は至つて仲睦まじく其處に家庭の美と事業の美を輝やかしたのであつた。

中内松次は明治十年四月十三日の生れだから本年六十歳だ、一見したところ五十歳位で兎ても若

い、日本紙業株式會社の取締役として旭の會社にどつかと腰を据へ幾多の従業員から父の如くに慕はれ、此等の従業員を手足の如くに使つてをる、氏は紙業に關する知識經驗が頗る豊富で業界の代表的人物と爲つてゐる、前には日本紙業の京城支店長、大阪支店長を勤め手腕を發揮したものだ、近時稍々健康を害したかに仄聞するが前途尙ほ春秋に富んでをるから業界のため切に自愛を祈つて已まない、氏は高知市の實業界に重きを爲し現に高知商工會議所の議員である。

川島正件氏

深山大澤龍蛇を生ず、長岡郡の嶺北からは古來幾多の人豪が出てをる、川島正件氏の如き實にその雄なるもの、氏は明治二年八月七日をもつて田井村に生れた、田井は山紫に水清く山間稀に見る明媚の土地柄である、川島氏に山岳の氣象ある其の一面、何處となく明媚の性情が流露するところ蓋のこし環境に育ぐまれた自然の感化もあらふ。

氏は青年時代に小學校の教師もしたことがあり亦た縣廳の役人を勤めた閱歴もあると聞くが高知市役所に入つてからは衛生課長を振り出しに産業課長に轉じ、そし、助役に昇格して名助役の名を馳せたものだ、後ち全市民の聲に送られて市長椅子に進み隨分長、間市政の爲に最善を盡し、至公至

平、恪勤精勵、その間功績の著顯なるもの々々枚舉に遑無しと言つて斷じて溢美でない、蓋し歴代市長中の花形である。

市民に惜まれて市長を辭して以來、専ら力を教育方面に注ぎ高坂高等女學校協會理事川崎、宇田財團法人士佐中學校理事、私立城東商業學校長として隱然重きを爲してをる、特に城商校長を引受けてからは氏の聲望の然らしむるところ學校の地位がメキ／＼と推し上げられて市立商業と優に對立するの權威を加へたのである、吉田數馬氏が卓越せる人格の力で海南學校の名を縣の内外に轟かしたと同じやうに、氏の明識と、思慮と、決斷によつて城商はグン／＼躍進した、そして中等學校の校長會がある時など、氏は不羈獨立自由の立場において事毎に侃々諤々の意見を吐き私學の爲に万丈の氣焰をあげる其の景觀と來たら溜飲を下げるやうに痛快である、吾等は城商のために良校長を得たることを欣快とする。

高知市長として功成り名遂げた川島氏は、中等學校の校長として亦た有終の美を濟しつゝある、土佐生へ拔きの平民校長は之を前にして山本幸彦氏あり、吉田數馬氏あり、これを後にして川島正伴氏がある、吾等は吾等の郷土より斯の偉大な教育家を堀り出したことを無上の誇りとする。

入交太藏氏

金持喧嘩せずの理想型である、人相からして福徳圓滿の姿を備へ、家庭内でも社交界でも四時春風を吹かしてをるところに氏の人格が滲み出てをる、多くの金持は金持臭ひけれども氏には微塵だも金持の臭氣がない、それと云ふのは精神的修養が足つてをり、宗教の信仰深く美術に對する鑑識眼が高いと云ふやうな平生のたしなみが與つて影響してをるだらふ、隨つて其の態度が謙遜であり弱者に對する同情心にも厚い、謂ゆる眞實の意味における紳士紳商の典型である。

本縣の實業界で宇田友四郎氏の後繼者は誰かと云ふ題目の掲げられた時、多數の投票は入交氏に集中した、して見ると其の手腕力量も想像が出來やう、宇田耕一氏が縣の實業界に活動する舞臺が轉するに及んで、此の宇田第二世と入交氏との提携説が荐りに傳へらるゝやうになつた、これは齋東野人の言にあらすして恐らく事實であらうと考へらるゝ節があり、そこに亦た氏の動き方を判する正しき軌道を認識することが出來る、洵に何處までも美はしい性格性情の持主であるとぞつこん敬服するのである

氏は明治二十九年八月十四日の生れだから文字通り少壯の實業家だ、そして高知商工會議所副會頭

瓦斯會社々長、共同石炭株式會社々長、土佐電氣、土佐セメント、土佐バス、土佐倉庫の取締役、土佐石灰同業組合長などの職にあるから相當に多忙であるが、特に氏の美点として禮讚せらるゝのは母親孝行と奥様孝行と姉孝行の三拍子である人間入交太藏氏こそ實に世の模範とすべき完人ではあるまいか。

廣井益水氏

高知市産業課長として川島、村上、川淵の三市長に仕へて大に腕を揮つて大高知の産業課長たる實力を示してをる、高知縣廳にも長い間勤めて産業方面の常識を涵養してゐる昔取つた杵柄が物を言ふて地味な抱負經綸で押し切つてをる風景は朗らかだ

氏が産業課長として將來の高知市のために建てた金字塔は何んと言つても中央の公設市場設置であらふ、多數の小賣商人が何等の統制も加へられず不羈奔放なる自由競争をすると云ふことは商人に取つても需用者にとつても百害あつて一利無く、延いて自治精神にまで累を及ぼすことになる、小高知市時代には別に公設市場を設くる程の必要を感じなかつたけれども、大高知市となると共に次第に其の必要を感じ、それと同時に廣井産業課長の卓見と英斷とに敬服する、公設市場が如何に市

民大衆から歡迎せられてをるかは毎日帯屋町の公設市場を見ることに依つて極めて明瞭である、筆者は彼の公設市場の隣りにある武市半平太屠腹の場所と云ふ記念碑を眺めつゝ、他日廣井産業課長の記念碑が何所かへ建てらるゝであらふかと云ふやうなことを考へつゝ、濃厚にして圓滿に、そして機敏な廣井氏の人相を思ひ浮べたりする。

廣井氏は明治十四年七月二十五日生で長岡郡野田村の出身だと聞く、野田村は香長平野の中心地で平和な里である、この平和郷から廣井氏の如き平和人の出たことは決して偶然でない、自己完成と云ふことが人生の念願であり目的であるとならば、廣井氏は實に自己完成のモデルである、市役所の若き書記達は此の課長の立身出世道を参考とすべきであらふ

そして我等は南國土佐博覽會を眼前に控へて大に廣井氏の健闘を希望する、川淵會長や野村協賛會長の活動と相俟つて廣井課長の奮闘を切に布望する。

川島幸十郎氏

高知で有名な富豪、本丁の川島と云へば明治初年から一市七郡の津々浦々に其の名が響いてゐる、現當主の幸十郎氏は明治三十四年十一月生れたから少壯の實業家だ、氏は舊名を篤太郎と稱したが

先代逝去後の昭和五年十月に襲名したものと、大正十四年市立商業學校を卒業後家政を董督してを、資性温厚篤實にして眞に大家の御曹子たる風格がある、趣味は釣魚と圍碁、夫人遊龜女史は土佐高等女學校出身の才媛で茶の湯、生花等に堪能の聞へが高い、家庭には一男三女ある、長女は第四小學校二年生で之れ亦た賢母に肖て出来榮へ良いと承はる、川島家萬々歳

長山直樹氏

高知市の在野法曹界には幡多郡出身の人物が少くない、一寸指を折つても大西正幹、長山直樹、田村三吉、網野林次氏などを數へ上げることが出来る、此等の中で大西正幹氏は群岳中の最高峰たること萬目の認むる通りであるが、氏に次いで光つてをるのが長山直樹氏である、長山氏は奥内村の出身で高知の中島町で辯護士を開業して相當の年處を閲してをり、随つて職業的にも、政治的にも牢固たる地盤を有してをる、これを辯護士といふ職業的から見ると、氏は第二流の甲組たる地位にある、高知へ行つて長山辯護士といへば宿屋の女中でも知つてをること程左様に高名であるから依頼事件の多いことも略想像が出来る。

次にこれを政治的にながめてみると、氏は高知市會議員であると共に縣會議員である、そして市會

議員としては斷然垢抜けのした方であり縣會議員としては、謂ゆる少壯氣鋭の新人物として各方面からその將來を期待されてをる、先輩の大西正幹氏は市會議員から、縣會議員となりそして終には二度まで代議士となつた、長山氏は年が若く霸氣があるから、青春の血のたぎるがまゝに、先輩大西氏のコースを辿るであらふことを想はずに充分なるものがあるが、政界由來險波多し、そこまで漕ぎつけけるには人知れぬ苦勞を必要とする。

ところで問題はその苦勞である、氏の性情から判斷して果してその苦勞を買ふことができるや否やこゝに好意的の疑問がわく、何んとなれば氏は餘りに直情徑行であり餘りに淡泊である、この美質が氏を苦勞人たらしむるに多大の妨害を爲してゐはしないのか、竹を割つたやうな氣前の持主に向つて隱忍を求むるのは無理である、苦勞の二字を解剖すれば自我を殺せとある、單純にして一本調子な氏にその眞似ができるや否や、こゝが政治家として大成するとせざるとの分岐點ではあるまいか、だが併し、長山氏は誰からも好かるゝ人物であり其處に亦大きな取り柄がある急ぐことはない、大器は晩成だ、好漢請ふ自重せよ

北澤甚三郎氏

高知驛を出發して山田から北へく天坪の驛で下車して昔の國道に沿ひ七八町逆戻りをする。繁藤と云ふ部落がある、鐵道工業會社の監督役北澤甚三郎氏は此處に半永久的の住宅を構へ土地の人々から氏神様以上に尊敬せられてゐる。大体から云ふと工事の請負業者は算盤がその生命であつて道徳とか人情とかを無視してかゝるものであるが、北澤氏に限つて全然その種のものを選を異にし、徹頭徹尾道徳に立脚してゐるから敬服する、氏は長野縣の出身で土佐へ來たのは省線土佐鐵道の工事を請負ふた其の因縁からで、大正十五年以來山田から縣境まで七工區を全部擔當して立派に仕上げたのである、随つて此の間には相當の利益があつた譯で氏の所得も可成り莫大で漢字で形容すると巨萬の富といふところだ、繁藤邊で二十萬、三十萬の金を持つてゐると三菱三井以上に持て囃やされる、然るにソレ程の金持であるに拘はらず其の生活振りは如何にも質素である、それには勿論賢夫人小銀女史の賢明さが加はつての事でもあらふが何處までも其の用意の周到にして且つ謙遜なるには驚かされる、北澤氏は工事のことに就ては別に何も話さないが唯だ今年の春、縣社藤並神社の大鳥居を請負ふて無難にソレを仕上げたことは非常の面目でもあり名譽でもあり亦た珍らしいことでもあると言はれてゐた、氏夫妻の趣味は劍吟で長會我部鶯鳴氏に師事し邸宅の一隅にその道場をこしらへて土地の少年少女に日本精神を吹き込んでゐる、趣味とは云へ道樂にやるのでなく精神

教育の一助として眞劍味に之を鼓吹してゐる、随つて人の知らない犠牲を拂つてゐる、南國の土佐人は雪の國の北澤氏に大に學ぶところがあるだらふ。

永野秀吾氏

長岡郡の大杉村へ行つて村の大先輩は誰ですかと訊くと誰でも言下に「永野秀吾先生」ですと答へる、それ程に氏は村の名望家である、唯に大杉村の名望家たるばかりでなく嶺北の名士であり先輩である、年は故濱口雄幸氏と同年ぢやと云ふが昔から濱口氏の大崇拜者で邸宅の前方數歩のところは濱口氏の撰文に成る養父永野覺次翁の頌德碑が建つてゐる、それは村の青年の建てたもので「資性温厚幼より學を好む、後ち大杉村の醫永野作源の嗣子と爲り其の業を繼ぐ、仁術に従ふの餘村會議員區長興務委員、土木委員、村醫、名譽職、助役等に擧げられ力を公事に盡すこと三十年、郷黨共に仰ぎ縣より表彰せられしこと亦た數回、耕地整理委員長と爲り桔据盡瘁數町歩を開墾す」云々の文字がある、現當主の秀吾氏も矢張り仁術家で第二の覺次氏である、氏は青年時代に笈を負ふて東の濟生學舎に學び大正五年醫師試験に合格し郷土において先代の業を繼ぎ文字通りの仁術を行ふてをり地方の人達から生神様の如くに尊敬せられてゐる「藥價が一万圓ばかり溜つてをりますか

遠山つゝじで御座いましたネー」と呵々大笑するところ如何にも朗らかである、氏の長男は名古屋醫專出の産科婦人醫で觀音寺で開業し、二男は京都醫大の出身で愛媛縣寒川で開業してをる、積善の家に餘慶ありとは大杉村永野家の謂ひであらふ、嶺北の長老として至の敬意を捧げその長壽を祈る。

深瀬 薫氏

童話作家の第一人者として著聞する芳流深瀬薫氏は吾川郡弘岡名門の出で明治二十七年三月十一日生れ、土陽新聞記者を振り出しに性來の天才が閃くがまゝに漸次童話の専門家となり『ミノリ』學園々長、高知音樂學院長として立派に成功してをる……若し十六年の昔、久留島武彦先生が土佐へ招かれなかつたらばそして、自分が一新聞記者としてインタービューしたのが繋りとなつて高知座で講演して貰はなかつたらば又た現土陽新聞社長橋田早苗氏が土陽に關係されてゐなかつたらば恐らく今日の講壇十六年は生れなかつたであらふ……これが氏が最近の告白である、泊知事は深瀬氏の經營するミノリ學園の共鳴者で自分の子女を深瀬氏夫妻に依託し、童心に即せる内容は大に我意を得たと歡喜しており、野村茂久馬氏は郷土の誇りだと喜び、池内實吉氏は、深瀬氏はお伽噺

の天才、常子夫人舞踊の達人、みのり學園今日の發達は氏等夫婦が協心戮力斯道に渾身の力を傾注されし賜である、深瀬氏は十六年間、内地は勿論、海外までも足跡を印し洗練された童話を以て社會に明朗柔和な空氣を送り社會教育に貢獻されたる功は實に多大であると敬服し、市高等小學校長の柿内市藏氏は、深瀬氏が其の人格と體驗を經とし巧妙な話術を緯とされた講演は斯界における一大存在であつて全國の教育者より尊敬をうけつゝあることは我が郷土の誇りであると言つてをるが實際その通りで氏の名聲は全國的と爲つてをる、文豪に大町桂月を有し、政治家に板垣退助を有し實業家た岩崎彌太郎を有し勤王の士に田中光顯を有する土佐に童話作家の大天才深瀬薫氏を有することは我等の名譽とするところである。

猪野馬太郎氏

長岡郡長岡村の出身で少壯時代から政黨に關係してをる、何も流行を逐ふての政治道樂でなく政治が好きだから自己の趣味を長養した譯である、最初は郡の先輩中澤楠彌太氏に私淑し其の乾兒をもつて任じてゐたが、中澤氏が或時長陵の若い重立つ者に「土佐の政黨もこれではいかぬ、土佐の勢力を昔しに盛り返へすには大石正巳氏を大將として推し立てねばならぬ、自分は今までの行掛りが

あり露骨にツレが出来ないから君等の如き青年が大石に接近するがよい」との話をした、此の意見には猪野氏がぞつこん共鳴したから斷然大石黨に轉向した譯である、大石氏は富田幸次郎氏の親分格であり自然富田氏と接近する機会が出来、親しく交るに及んで富田氏の人物に傾倒し、好むところに従ふて熱心なる富田黨と爲つたのである、で猪野氏は最初から人物本位であつて 政見とか政策とか云ふ理屈で離合集散しないと云ふのが其の獨特の建前となつてゐる、往年富田氏が失脚した時、其の復活をはかるべく卒先して双川會を發起したのは實に猪野氏等二三の人士であつた、現在でも双川宗の第一人者で知られてゐる。

中川喜義氏

氏は明治十三年七月三日をもつて長岡郡岡豊村に生れた、和出家は岡豊の豪族で令兄尊義氏は代議士となつた、氏は尊義氏の令弟で早稻田大學卒業後、高知市通町の中川家へ養子として迎へられ茲に中川の姓を冒すことゝなつたのである、人物は眞實の君子型で生れてから此の方悪いとか不正とか云ふものが何のやうなものであるかを知らない程の善人で、温良とか篤實とかいふ文字は氏のためにつくられたものではないかと思はれる、正直な言分ちやが氏は實業家としては餘りに正直に

興ざる、従前は土佐セメント會社、徳島水電、小濱電燈、内海巡船、土佐運輸、土佐帆前、愛媛鐵道等の取締役であり最近まで大東漁業の社長であつた、併し天は正直に味方するから氏は將來において必ずや豊かなる天恵に浴するであらふ、實長界の君子の典型は氏に於て之を見る。

田村實氏

地方の代議士としては調法な人物だ、晝夜不眠の活動が氏をして今日あらしむる要素だと思ふ、嘗て氏が縣水産會長の時代に一寸の隙がなく臺灣へ飛んだり北海道へ行つたりする南船北馬の活動振りを見て大西正幹氏が舌捲ひてをつたことがある、大西氏などは走り廻ることが千萬大儀な方で、其の出不精な人達の眼から兎の如の栗鼠の如く二六時中席暖かなるに遑無き田村氏の多忙振りを眺めた時キモを潰したのに不思議はない、田村氏は渾身これ活動の人であり活動が亦た氏の生命である、野村茂久馬氏が奮闘をもつて生命とせる如く、田村氏は活動をもつて生命としてをる縣會議員時代から、水産會長時代から、代議士時代まで終始一貫してをる、政友會の本部で前田米藏氏や胎中楠右衛門氏が入れても痛くない程ヒキにする所以のものは勿論其の慧敏を買つての事だらふが、一つには亦た四方に使ひして君命を辱かしめざる底の知恵と力の持主であることゝ、そして

此等の持前を活かすに旺盛なる活動力を以てするか爲であらねばならぬ。

氏に取るべきものは尙ほ他にある、それは感激性の強ひことである、氏が現在の地位に達するまでには先輩山本忠秀氏の支持に俟つことが多い、氏は何人よりも最もこの事をわきまへてをる、だから山本氏を大切にすることは寧ろ親以上であつた、その親以上の山本氏は今や故人と爲つたから氏の落膽は察すべきであるが、併し氏は胎中といふ好い親分を有つてをり胎中氏も氏の活動力には一目を置ひてをるから今後益々胎中氏に頼り自己の新活路を開拓するであらふ縦しんば代議士が失格に爲つたところで氏の舞臺は中央にも地方にも開けてをるから何も悲觀することはない、氏はまだく之から大に伸びる餘地がある。

川淵治馬氏

大學卒業後、警視廳の役人を出世双六の振出しに、官界生活の打止めが福岡縣の知事であつた、山芋化して鰻となる如く官僚の徒一變して代議士に打つて出た、氏自身の語るところに依れば、氏が一等縣の知事に引き立てられたのは川崎克氏の援助だつたさうなが民政黨の全盛時代に官界から足を洗つて野武士の仲間入りをしたのは如何なる動機であつたか、土佐出身の濱口雄幸と云ふ大物を

親分に持つて民政黨内閣が出来たら參與官から政務次官にならふと云ふ野心の動きなどは斷じて無かつた筈だが、知事上りの代議士は不思議に黨内で重きをなさぬ、之れは何も川淵氏に限つたことでない、知事上りは比々皆な然りだと言つてよろしい、そこになると野人の中島彌團次氏が遙かに上で彼れは現に政務次官として羽振りを利用する、知事で成功し代議士で花を咲かすことの出来ざつた川淵氏が市長として果して一派のものゝ期待に副ふや否や、そこには多大の疑問符がある、市長といふものは市民の父たる態度がなくてはならぬ、頭の善悪は市長の價値を上下しない、閱歴が光つてをつても官僚知事では市民の方がうんさりする、故村上市長や、その前の川島市長、も一つ前の中島市長などゝ比較して市民の受けは何うだらふ、我等は不幸にして未だ頌徳表をたてまつる市政刷新の實を見ざるを遺憾とする。

中島鹿吉氏

縣立高知圖書館長中島鹿吉氏の名は一市七郡の讀書界、教育界に著聞してをる、氏は安藝郡奈半利町の出身で明治十七年二月十五日生れたから本年五十三歳、まだくこれから大に爲すあるの年輩である、今の城東中學校の前身第一中學校を出で廣島高等師範を終へて、長野縣立大町中學校を振

り出しに廣島縣立府中學校長、同吳第一中學校長として颯爽たる育英振りを發揮し、關西の中等教育界に氣骨稜々の中島健依別あることを痛快に知らしめたものた、氏が川淵治馬氏と大に飲んだのは乃ち兩雄の廣島時代で誰やらのチョコ節が土佐へまで放送された因縁がそこにあるらしい。上村學務部長が幡多へ講演に出かける時、中島氏は圖書館長として其の相伴役を仰せつかつた、二人自動車を同ふしての道中、部長の館長に對する宛かも上官の下僚に對するが如き態度であつた、偕て中村へ着ひて會場に連れ立ち、部長の後をうけて中島氏が約二時間に亘る講演を水一杯飲まずに手際にやつてのけた、部長は此の日初めて中島氏の雄辯を聽ひた、すつかり惚れて了つて態度一變、爾來先生の尊稱を口から出すやうになつたとは筆者が最近學務部の某氏から耳にしたところである、中島氏は上村部長の岡惚れを待つまでもなく、學生時代から雄辯宏辭をもつて鳴つた人物である、隨つて講演は御手のもので上村部長が十人たかつても叶はぬ、だから此の頃は四方八方から講演會への引つ張り風となつて困つてをる程だ、その閱歲から言つても小つぼけな高知の圖書館長には過ぎた人物だが、近き將來土佐記念館でも出來て圖書館と合併した時の館長には蓋し誂へ向きである、談論風發對者を煙に巻くその舌の威力は蓋し縣下一品、我等は氏の役不足に對して渾身の同情を寄せる。

溝淵吉衛氏

氏は明治廿九年七月廿一日をもつて高知市浦戸町に生る、家は高知市で名高き石油商であるが新時代の教育を受けた若き實業家は學成つて東京より歸るや市民の輿論を負ふて市會議員に當選し、大に自治体のために貢献するところがあつた、浦戸町から菜園場に架せられた四ツ橋こそ實に氏が市會議員としての功績を永久に記念する名物橋だから、此の橋を往來する市民は一步踏む毎に氏の努力に感謝せねばなるまい、氏は普通の實業家とは其の型を異にし精神の修養を日常座臥の間にも忘れないから俗惡の氣から蟬脱し何處となく高期の姿態を認め得らるゝ、高知商工會議所の常議員として會頭野村茂久馬氏の奮闘努力主義に共鳴し、早起會の皆勤者たる勉強振りには朝寢坊の青年實業家どタヂ／＼と尻餅を搗いてゐる、氏は既に多額納稅者であり高知信用組合の理事にも擧げられてゐる、蓋し前途大に爲すあるの少壯實業家として一般から囑望せられてをる。

田所助吾氏

全國稀に見る月謝の要らぬ學校として重視されてをる高知木工青年學校長田所助吾氏は明治二十八

年吾川郡御疊瀬村に生る、先代助吾氏は明治四十二年頃出高して市本町三丁目に洋家具商を始めたので氏は小學卒業後家事に携はり昭和九年先代歿後の跡を受けて襲名すると共に家業を繼承することになったが、曾て大正十五年現在の棧橋通りに縣監督の元に委囑を受け高知木工傳習所を開設し五ヶ年間に渉る縣市より各五千圓づゝの補助を得て、主として建築以外の木材を製品し縣外に輸出するの目的を以て徒弟の養成に努めて來たが、昭和十年四月一日高知木工青年學校と改積するに至つた、同校は卒業年限を四年と定め月謝不要で將來木工業に従事せんとする者の爲め須要なる學理と技術とを練習せしめるが目的で特に心身を鍛練して健全なる國民善良なる公民たるの教養を積ましむるに努め専らスパルタ式實業教育一片に行つてをるが、同校の製品は年産高約十萬圓を算し、卒業生の賣れ行き又頗る好成績を挙げ他中等學校卒業生に比し敢てその牽けを譲らず主として横須賀、吳佐世保の海軍工廠、航空所、陸軍省、藤永田造船所、内外木材工藝會社、日本重工業會社、三越家具部等に採用せられてゐる。

氏は昭和五年青年訓練所の設備優秀なるの故を以て文部省より同六年十二月青年教育功勞者として縣知事から又高知署管内篤行者として雜誌キング等より表彰せられ、或は高知在郷軍人消防隊より多年の功勞に對し又在郷軍人分會長より人命救助による表彰等を受け其他製品に對する共進會、博

覽會等から賞狀感謝狀など授與されたもの數ふるに遑なく、現に高知出品協會會々計、町會計其他公共団体等主要の地位に擧げられてをる、氏は趣味がなく煙草や酒を嗜まず人の世話をすることが唯一の楽しみである。

竹崎五郎氏

縣社八幡宮の社司で高知縣神職會長を勤め從七位勳八等に叙せられてをる竹崎五郎氏は明治十九年四月長岡郡瓶岩村の産、明治三十八年高知縣師範學校卒業後長岡郡穴内小學校訓導となりそれより栗生、本山、外山等の各小學校に教鞭を執つてゐたが一時瓶岩村助役となり再び大正三年高須小學校に奉職し、その後長岡郡書記を命ぜられ第二課社寺兵事係に勤務し同十五年七月高知縣屬となつて學務兵事社寺課に席を置き高知縣神職會幹事となり、昭和七年地方事務官に叙せられ依願免官後山田町八幡宮社司兼鴨田鎮座郷社郡頭神社の社司となつて現職の傍ら在郷軍人會北街分會顧問、高知市選舉肅正委員、高知市社會教育委等に擧げられてをる

氏は人となり資性溫厚快活にして好く物事に理解を持つこと神職中稀に見る人物だとの折紙附で、ホトトギス派の俳人で「虛人」又は「府川」と號して名高く著す所「高知縣社寺誌」があり頗る有

益である。

西野維城氏

氏は明治十八年吾川郡仁西村西畑に生る、海南中學を中途で退學し雄圖を抱いて明治三十六年朝鮮に渡り慶府鐵道に勤務してゐたが、日露戰爭勃發と同時に歸國して郷里仁西村役場の助役となり次いで明治四十二年同村長に昇格す、その職に在ること二年辭職して吾川郡書記となりその後大正六年高知縣廳に入つて産業課を振出しに農務、林業、秘書課の各課を経て官房主事の椅子を占め、次で吾川、土佐の二郡役所主席に任じたが、昭和二年幡多支廳長となつて再び縣に轉じ、昭和四年地方課事務官に敍せられ町村監督の任に當り同六年三月依願免官と同時に日本赤十字社高知支部主事を拜命し現職に在るが氏の經歷である然るに茲に特筆すべき二つの大なる事績がある、それは僅々幡多支廳長として在職一ケ年餘の間に於て盡瘁した愛媛縣側との漁夫浸漁問題と渡川治水問題の解決で之は最も至難とされてゐただけであつてその功績顯著なりとして天晴れ範を示した譯である、氏は趣味として將棋、圍碁などを好むが現在の心境は事務掌握を以て専心唯一の樂としてをる、家庭には二女三男あり長女英子さんは高坂高女出身で小砂氏に嫁し二女の松子さんは高坂高女卒業後

家庭を手傳つてをり、長男富雄君は城東中學へ二男悟郎君は清南中學へ三男辰雄君は江ノ口小學校にそれ／＼在學中であると聞く。

北村鹿太郎氏

組合外の營業によつて大に奮闘し今や堀詰橋畔に堂々高く廣告塔の聳立を見る「犠牲の店」を出して、數万の富を擁してをる北村鹿太郎氏は當年四十九歳の男盛りである、

氏は菜園場に呱呱の聲を擧げ幼時双親を失ふて孤兒となるや、市紺屋町に合羽商を營む叔父黒瀬馬平氏の家に養はれ成長するに至つて、齡ひ十七八の頃志を抱いて單身大阪に渡り時計商に奉公することになつた、茲に於て具さに刻苦艱難日夜不眠の苦楚をなめ勤續すること多年に及び、その技術の成るに至り歸國し年二十五六歳の時初めて播磨屋町に細やかな店舗を設け單身コツ／＼と修繕にいそしんだものである、その後大正七年頃本丁筋一丁目北側に賃居し一人の手代を使つて専心自ら修繕に従事し堅實なる時計商を營み乍ら精進することを怠らなかつた、斯くて彼の歐洲戰亂好景氣の餘波を受け多少の蓄財によつて次第に地位を築き、大正十年新京橋に店舗を移すことになつて薄利多賣主義をモットーに組合外の營業により大いに奮闘したものだから、忽ち組合側の壓迫を受け

だが、然も斷乎として屈するなくこれを契機に躍進に向つて約十名の店員をよく督勵し又自らもその掌にあつた、氏の行動の端正にして且つ商略に富む非凡の材幹は遂に正義の神につちかはれ、忽ち人氣の焦点となつて顧客本位を信条とせる勤勉努力の効果空しからず店舗日に月に榮え、資産と信用が伴ひ遂に業界に指を屈せらるゝに至つたのは確かに立志傳中の人物として推賞するに充分である。

氏は近時酒肉の巷を去つて觀世流の謡曲を嗜み堂に入つたものだ、家庭には一女濤子さんあり目下第一高女に通學中である

千頭松次氏

氏は材木町の産で明治二十一年を以て生る市立商業學校の出身である、最初大阪山口銀行に職を奉じてゐたがその後神戸第六十五銀行に轉勤し更に大正九年高知商業銀行大阪支店に勤務したが、同十三年商銀の破綻によつて歸縣し同行の整理に携はつて新に海南銀行を創立してから同行の取締役となつて重きをなしてゐたが、再び同行が昭和七年解散となつた爲め同行を辭して暫らく閑居の休であつたが現在では町田病院の會計事務を見てゐる。

氏は人となり天資溫厚至つて圓滿で趣味は繪畫を嗜み會て南宗畫家松本白雲師に就いて南畫を修め「松雲」と號して畫技に長じてゐる、家庭には二男あり長男一二郎君は市商二學年に二男茂君は第四小學六年に通學中で、夫人千代さんは縣下に於ける社交界の花形であり第四校下婦人會長、上街國防婦人會長、土佐婦人會、愛國婦人會等の幹事をして目覺しい活躍振りである。

久万小馬吉氏

明治二十四年二月十九日市本町に生る、舊名を保次といひ昭和四年八月先代歿後襲名したのである嚴父小馬吉氏は嘗て堺町で醬油製造業を營み繁榮に伴ふ狹隘を感じて明治三十年頃轉じて現在の箇所に移つた、氏は第七回市商の出身で卒業後家事に従事し現に合名會社久万商店の代表社員となり傍ら高知酢造組合長、高知縣醬油製造組合副組合長、高知商工會議所議員、所得稅調査員、町總代等々の公職に擧げられ組合の爲め盡瘁してゐる、業者間に於ける商才に富んだ溫厚誠實の人物と稱されてゐる程であり、趣味は觀世流謡曲、舞踊、若柳流などを嗜み又劇評家として名高い、家庭には一粒種の益枝さんが第一高女卒業後養子を迎へ生花、お茶道に精進し頗る圓滿なる家庭を作つてゐる。

前田堯資氏

氏は身長五尺八寸體重二十三貫餘の堂々たる偉丈夫である、故前田稼一郎氏の二男として明治二十七年九月二十八日を以て安藝郡津呂村（室戸岬町と改名）に生る、嚴父稼一郎氏は克己心に富み勤勉比ぶ者なく相貌さながら故安田善次郎氏に酷似せるを以て近郷四國の安田翁と異名せられた、氏は大正三年縣立第一中學校を卒業するやその四月高知銀行に入り津呂支店長となつた、斯くて同一年同行は四國銀行と改稱せられたが尙留まつてその地位にあり、十四年には津呂村會議員に選ばれる氏は政黨的色彩を帯びてゐないけれども其の知己の間にあつては氏が同地に於ける素封家なるを以て、中央政界に獅々吼せん事を希望して止まない一事を以て其の信望を窺ふに充分である然れども尙春秋に富む氏は自重して輕舉妄動する勿きが如く性嚴格にして此事と雖も苟もせず而も一面温情に富むでをるから氏の下に勤務する者皆悦服せない者はなかつたが、昭和六年四月同行を退社以來は家に在つて恒産の扶植に努めてをる、過般兒童教育上その不便を感じ市内大膳様町に寓居を構え時に出掛ける姿を見受けるが、氏は現に高知鐵道會社取締役、四國銀行地方協議役に擧げられ、家庭には今年七十歳の壽齡を迎へた實母榮さんが頑健で唯一の三味を嗜み、夫人貴世さんは香美郡岸本町橋本熊吉氏の長女で土佐高女出身の才媛で音楽、洋裁の技に長じ子女朝子、彰子の兩人は男

師附屬に在學中で氏の趣味としては謡曲、寫眞、運動などで就中庭球と銃獵は最も得意とする所であり神佛共に崇敬、社會問題及び文學書を愛讀するとは敬服の至りである。

西岡里吉氏

氏は吾川郡下八川村の産で明治二十年を以て生る第一中學校卒業後高知營林區署に奉職すること二ヶ年その後高知縣廳に轉職し林業課勤務となり商工、地方、秘書等の各課を経て官房主事となる、次で大正十二年長岡郡長となり二ヶ年間勤務の後縣事務官となり各課を経て社寺兵事課長となつたが、昭和三年退職野に下るや當時民政黨より屢々縣會議員の候補者に推薦されたが、賢明の氏は固辭してこれをうけず、昭和三年十一月縣下最高級町長として室戸岬町に迎へらるゝに至つた斯くて在職中上水道、學校改築、港灣の修築及び港灣の縣費支辨編入など幾多の功績を修めたが、昭和六年三月辭職し爾來市内築屋敷に閑居しつゝ専ら社會公共の事業方面に携はつて社會事業協賛會理事、山内神社奉贊會評議員、高知署改築同盟會理事、妙國寺復興會理事、南興會幹事、縣師範附屬、城東、第一高女等々の各學校の委員幹事に擧げられ活躍の第一線に立つてゐる、氏は趣味として書畫、圍碁、釣などの娛樂を持つてをるが、家庭には千代子夫人の間に二男二女を

儲け長男敏喜君は城東中學に、二男弘君は師範附屬へ長女のサチ子さんは第一高女にそれ／＼通學中であり、とても圓滿な理想的家庭で他處の見る目も羨ましい。

古谷重吉氏

一百姓の家に育ち旅館の丁稚となつて血みどろの奮闘は遂に酬ひられ、今や縣下著名の一つに加へらる旅館旭軒の經營者古谷重吉氏も又立志傳中の人物といふ可きか、氏は明治二十九年を以て長岡郡久禮田村に生れ、土地の小學校に學んで義務教育を終へたその後寒村にあつて農業に従ふてゐたが、徴兵適令も過ぎて廿三歳の頃技屬に當る大石寅太郎氏が市本町で旅館旭軒を經營し一流の羽振をきかしてゐた所からこれを頼つて出高し、同館の丁稚奉公に巢み込むことゝなつた、然るに女將の幸さんは頗る厳格な質で氏に對つて奉公人となるからには今日より「叔父叔母の言葉は絶對禁物だ旦那奥さんと呼べる乎」さもなくてはならぬとのキツイお達しの仕込に隠忍自重して五年の歲月は夢のやうに流れ惜しや女將の死去となつて、同館は閉鎖するの止むなき状態となつた、其所で氏は奮然大正十五年六月に至つて同郷の古谷某と共に一万數千圓を投じ旅館を譲り受け茲に共同經營をなすこと五年間その間幾多の經緯を経て遂に之を解消することになり昭和五年七月獨立經營とな

し爾來今日に至つてを、その間備さに苦楚をなめたが併し家事萬端を自己の細き腕で立ち働いてゐる民子夫人内助の功に歸すべきは素より大にして本年三月には多年の宿望を達すべく舊館を壊ち以て最新式の修築を施し現在二十四室を設け收容人員百名餘の準備が完成して業界に斷然異彩を放つてゐる、

氏は何等の趣味を持たず只營業に忠實たらんとする一天張りで、夫人は新改村竹内春吉氏の長女であり家庭には二男一女の儲けあつて長男長女の二人は自下それ／＼第三小學校に在學中である。

島内松南氏

土佐畫壇の權威者として凡く知られてを、氏は明治十四年を以て香美郡野市町に生れ、幼少の頃から畫を好んで常に紙筆を翫び十二歳の時種田豊水畫伯に就いて花鳥を學び後ち南部錦溪、柳本素石の兩畫伯に師事した、そして明治三十五年上京して橋本雅邦に學び更に梶田半古の教を承け人物花鳥、山水往くとして佳ならざるはなく、文部省展覽會、國畫玉成會、二葉會等に出品し金牌賞状等を得て一方東都畫壇の重鎮であつたが、大正十二年歸省爾來彩管に親しみ一家の筆致は洗練を加へて溫雅味あり清秀で頗る氣韻に富んでゐる。

氏の令嬢美智子さんは松琴と號し丹青の道を嚴父に修め前途有望で縣下に於ける唯一の閨秀作家として囑望されてをる。確か當年三十二歳と承る。

元吉秀太郎氏

氏は明治二十五年市要法寺町に生る、市立商業學校の出身で俊才の聞えあり明治四十三年頃高知銀行に入り預金課に勤めその後佐川支店長となつて在職中同地の政界に重きをなす奇才森淳太郎氏にその才を見出されて森氏の斡旋によつて大正七年頃高陽銀行の創立を見るや同行の營業部長に擧げられ大に手腕を揮い次で昭和五年三月土佐貯蓄銀行支配人となり頗る令名を博し今日に至る、氏は頭腦明晰頗る熱心なる事務家にて銀行界の名士に數へられてをる、趣味は撞球圍碁などを嗜み又讀書文藝に耽ける、家庭には一女一男あり長女俊子さんは第一高女の四年生で長男の文雄さんは昨年十一月の出生にかゝるといふ、要するに氏は土佐の生みたる典型的銀行人である。

森木光磨氏

吾川郡伊野町で森木醫院といへば町内で誰れ知らぬものがない程名高い名望家であり、病院の歴史

が古いのを物語つてゐる、由來同家は祖先から嚴重な家憲を作り恒産は之を子孫に譲らず自ら獨立して生計の道を任ねることに堅く守らしめた、だから氏の嚴父徳次氏は明治四年を以て生るや年二十一で東都に上り醫術の修業に血みどろの奮闘を続け遂に内務省の醫術檢定試験にパスし醫師の免許を得て歸國と共に病院を開いて爾來三十有餘年の間醫者としての力量は町民の信望を博したのであつたが、今や閑居し悠々自適裡に性至つて頑強なるも嗜好の酒を日夜汲んで斗酒尙辭せず李白の想ひあらしめ霸氣滿々たるものがあるといはれる。

氏は明治廿九年を以て生れ、第一中學校に學び次で大正九年岡山醫專卒業後、大阪松岡病院に四ヶ年間奉職し専門的研究を積んで歸省、それより嚴父の業を繼承し現在に至つたのであつて、現に伊野小學校の囑託醫となつてゐるが、その恬淡なる資性と心から患者に接する親切が人氣の焦点となり尊嚴を以て呼ばれてゐる、氏は他に趣味といふ趣味がない、専心患者の脈を握るのが第一の趣味で餘暇さへあれば讀書に耽ける位であるさうな、家庭には第一高女出身の幸子夫人との間に一男一女あり、長女淳子さんは伊野小學校の五年生で次女及長男は未だ幼少で家に嬉戯してをる。

小西寅之助氏

京に生れ大阪で育ち土佐に歸化した所謂土佐ツ兒で明治二十三年十月を以て生る、大阪道修藥學校を卒業し文部省檢定試験にパスした藥劑師免許の持主である、

氏は學校を出るや第十一聯隊衛生部に入隊し約一ヶ年軍隊生活の服務を終つて明治四十四年の暮土佐に來り現住の菜園場に居所を定め、茲に藥種商を開店したのである、

爾來歲月を閱みし店舗の隆昌につれ昭和七年十月頃播磨屋町交又点西角に支店を設け益々その信望を博してをるが、氏は商工議員たること三期間を勤め現に高知商工會議所議員の傍ら高知縣藥種賣藥同業組合の評議員でもある、天資溫厚恬淡で人情美に富んだ人物として知られ家庭には幡多郡の名望家石黒氏の女を娶つて三男一女を擧げてをる、長男の史郎君は海南中學卒業後藥學專門學校に入る準備中で次男敏夫君は城東中學五年に長女の節子サンは第一高女に通學中である。

一 柳松次郎氏

土讚線開通に伴ひ一層の眞價をみとめられ、土佐に旅した者が必ず土産に持ち歸るものは一柳豊榮堂の飴「大つぶ」である、先代助太郎氏は明治二十一年十七歳の時嚴父榮次氏に連れられて愛媛縣の三島から來高し、細工町にさゝやかな飴屋を開業した大粒飴を賣つたのに其のゆわれを持つもの

現主松次郎氏は明治二十七年を以て先代の地に生れ大阪森岡農林學校に學び大正五年卒業後は家庭にあつて、先代を助け不馴れな菓子製造に従ひ努力を振つて來たが、先代歿後の今日では氏夫妻が代表社員となつて他にパン、カステラ其他時代に順應せる銘菓「ケンピ」或は土佐名所煎餅などを製造し、自家用の自動車二台を設備して以て四國四縣に配給してゐるといふ豪華な繁榮振りで同店製品の大つぶ、ケンピ、中華子等は全國菓子品評會、特産博覽會、高知開市記念博覽會等に於て金牌及二等賞を受領したのみならず嘗て攝政宮殿下、閑院宮殿下、伏見宮殿下、久邇宮殿下、北白川宮殿下を初め奉り村雲尼公各宮殿下御成の砌り産業獎勵の御思召により或は高知縣より特産品としての御用命を拜して御買上の光榮に浴してゐることは餘りにも有名であるが、曩に皇太子殿下御降誕に際しては侍從武官鈴木貫太郎氏を通じ御誕生記念として銘菓献上の恩恵に浴し氏をはじめ氏の全家庭を擧げて只々感激に満ちてをる。

商略に長じ堅實淳朴の美質を持つた氏は一面豊榮土地建物會社の社長となつて之が采配を揮つてゐるが、又有名な子寶で家庭には土佐高女出身の喜久惠夫人との間に七人を儲けてゐる、長女の貞子さんは第二高女の五年生で、二女豊子さんも同校一學年に在學中であり三女は附屬小學校に學び長男の吉之助君は土佐中學の三年生で他は幼兒で家庭にある。

下司 凍月氏

土佐美術界に一抹を投じ美術家聯盟の設立によつて重きをなしてゐる氏は明治十四年を以て市中島町に生る、幼少の頃から畫を好んで種田豊水畫伯の門下生となつて花鳥の研究を始めたのが抑も、畫家となつて藝術のために精進しようと企てた第一歩である。

梅檀は双葉より香ばしと畫を描くのが何よりも楽しみで或時叔父に武者繪を描いて貰つたその繪を何遍か見ても描き見ても描いて稽古してゐる中叔父より上手になつたといふ事だ、豊水畫伯の門を潜つてのち柳本素石や南部錦溪畫伯の門を叩いて山水の筆意を究めのも上京して寺崎廣業の門に遊んで一意専心畫法に努め新機軸を出すことに苦心し一面俳畫の研究に興味を持つようになつて小川芋錢、下村爲山氏等と共に俳畫展を開いて中央で大いに氣を吐いたものであつた、歸縣後は専ら斯道の精進に努め今日に及んでゐるが、その描く所俳畫は氏獨特の妙味が溢れてゐる氏は畫道の外禪學を極め既に悟道に入り又金魚、刀劍など嗜み其の鑑識に富んで縣下第一人者との稱がある。

太田 辨吾氏

氏は明治十七年を以て生る生粹の江戸ッ兒である、東京工手學校に學び土木學科卒業の技師で東京

市役所を振り出しに桂川電力會社、横濱市役所等に奉職し官界畑に育つたが昭和五年五月土佐電氣會社に入社し爾來今日に至り現に土木課長の椅子に腰を据へてゐる、氏は資性至つて頑固なれど一面男性的氣性に富み頗る熱心な事務家としてその實力を社内に物語つてゐるが趣味として謡曲を嗜む面白い人物である。

稻内 龍太郎氏

縣下土木建築請負業として光つてゐる、市本與力町に事務所を設け業務員には庶務會計係高村小勝氏、土木主任奥谷信一氏、建築係泉正平、天野忠勝兩氏此の分擔で責任味と堅實味を其のモットーとしてゐる、稻内氏は明治二十一年三月二十六日兵庫縣國領村の生れで、土地の小學校を卒へるや嚴父が建築業に従事してゐたので之を手傳つて家庭にあつたが、明治四十年八月頃から約四ヶ年間國領村大江喜四郎氏の現場代人となつて福知山線保線區工事並に兵庫縣廳工事及材木商などに従事した、それより朝鮮京城吉野町新宮商行森田工務所の事務員となり朝鮮總督府道路改修工事及び道路災害復舊工事に従ひ、その後大正十三年五月まで有馬組の現場代人となつて鐵道省高知線須崎、山田間第四區仁淀川橋梁架設工事に従事し、その年の八月から自己名義にて土木建築業請負工事に

従事するに至つた温健の人物である、

爾來今日に至るまで、鐵道省、高知市、高知縣、南海水力電氣、室戸町、土佐セメント、高知鐵道野村組、高知放送局、四十四聯隊、須崎浦戸兩漁業組合等による建築工事線路補充、切取水害復舊事業などを完成し、仁淀川橋梁架設工事は鐵道省から須崎漁業組合改築には同組合長より竣工による功勞感謝狀並に金壹封を授與されてをる、氏の趣味は幼年時代より今日に至るまで銃獵を唯一の娛樂とし、家庭には四女一男あり、長女政子サンは中村手藝學校出身で京都の氏族に嫁し、二女加代子サンは高坂高女出身で當年二十一歳、三女田美枝さんば土佐高女四年にその令妹及び長男の孝雄君二人は第三小學校にそれ／＼在學中だと聞く

近藤靖雄氏

南國土佐の小京都と稱せらる高岡郡佐川町に於て近藤醫院といへば村内で誰れ知らぬものがない程名高くなつてをる、と云ふのは同院の歴史が古いのと一般患者の氣受けがよいのも理由の一つであらふ、院長の近藤靖雄氏は國手長靖氏の嗣子で明治二十一年を以て佐川が其の生れ故郷だ、嚴父は醫の傍ら文藝にも趣味をもち如雲と號し俳諧をたしなみ汎く句友を有し交際してゐた。

氏は大正五年の熊本醫專出身で大正八年歸省し父の業を繼承することになつて開業以來今日の隆昌を來たしたのである、天資温厚隨つて醫を天職と心得忠實に敢て誇張的自己の吹聴を好まない、故に信用を博し現に青山文庫の理事として同文庫發揚のため盡瘁する所がある、

氏は頗るの多趣味で十五年の久しき間、書畫刀劍の類をたしなんだが一昨年頃から陶器に轉じ能茶山燒の蒐集に努め多數の珍品を秘藏してゐるらしい、然るに最近は土佐犬に興味をもつようになり今年の五月土佐犬、日本犬保存會佐川支部を設立之が發會式を擧げたといふ熱心家だ、又紫白と號して俳諧にも長じてゐるは有名である、家庭には一男二女あり、長男千春君は城東在學中に轉じて東京青山中學校に學び卒業後歸省して現に高知高等學校理科三學年に在校中で、長女千種さんは第一高女に、次女千鳥さんは佐川高女にそれ／＼在學中である。

矢作健氏

氏は秋田縣の産で明治二十三年を以て生る、早稻田大學理工科出身で曾て東京電燈株式會社に奉職し技師としての敏腕を揮ひ昭和四年土佐電氣會社に聘せられ入社爾來今日に至り現に架線課長の要職に在り、土佐に居ること七年有餘歳されど尙且つお國訛りがとれず氏に接するに一面無愛嬌の想

ひあらしむるも親しむにつれそこに軟か味が滲み出る好人物である、技術家としての経歴に富んで
をり仕事が出来るので社内に重きをなしてをる。

川谷横雲氏

現代日本書道の大家として夙にその聲名を馳せた故川谷尙亭氏の令兄である。

安藝郡川北村の産で高知縣師範學校に學び同校卒業後郷里各地の小學校を歴任し、その後安藝中學
校に奉職して、習字科の擔任教師を勤めたが、現在は母校と女子師範に教職を委ね専ら書法の指導
獎勵に努めてをる、氏は初め書を在學中西川菱花に修め後年日下部鳴鶴、比田井天來氏等に就て研
鑽すること多年に及び、更に貫名翁を學んで益々進境に入り遂に一家を成すに至つた、現に泰東書
道院審査員として書名高く縣下書道界に盡す所頗る多し、殊に公職の閑自邸に在つては兒童門弟十
數名の指導教養に盡粹しつゝ、今や稀に見る縣下書道界の權威者として崇敬されてをる。

矢田勇氏

土佐電氣會社の取締役たると共に同社の技師長として羽振を利かせてゐる矢田勇氏は島根縣の産で

最新の技術
店



土創 佐業 珊瑚 元七 祖年
島 瑚 島 瑚 年
高電 知話 市〇 京四 町番

店

期間確實
屏風額面
一般表裝
技術優秀

美 術 表 裝

師 具 表

山 本 西 京 堂

高知市追手筋本願寺前

明治十六年生れである、東京の高工出身で帝國日本電燈會社の技師となつて奉職しその後静岡縣でも電燈會社に入社し技師長を勤めたが、大正六年土佐電氣會社の技師長として聘せられ入社爾來その敏腕を揮ひ昭和十一年六月には取締役に選舉せらるゝに至つた、氏の明敏なる頭腦と手腕によつてその宜しきを得同社の經營隆昌は好成績を擧げつゝ今日に至つてをるのである、要するに技術家としての氏は如上の事實が雄辯にその實力を物語つてをるが氏のためには仕事が第一の趣味である事であらねばならぬ、氏の第二の趣味は撞球で百五十を突くといふこれによるも又氏の氣性を窺ふに十分である。

中田 鹿次氏

中田鹿次氏は明治五年二月二日吾川郡伊野町に生る、明治三十二年一月同町に於て諸紙輸出商を開業し同時に東京市日本橋區小網町に支店を設け諸國紙問屋を始め、翌年伊野町他向に工場を設けて特別紙の注文を抄造しつゝ大正二年十月大阪西長堀に支店の開設を見たが逐年發展して狹隘を告ぐるに至つたので大正十二年立賣堀通一丁目に移し益々發展を續け一意專念製紙技術の向上にいそしみ改善進歩に貢献すること多大であつたが爲め躍進の波に乗り本縣紙業界に異彩を放ち今日の諸

經 營 航 路

大 阪、神 戸 直 行 線

(神戸驛經由省線連絡)

高知、土佐西沿岸經由日向細島線

高知、土佐阿波沿岸經由阪神線

東京、名古屋、高知間貨物線

土 佐 商 船 株 式 會 社

高知市棧橋通五丁目 電話(代表)二四〇番

紙製造輸出業中田鹿次商店を輝やかしく建設する成功の喜びを見るに至つたのである、然にその間同店抄造の製品は明治三十六年大阪市に開催せる第五回内國勸業博覽會に於て二等賞銅牌受領以來内外博覽會等で功勞賞金銀牌を受領すること二十數回に及び、大正四年五月には高知縣國産獎勵の御思召を以て山内侯爵家より皇室へ御献納の土佐改良養漉書院紙抄造の拜命を受け爾來毎歲謹製の上献納の光榮に浴するを以て之を記念する爲め右紙を八千代紙と稱へてゐる、又先帝陛下御即位御大典の際は高知市より御献納の養漉改良書院紙を抄造し、翌五年には皇室にて御編纂の帝範臣軌御料紙として又明治天皇陛下、照憲皇太后陛下御歌本御料紙として内閣及び宮内省より抄造の拜命を受け、大正八年四月縣産業彰功規定に依つて銀盃一個を授與され、同十一年十月には今上天皇陛下東京殿下にあらせられ本縣に行啓遊ばされた砌八千代紙を傳献御嘉納の光榮に浴し、昭和十年一月出光侍從武官御來場になり、次で同年八月には澄宮殿下御台覽の光榮に浴した重ね、家門の榮光を子々孫々に傳へる不朽の名譽を筆者は縣民大衆と共に壽ぎ併せて氏の業績に敬意を表する次第である、氏は人となり濃厚篤實にして徳望あり現に土佐紙業組合常議員、伊野學務委員、そして町會議員を十數年やつて居る。

野村茂久馬氏

士佐のムツソリーニでは物足りない、四國のムツソリーニと言ふて初めて首肯の出来る野村茂久馬氏は、その面貌から、その性格から一切合切黒シャツ宰相のムツソリーニをつくりである、新聞に出る野村氏の寫眞顔を一見して、「これはムツソリーニの顔ぢやないか」と眞面目に間違へた人さへある、それ程野村氏の顔はムツソリーニに酷似してゐる、ムツソリーニが少壯わづかに三十九歳、雄姿颯爽として三十万の黒シャツ決死隊を率ゐてローマに進軍、國王に謁して首相の印綬を帯び遂に今日の新興伊太利を築きあげた驚異的足跡と、野村氏が少壯わづかに三十一歳、内國通運會社高知支店の主任となり、爾來狂瀾怒濤の眞ツたゞ中に奮闘又た奮闘の活動を續げること三十餘年、遂に野村玉國今日の大を成し三千の従業員より「親爺々々」と崇められ、一面貴族院議員として、お公卿様のやうな多額議員の型を破つた潑刺たる態度とは之れ亦た實に酷似してゐる「彼は何如にして今日を得たのか」は伊太利のムツソリーニと、四國のムツソリーニに共通する大なる掲題でなくてはならぬ、乃ちその半生は數奇變轉、どこを見ても生血の滴る奮闘の記録であり感激の鎖である、豪壯無比の活歴史その物に懦夫をして起たしむる生命の躍動があることを認める、機關盛んにして

英雄衰へたるの時代は既に過去に屬した、凡人の奮動には世を擧げて皆な飽きた、昭和の維新は謂ゆる英雄待望の時代である、新時代來る、田園に、工場に、學園に第二の龍馬第二の愼太郎を要望する聲が次第に高まりつゝある、桂濱巖頭に坂本龍馬の銅像を建てたのは誰か、室戸岬の巖頭に中岡愼太郎の銅像を建てたのは誰か、寡言實行主義の野村氏は、その心眼が百年後の社會に透徹しておる、朝に夕に眼前の利を趁ふ種類の商賈とは着眼点が違ふ。

野村氏に最も鮮明なる性格は、世の中を活禪で行くその邁進力である、二二ンが四と算盤を弾かすに二二ンが六、二三が八と弾ひてグン／＼猛進する桁外れの腹藝である、この点はムツソリーニ式でもあるが亦た尾張中村の「あやしの民の子」から天下を取つた秀吉にも似てゐる、野村氏は早稲田専門學校の出であるけれども讀んだ書物の理窟に拘泥しない、實業界に入つた第一日から哲學本や政治學の學說などに少しも累はされてゐない、それは恰度秀吉の遣り口が天衣無縫、生れたまゝの快男子で彼の頼つたものは彼の天稟の直觀力と人間學だけであつたのと同じ、秀吉が徹頭徹尾陽性の漢子だつたやうに野村氏には微塵も陰性がなく明朗の裡に鐵石の剛志剛腸を藏し如何なる困難をも克服する意思と腕がある

氏は高知商工會議所會頭として近頃朝起會なるものを發起實行してゐるが、之が一般實業家に及ば

す感化影響は實に莫大なるものがあらふ、想ふに眞の精神作興は四時食を蹴つて曉起する其の勇氣の根基に存すること勿論で、この勇氣を欲するものに成功のあり得やう筈がない、野村氏は自己の体験を以て直に人に施し、他人の成功を樂しみとする大先輩である、己れの欲する處を施すことは世界最大の善事であり、美事であらねばならぬ、氏の提唱せる朝起會が如何に意義深く商工業の繁榮に裏附けるかは今後の事實が最も雄辯に之を物語るであらふ。

要するに野村氏は土佐の生みたる近代の偉人である、四國ムツソリーニの名が氏の全貌を朗らかに象徴する心地がする。

貴族院議員、高知商工會議所會頭、土佐交通協會々長、土佐觀光協會々長、土佐海運業組合長、

株式會社野村組社長、野村自動車株式會社々長、高知鐵道株式會社々長、土佐商船株式會社々長

株式會社四國商會社長、四國自動車株式會社々長

等々の肩書で氏の關係せる事業の輪廓が判るであらふ明治二年十二月廿八日生れ、發祥地は安藝郡奇半利、カーライルの言つた「人生は奮闘なり」の言葉を如實に實行せる巨人として特筆大書する

田野岡元吉氏

氏は明治二十二年長岡郡岡農村に生る、東京電氣學校の出身で曾て王子製紙會社の技師としてその職に携はり大いに手腕を揮つたものだが、大正十一年轉じて土佐電氣會社に入り現に發電課長の椅子を占めてをる、至つて緻密な頭腦の持主で性格は沈勇で不動の姿態にある、専門的電氣學に對する經驗と深い智識を有つてをるので社内の權威として評判がよろしい。

佐竹晴記氏

氏は高岡郡窪川町に生る、大正八年中央大學を卒業し翌年年二十歳にして辯護士試験に及第し同十二年まで東京市田村町で辯護事務所を開業したが震災に遭ひ斷然歸縣、高知市において開業、そして餘力を政治の革新に用ゐる大正十三年卒先して土佐普選聯盟を創立し、昭和三年社會民衆黨高知縣聯合會長となり、翌年五月は市會議員に當選し市民大衆の聲を市會に代表して善戰健闘、昭和七年社會民衆黨中央執行委員に擧げられ、昭和八年五月市會議員に再選せらるゝや益々市政刷新のため血みどろの奮闘をつゞけ、昭和九年全國農民組合顧問に擧げられ、同年十月社會大衆黨高知縣聯合會長となり、昭和十年五月市參事會員となり、同年十月縣會議員に當選して異彩を放ち、昭和十一年二月の總選舉に社會大衆黨の公認候補として第二區より打つて出で、既成政黨を尻目にかけて最高

点をもつて當選し無産黨のために万丈の氣を吐いた、氏は辯護士としては本縣法曹界の花形であり政治家としては本年四十一歳の少壯でもあり輝やかしき未來を約束せられる、趣味は政治の外、暇さへあらば古今東西の書を讀破することが最も其の楽しみとするところ、夫人久子女史は鷹匠町片岡楠馬氏の令嬢高坂高女の出身で家事一切を切り廻してゐる。

西田鎌太郎氏

西田鎌太郎氏は明治元年五月八日を以て高岡郡斗賀野村の貧困なる農家に生れ、齡九歳にして嚴父を喪ひ十四才の時高知市に居住する伯父なるもの、家に寄食して、明治十五年高知縣立醫學校に入り同校卒業後同十八年十二月上京して濟生學舎に學び、翌十九年醫術開業前期試験に及第し次で同二十年後期試験にも見事合格するの榮譽を得、歷年の刻苦一朝功を奏し同年五月醫籍に登録せられ全國稀に見る僅かに十八歳と十一ヶ月の年齒で醫師の資格を獲得するに至つて、郷里斗賀野村に歸り醫院を開き實社會に出で多年の蘊蓄を實地に試みるこゝなつた、然るにその後再び研鑽の念に燃え同三十年上京北里研究所に學び同年六月高知病院に聘せられ此所で二年位荐りに研究を重ね確信を得るに及んで、同三十二年四月現在の佐川町上郷に醫院を構へ開業し今日になれるものである

この間氏が徳望のあらはれとして郡會議員、現町會議員、高岡郡醫師會長、財團法人青山會理事長等を勤め就中町會議員は前後通じて七期間の久しきに亘り、且又青山文庫の指導啓發に盡瘁する所偉大にして隠然重きをなしてをる、

氏の趣味は書畫で殊に維新志士の遺墨を蒐集するを唯一の樂みとし門外不出の品が澤山ある、盆栽も好きだが近時は農家の副業を奨励すべく自らその範を示すの意味に於てメロンの栽培を始め、メロンの栽培では本縣の嚆矢と稱せられてをるその他果樹温室等の設備を施し傍ら養蠶の業などもやつてゐる、家庭には二男一女ある、長男の寧君は京都立命館大學出の法學士で現に大阪府廳に勤務し、長女幸枝女史のため養子楠治氏を迎へ同氏は高岡尋常小學校の主席訓導を奉職してゐる。

吉本良一氏

氏は明治三十四年香美郡片地村の出身で、後吉本外次郎氏の養子と成りて製綿業をなし今日になれるものである、市立商業學校第十八回の卒業で曾て大阪電燈株式會社に入り勤続八年間に及び、大正十四年歸國して家業の手助けを爲すに至つたが、昭和六年頃先代外次郎氏が有終の美を濟して大川筋に別邸を構へ閑居することゝなるや、氏は先代の業を繼承して約五十名の女工と店員を使用し

盛にその製造をなし縣下全般に亘る一ヶ年産高約二万五千圓を超へ、専ら製綿及販賣を營む傍ら中種崎町に寢具一式の吉本製綿宣傳部を新設益々事業の發展に努め一家の繁榮日を追ふて隆昌を極めてをる、氏は資性濃厚篤實、事に當るに熱心を以てし稀に見る青年實業家として推賞すべく現に町總代を勤め、家庭には多喜子夫人との間に二男あり長男敏雄君は目下第二小學校に在學中であると

松村太吉氏

高知街に著名な電機商會として松村太吉氏の存在を知らないものはないだらふ、氏は明治二十八年長岡郡後免町に生れ、大阪商業學校に學び大正六年同校を卒へるや將來の大抱負を期して滿鐵に志を立てたが、義兄になる京城日報記者奥田直毅氏の勧告を受けて渡鮮し、朝鮮總督府に入り内務部圖書係に勤務すること約三年間に及んで病に冒され遂に大正六年國に歸りて出高し、現在の常盤町に居を定め此所で質屋業を營むことになつたが明敏なる氏は昭和三年九月質商の傍ら時代に適應した電機器具の販賣を劃し之が店舗を張つて爾來業績の効果を擧げ、日本蓄電池、松下電氣産業、朝日乾電池諸會社の縣下總代理店となつて益々活動を續け、同店販賣の諸機械器具は最優秀品としての折紙を附けられるに至つて、先年閑院宮殿下御來縣の節は高知縣より擴聲器指定の御用命を拜し

御聽聲の光榮に浴してゐる、斯る歴史と信用はその後いやが上にも需用家を一増するのみで、殊に毎年縣下各學校に行はる秋季運動會には必らず擴聲器の御用命に接して寸暇なき状態を極め最近の躍進はめざましいものがあるといはれてをる、氏は町總代に擧げられ前後通じて六年間に亘り現在とても無理にくゝりつけられてゐる。

岩村勳之助氏

高岡郡日下村に岩村醫院の院長として知られてをる、明治二十年一月十七日生れ、愛媛縣喜多郡管田村の出身で士族岩村勳氏の次男である、嚴父は會て大洲藩に仕へ御馬廻り組頭を勤め廢藩置縣後は郷里管田村の村長となり、爾來明治十五年頃まで其の椅子を保ち、社會公共の事業に盡し、功績尠なからざりしが五十四歳を期し此の世を去つた。三歳にして母に死別し十歳の時父を喪ひ孤城落日の憂目に遇ふた氏は、茲に孤立奮然として明治三十年春四月、志を立て郷關を去つて東都に上つた、斯くて堅實なる志操を抱いて苦學力行に努め、日夜燒芋を嚙つて牛乳配達に或は新聞配達などし又は醫院の藥局生となつて惡戰苦闘を續けたのであつた、そして二十歳の時將來醫を以て身を立てん事を決意しその年文部省醫術開業試験に應募して見事前期にパスするに至つた、茲に於て氏は

勇氣百倍し素志貫徹のため東京私立日本醫科專門學校に學び同校卒業後、明治四十三年四月後期試験に合格して艱難汝を玉にすの古諺に漏れず齡ひ二十四歳を以て遂に醫師の免許を獲得した立志傳中の人物である。

斯くて之れより實社會に出で、多年の蘊蓄を實地に試みんとしてをる際、京都田中病院に招ぜられ副院長として此所で四年餘り研究を重ね確信を得るに及んで大正四年一月一日より現在の日下村に醫院を開業したのであつて、その恬淡にして濃厚なる資性は隨つて醫を天職とし、醫以外の事は何事も忘れ全魂全心を自己の天職に打込み今やオートバイ一臺と之にオースチン小型家用自動車一臺を購入し自ら運轉に當つて忠實に而も患者に接する心からの同情と親切が人氣の焦点となつて「岩村先生」の名は寒村の各家庭に權威と親愛と尊嚴とを以つて呼ばれてをる。氏は嘗て村會議員をも勤めたが、現在では同村及び加茂二ヶ村の村醫、校醫となり忠實に盡してをる、家庭には敦美夫人との間に二女あり幼少にして家に遊戯し、長女の英子さんは第二高女の出身で奉天浪華高等女學校教諭石田忠彦氏に嫁し女兒を儲け頗る圓滿だといはれてゐる。

鹽田 元氏

氏は秦村秦泉寺の産で明治三十二年を以て生る、少壯社員で朗らかに未來を約束せらるゝ人物だ、高知工業學校卒業後大正十年土佐電氣命社に入り美術部線路課勤務となり昭和九年調査課に轉じ次で昨年一月同課長代理となつて今日に及んでをる、資性温厚頗る熱心な事務家として斷然光つてゐる、趣味は圍碁。

浅井玉惠女史

「川崎金持ち浅井地持ち」其の浅井家現當主は浅井玉惠女史で先代藤十郎氏の令孫に當る、縣立第一高等女學校出身の才媛で謂ゆる才色兼備の淑女たる評判が高い、藤十郎氏は幼少の頃から豪膽で一面又た負けず魂のところもあつた、そして何所となく大家らしい氣品を具へてゐて番頭は勿論のこと使用人の失策などは叱言一つ云はなかつた、氏は鬪犬と相撲が大好きであつたが、併し嚴重な家憲を作り自らも之を守り、家族使用人にも堅く之を守らしめた、その家憲第一條には「國體を重んじ忠君愛國の思想を涵養し義勇公に奉じ祖先を崇敬すること」とあり熱心な皇室中心主義であつた、だからこそ明治廿七八年の日清戦争には大に國家の前途を憂慮し一切整潔な遊びを中止し、直に一千圓を献金し三万圓の軍事公債を引受けた、氏は日露役前の明治三十六年病を得同年四月四

日五十七歳を以て惜しまれつゝ逝去した、現當主玉惠女史の後見人兼總支配人は河村茂徳氏である氏は岸本町の素封家で浅井家とは最も近き縁者なるが慶應大學の出身で温厚の君子人である、地持ちの浅井家にどれ程の地所があるか、筆者の知つてをるだけでも五台山、下知、潮江、江ノ口、高須方面にかけて莫大な上田があり、市内宅地は高知市で第一位と聞く、河村氏が總支配人となつて以來、小作人との關係水魚の如く理想的に勞資協調が行はれてゐる、浅井家の祖先は近江國東浅井郡朝日村東尾上で代々里正の役を勤め申々の家柄であつたが、享保八年土佐に來り現在の蓮池町で佐野屋と云ひ、紙類、醬油等の卸商を營んだものだ、この商賣は藩政の末期、明治の初年まで續いたものらしい、此の如き舊家であるから寶物が随分澤山で、刀劍、茶器、能面、金屏風並に應舉、山陽、大雅堂、雪舟を始め勤王家等の書畫が寶庫深く秘せられてをる、當主が女性であるから後見役に其の人を得なかつたならば歴史的古家にキズが着き世間の噂にも上る譯だが、河村氏がガツンリしてをるので塵程の非難が無い、そこに亦た氏の人格が光つてをる。

大西正幹氏

大西正幹氏は本縣第二區から二期つづけて代議士に出た、濱口雄幸氏から信任せられてゐた關係か

らでもあらう、濱口氏が首相の印綬を帯びるや、民政黨支部からは大西氏が政務次官になるさうなとの放送が行はれた、然るに親分の濱口氏は兇豎の冒するところとなつて遂に薨せられた、濱口氏以外にもう一人大西氏の知己がある、それは宇田友四郎氏だ、大西氏は深く宇田氏の意氣に感激してゐた、ところで此の宇田氏は近來宿病のために悩み抜ひてゐる、大西氏が未來ある輝やかしき政治的生活を一擲した心理作用のその中には濱口氏の死と宇田氏の病とが多分に含まれてゐはしないかと筆者は想像する。

氏は明治十二年三月二日をもつて幡多郡伊豆田村に生れ、縣師範學校卒業後、進んで日本大學に入り辯護士の資格を得て花井卓藏博士の事務所で實地の鍛錬を積み、博士得意の論法を悉く体得して師の博士から大にその將來を囑望せられ、土佐に歸つて果然在野法曹界の花形となり今日の地位と聲望を得たのである、氏は辯護士としては品格の高い辯護士であり、政治家としては人格と識見の備つた政治家である、辯護士として如何に師の花井博士に傾倒し、政治家として如何に濱口氏を尊敬してゐるかは、氏の著はせる「心の跡」でハッキリ認識せられる。

讀書と修養を怠る現代において、學問のある辯護士、學問のある政治家は誰ぢやと言へば、筆者は即刻「鳴川大西正幹氏その人なり」と答へる、氏は漢學の造詣があり漢詩にも長けてゐる、そして

文章は御手のものだ、代議士時代に高知新聞へ連載した議會の報告書は、整然たる條理、洗練されたる文字、冷靜なる批評の綜合大觀で女人跣足の評判を取つたものだ、鳴川の雅號斷じて伊達にあらず、況んや輓近書道に親しみ、筆勢飛ばんとする其の墨痕は寧ろ親分唐谷以上の出來榮へだ、筆者は思う山本忠秀氏が晩年宗教に歸依したその心境と、大西氏が書道に精進する心境とは同一轍ではなからふかと、大西氏は若い時代から刀劍の愛好家をもつて知られてゐるが然かも氏の刀劍は骨董三昧でなく矢張り精神修養の眼目に出發してゐる、心機一轉後の氏は屹度精神界の偉人となりはしないかの感じを有つ、民政黨高知支部顧問、土佐セメント株式會社監査役、前代議士、前縣會議長、前市會議長等々の光輝ある肩書も今後の氏の眼には格別有りがたく映せぬではなからふか、我等は心から氏の精神的躍進を慶賀する。

見元弘尚氏

氏は明治二十一年九月一日を以て吾川郡弘岡上ノ村に生れ、第二中學校に學び業を卒るや上京して東京醫學校に入り研攻、同四十三年卒業後醫師の免許を得て三井慈善病院に勤め各科實地の研精を積み國に歸りて大正元年吾川郡三ツ瀬村に醫業を創む、爾來多年の間地方の人達から尊敬せられ傍

ら醫師會副會長、日本醫師會代議員、村醫、校醫等々の職にあつたが、その後出で、吾川郡伊野町に移轉開業以來約十有三年を閲し今日に至つてを。元來研究心の旺盛なる氏は居常頭腦の新鮮に心懸け随つて醫を天職とし醫以外の事は必ず一切何事も忘れ唯だ全魂心を自己の天職に打込むと云ふのが氏の信條だから貴い、現に醫業に忙殺されてゐるに拘はらず吾川郡醫師會長、高知縣醫學會評議員、日本醫師會正議員等を忠實に勤めてをる所を見るも天職と學究とに對する精力の如何に旺盛なるかを知るに足るのである、要するに人間としての氏の特徴は慧敏にしてその溫厚恬淡なる資性と患者に接するに忠實なのが流露して所謂文字通りの仁術を行ふてをり權威と親愛と尊敬とを以て呼ばれてをる、桃李言はず下自ら徑を爲すと古人はいつた、氏の人氣と徳望は花に譬ふれば桃李である、黙つてをつても人の下駄で自ら徑が出来る、それに氏は頗る敬虔なる佛教家でその篤信情緒は殊に先哲偉人を崇敬し野口榮世、野並魯吉氏等を尊信して傾倒する所あり、其處に亦氏の品性に一段の磨きをかけた所以が自らにして他人の想像を許される或物がある、氏は又た有名な子福者で賢夫人靜衛女史との間に八人の男女を擧げそれ／＼就學中であると

中西町衛氏

明治十九年高岡郡宇佐町に生る、市立商業學校に學び明治三十八年同校卒業後その翌年土佐電氣會社に奉職の身となつたがのち轉じて高知商業銀行に移り大阪支店詰となり次で本店詰を拜命その才華を發揮せしも再び大正十三年土佐電氣會社に勤務し高岡、須崎出張所長を経て昭和九年本社電燈課長となり昨年會計課長の椅子を與へられ現在に及ぶ、氏は趣味といふ趣味の持ち合せなく土電の金庫を握つてをるだけあり、資性溫厚にして禿頭風貌又たなく溫和の麗光を社内に遍照せしめてゐる。

水野吉太郎氏

昭和十一年二月の總選舉以來政友會高知支部は未曾有の受難を滿喫し、支部の事務所も撤退の余儀なきに至り黨員は一時茫然自失したが、併し何時の間にもやら長老水野吉太郎氏の邸宅が事實上支部幹部の協議場所と爲つて其の玄關には幹部員の下足が六つや七つ並んでをる風景を見かけたことである。

昭和十一年十月九日、黨の長老山本忠秀氏が急逝するや水野氏は黨葬委員長に擧げられ同時に氏の邸は葬儀事務所の形となつた。

右二つの事實は暗黙の裡に政友會支部の中心が水野氏と定められたことを示唆してゐるのではなからふか、支部長が誰にならふが幹事長が誰にならふか、大御所が水野氏であることを不言不語にして物語つてをる、昔は豊太閤の薨するや五大老があり五奉行があつて秀吉の遺命を奉ると言ひながら互に勢力の奪争をやつたものだ、併し實力は既に五大老の首席たる徳川家康に歸してゐたから家康が葬儀委員長を勤めたのである、家康は性來戦争が嫌ひで平和のうちに問題を解決する流儀であり如何なる場合にも決して無理をしなかつた「鳴かざれば鳴くまで待たふ時鳥」の十七字は能く家康の性格をあらはしてをると思ふが、水野氏の處世筆法が矢張りこれである、斷じて無理をしない、脊が來て雪が溶けるやうに法爾自然の姿で物事を解決するのが其の流儀である、だから敵が無い、それに水野氏の偉大なところは清濁併せ呑む其の抱擁力と、他人の短所を見ず長所を見てそれを用ゆると云ふ眼の着けどころである、韓文公の有名な文章に「杞梓連抱數尺の朽つるあるも良工は之を捨てず」といふのがある、水野氏は人の長伎を商量して其の人の器量に隨ひて適用する極意を心得てをるから韓文公に言はすると宰相の器である、將に將たる器である氏が政友會支部の大御所と爲つたのも矢張り自然の姿である。

氏は明治七年十二月十八日を以て香美郡富家村に生れた、十七歳で村長を勤めたと云ふから少年時

代から人の上に立つて仕事をする天稟を備へてゐたことが分る、既往の肩書たる衆議院議員とか、政友會支部長とか、高知辯護士會長とか云ふものは氏の本音では雲煙過眼位のところではあるまいか、在野人たる氏には最早肩書の必要はない、代議士を優に使ひ得る器量人だからソレ以上の贅筆を弄するのは畢竟蛇足で氏の尊嚴を傷けることになるから、唯だ土佐政友派の大御所、本縣第一流の先輩として最高の敬意を捧げるに止める。

黒瀬光則氏

土電の庶務課長に納つてをる黒瀬光則氏は香美郡香宗村の出身で明治二十五年生れた、大正七年高陽銀行に入り同行庶務課長の椅子を占め敏腕を揮つたが大正十一年土佐水力電氣會社の土電と合併の契機に至るや推され高陽銀行を去り土佐水力電氣會社に轉勤約半歳の後ち合併と同時に土佐電氣會社に轉身庶務課長として今日に至れるものである、資性溫和にして新聞屋泣かせの役割を引受けてをるが其所に人をして反らさぬ藝術に圓轉滑脱の妙味を發揮する處に人と成りが窺はれる、氏の趣味は釣魚で時折圍碁を嗜むといふが家庭には夫人との間に一粒種の男兒あり目下第六小學校に在學中と承はる。

千頭 亨氏

板垣伯の自由民権以來、六十年の歴史を有する土陽新聞の主筆として光つてをる、香美郡野市村の出身で別に學歴の見るべきものなく、若い時代には麥程真田の講師などをしてゐたが、後ち政友會の機關新聞に入社し、爾來政治經濟の記者として名を成し、土陽新聞社に轉するや、社長橋田早苗氏の認むるところと爲り宇田滄溟氏の後を襲ふて主筆に引きあげられたのである。

氏は元來創造の天才がある、だから其の創造力が發明發見と云ふ方面にも應用されて前人未發の膽寫紙や紙洋服などを發明したこともある、斯くの如き天才肌の人物であるから其の論說の如きも斷じて學者の糟粕を嘗めず帆船式新機軸を出す、其處に大記者としての價値がある、人と爲り至純、友情に厚い、著書に「等明學萬有本末論」、「經濟自治論」があり前者は博士が讀んでも難解だと言はれる、後者は中々好評で其の論旨は政友會本部の幹部が共鳴してをるさうな。

岡 兎之吉氏

氏は明治二十二年を以て安藝郡安藝町に生れ、明治四十三年市立商業學校卒業後その翌年土佐電氣

中島 壽馬氏

會社に奉職の身となつて大正八年電燈課長となり次で用度課長の椅子を與へられ大いにその才華を發揮してをる、資性頗る勤直で前四國自動車會社の監査役に擧げられてゐたが、現在では職掌の側ら富國火災保險株式會社代理店主任の仕事に携はつて勤勉な活動をつづけてをる、氏の趣味は釣魚が唯一の娛樂であることはその太公望をキメて釣を垂るゝ風景を見通すことが出来ない。

中島壽馬氏号を三村と云ふ、長岡郡三里村の人、夙に早稻田大學の文科を出で文章の天才を時の土陽新聞主筆宇田滄溟氏に知られ、滄溟氏の知己に感じて土陽新聞の記者となつたのが土佐の操觚界に足跡を印する第一歩であつたと記憶する、宇田氏が仙臺の知事森正隆氏に招かれて東北新聞を掌するや、氏は隨一の乾兒として馳行し苦樂を共にしたと聞く、後ち更に宇田氏と土陽社に返り咲きをし一壺天に其の鬪筆を揮ふた、他日土陽新聞と高知新聞が親戚關係を結ぶや、氏は本家の高新へ抜かれ地方版の編輯をする傍ら「小社會」を擔當した、高新の小社會が大朝の天聲人語の如く讀まるゝやうに爲つたのは全く氏の筆の力である、氏は非常な讀書家で時々論說も書ひたりする、蓋し土佐の新聞界では第一等の文章家だらふ、大成を祈る。

見元惠喜馬氏

氏は明治二十八年十月二十二日を以つて吾川郡弘岡上ノ村に生る年少志を醫學に立て、東京齒科醫學校に學び同校を卒へるや、間もなく年齒僅かに二十二歳を以て齒科醫師としての免許を獲得するに至つた、その後宮内省御用掛伊藤忠三郎氏の醫院に入り大いに實地の研究を積み其の技の成るに及んで國に歸り、當時吾川郡三ツ瀬村に醫を業とする令兄見元弘尙氏の醫院に齒科部を新設協力しつゝ氏はこれが擔任に當つたが、幾くもなくして再び上京し研鑽を續け大正八年歸國後は市内西紺屋町新世界北で醫業を創め、爾來約十五年の久しき間に亘り患者の信望を博して隆昌を極め、昭和九年六月現在の細工町土橋通りに堂々たる和洋折衷建の新装を施し移轉と共に今日に至つてをる。氏は資性温厚恬淡にして恰も玲瓏玉の如き人物で内外の徳望頗る篤く、現に高知縣齒科醫師會副會長、町總代、衛生納稅組合長等の職に擧げられてをる、趣味は讀書、書畫、釣魚、盆栽、家禽チヤボの飼育に興味を有つてゐる。

金子楠馬氏

氏は吾川郡名野川村の出身にして慶應三年十二月六日を以て生れ、壯年の頃當市に來りて現在の本

丁筋で陶器店を營み爾來四十有餘年に亘る、其の間拮据經營のよろしきを得て遂に自ら今日の地位を占むるに至つて、今や縣の内外に廣く信用を有し縣下の斯業者として比ぶ者なきは夙に人の知る所である、令息丑藏氏も亦氏に劣らざる好漢にして本年三十三歳の血氣盛り、名古屋高等商業學校に學び一時鈴木商店に勤務してゐたが退社後歸省して家に在り、縣立第一高女出身になる信子夫人との間に三人の子女を儲け至つて圓滿に最初老齡となつた嚴父の志を體し日常店舗に在りて縦横に活躍し益々その家名の隆昌を計つてをる、趣味は釣魚位で舍弟甚藏君は東京高等工業學校卒業後現に門司市日本納金株式會社に勤務中であると。

中島成功氏

高知新聞は名實共に四國一である、紙幅において發行紙數において斷然群を抜ひてをる、特に記事の充實せる点においては關西有數の大新聞であり、この大新聞の編輯局長が中島成功氏(号吳竹)である、氏は明治十九年七月六日をもつて長岡郡介良村に生れ、早稻田大學を卒業すると間もなく高知新聞社に入り、社會部記者から社會部長、編輯局長と次第に昇格したのである、至つて圓滿な美質の持主であり、それで生えぬきの高知新聞記者であるから、野中社長をはじめ他の

重役が氏を社寶として大事にしておる、楠瀬如龍氏の主筆時代でも、編輯局内では中島氏の方が遙かに勢力があつた、と云ふのは編輯の技術にかけても天才的であり、同時に他の同人をして心服せしむるだけの包容力を有つてをるからで文字通り高知新聞社の中心人物と爲つてをる、近き將來取締役に擧げらるゝことは寧ろ既定の事實であらふ。

川本輝治氏

明治二十二年長岡郡大篠村の産、縣立農林學校に學んで明治四十年同校卒業後雄圖を抱いて渡米しワシントン州に在ること約二十有餘年にして昭和元年歸國した、その後土佐バス會社が昭和四年に創立せらるゝと同時に同社の運輸課長となり大いに手腕を揮つてゐたが昭和十年土佐電氣會社の運輸課に迎へられ今日に至つてをる、禿頭組の旗頭に擧げらるゝ一人で容貌から動作が何處までも如才ない磊々たる人物で酷暑にもめげず至つて天氣であり頗るの活動家で仕事に於て熱心なことは社員中他にその比肩するものがないといふことだ。

中島覺衛氏

十萬市民が曉の夢破らるゝ汽笛の響、天に沖する黒煙の流れ、見るからに其の豪壯さを偲ばるゝ市

の西端旭の一角に君臨して六百八十の繰絲釜と約七百人の従業員とを擁する、片倉高知製絲所の現所長中島覺衛氏は長野縣諏訪郡川岸村の産、大正十三年東京帝大英法科出身の法學士であり斯界稀に見る學歴の持主で而も典型的の少壯實業家だ。氏は學校卒業後直ちに片倉製絲會社に入り、姫路工場を振り出しに朝鮮咸興工場を経て埼玉縣大宮關東監督部附より高知製絲所長に轉じたのが去る昭和八年十二月で、爾來約三ヶ年間の活動振りは目覺ましく、先づ赴任早々自ら茶葉服を身に纏い全従業員の先頭に立つて勤勞の範を示し、事務室寄宿舎等を改造して明朗感を與へ以て能率の向上を圖り御法川式多條繰絲機並に再繰工場を新設しては高級格製絲の產出を期するなど劃期的改革を斷行し大いに其の實力を示すに至つた、一面修養上にも力を注ぎ私立片倉青年學校や國防婦人會片倉分會等を起し、又縣下に三十有餘の片倉婦人會を組織して、特約實行組合の活動を援け、地方に駐在する技術員に蠶絲會報を必讀せしめ、尙雜誌蠶絲の光を普及すべく最近特約組合の教科書として補助計劃を樹つる等、修養と慰安と能率の向上をモットーとして居る、工場内五百の工女が一絲亂れざる操音、縣下各地に渉れる五百有餘の特約組合八千二百人の組合員の確固不拔なる結束状態さては之れが指導の任にある技術員の一舉一動に至るまで皆之れ總宰中島名所長の明晰なる頭腦と周倒なる觀察力とに依つて成されたる指揮命令の現れであつて、今や一ヶ年の供藪量約三十

萬貫、生絲二十餘万貫を産する盛況にあり、氏の信念より迸る熱辯は偶々會合の席上一流の底力ある大論陣となり大向ふをうならする場合あれど濶達明朗の天賦で後は光風霽月少しも感情を挾まない所が偉い、氏は明治三十二年十二月生れで本年三十八歳前途遼遠で將來必ずや大片倉を呑負ふて立つの人物たることを疑はない、趣味は野球、テニス、寫眞讀書等で家庭には諏訪高等女學校出身の才媛といはれる好子夫人との間に一男一女あり俱に幼なく家に嬉戯してをる。

川崎芳三郎氏

四國銀行の取締役中で斷然異彩を放つてをるのが八百屋町の川崎芳三郎氏である、氏は若い時から苦勞をしてをる、従つて人生の甘酸を嘗め切つてをりそこに机上の奥問や料理屋の交際では出来ない眞の人間學を体得してアツサリ言へば大家の主人公たる普通の型を破つて極めて謙遜な平民的態度が自然に浮かひ出てをるから奥床しい、大概の金持は黄金を鼻にかけて何んもなく高慢なところがあり、何處かに金持臭いところがあつて不愉快な感じを與ふるものだが、氏に限つて毫も左様な臭氣がなく無臭無色でざつくばらんだから其の聲咳に接して寔に氣持がよい、この点が有り觸れの金持と根本的に其の赴きを異にしてをり金で買へない程の好きがある、今一つは氏が生れながらの

詩人であつて單に平仄を並べる世捨人の漢詩人と餘程毛色を異にし雅号仙崖が都合好く其の人柄にはまつてをる其の風景である、既に眞の詩人であるから詩に淫しないと同時に美術に對する嗜好と鑑賞眼を有つてをる、金持の書畫癖は得てして骨董的であるが、氏には左様な俗惡な趣味がないから感心する、斯く高尚な趣味と奥床しき人間味が滲み出る實業家は金、金、金の土佐の實業界には滅多に見當らない、筆者の謂ゆる異彩とは此の点を指すのである、人物が立派だとか、識見が勝れてをると云ふやうな月並的文句を並ぶるのは苦勞性で聰明な氏に對しては寧ろ非禮であらふ。

和田知求氏

士陽新聞社編輯長、社會部長の重職を有つてゐる和田知求氏の名は獨り士陽新聞の讀者層のみならず一般的に知られてゐる、故人となつた山本忠秀氏が能く言つてをつた其の言葉を憶ひ出す「土陽の編輯振りは何處となく品があります、私は土陽の紙面が好きです、何んといふても土陽はようございませよ」これは土陽を褒めると同時に編輯長和田知求氏の腕前を褒めたものとなる、和田氏は根から濃厚篤實の好人物なものだから其の氣品が自然紙面にあらはれてをる譯た、昔から士陽新聞の愛讀者である山本氏に褒めらるゝ和田氏は滿更ら腹も立つまいが、十目の見るところ蓋し一致

せる觀方であらふ、六十年の歴史を有する大新聞の編輯長として敬意を表する。

山脇信平氏

土佐を代表する名産品……「土佐古代塗」の宗家で知られた高知市中島町三丁目古代堂主山脇信平氏は祥谷と號し、洋畫家山脇信徳氏の令弟で明治二十三年一月一日を以て市内八軒町に生れ、大正元年京都美術工藝學校を卒業後歸郷して古代塗の製作に従事するとともに現在高知營林局計畫課に勤めてをる、見るからに藝術家に相應はしき性格の持主である。

氏が此の塗物に興味を持ち初めたのは美術學校卒業後で。土佐特産といつてももと／＼支那に於て高盛蒔繪と稱し支那佛教の齋らしたもので僧侶の間のみに傳はつたが、維新以前になり尾州藩の一國齊と呼ぶ塗の名工によつて土佐の故種田豊水氏その傳授を受け、氏獨特の技術を加味して豊水蒔繪といひ次で祥谷氏の嚴父山脇信三氏これを受け土佐蒔繪と謂ひ古代塗となつて今日に及んだのがその由來である。嚴父が熱心に塗りをやつてゐる状とその形狀と着色に心をひかれ遂にその技法の傳授を受けた氏の美術への燃える熱情は、斯くて其の塗物の改良に注がれ髹法や圖案にも鬼校で習得した知識や技巧を加へ近代人の愛覺を特殊の古雅な味の上に盛ると、もに古代風に模したのが、

何時とはなく古代塗の名が冠せられたのである、其の製法は強い特殊の鏝で模様を盛り上げ蒔繪と同様の手法を製品全部に施したもので塗といふが實際は蒔いたもので古代蒔といふ方が相應はしい呼方である、本器は硯箱、肉池、短冊、煙草盆、机、會席膳、衣裳入、文篋その他あらゆる漆器製品として製造されてゐる、然るに氏は先年木曾御料林と並んで我國の代表的な國有美林の奈半利川上流一万ヘクター、ル三百年を超えた魚梁瀬林からワンサと伐り出される杉皮に特殊の塗装と技巧を施した細工品を創案し實用新案の登録を得て今や郷土色豊かな製品として他府縣に誇り得るに至つたのは産業開發上喜ばしいことで、氏は今後とも藝術的良心を持つて是等の製作に當り郷土が持つ獨特の美術工藝品の聲價發揚に努めんとしてゐる。

里見正矣氏

氏は明治二十六年吉川郡名野川に生れ土地の小學校を卒業して市立商業學校に學び暫く小學校の教員となつて教鞭を執つてゐたが大正六年土佐電氣會社に奉職し會計庶務に勤務し昭和九年には調査課長となり昨年電燈課長に轉じ現在に及んでをる、近時會社に於ては凡ゆる方法を以て需用家に呼びかけてゐるが中でも電燈ニースに照明燈廣告などの宣傳は電燈課の立案になり之が力齶を入れて

をるがその効果は仲々著しきものがあるとの評判が高い、此等は畢竟氏が頭腦の働きの發露である資性濃厚勤直にして宇田社長の御覺へ目出たい。

平田 寛氏

氏は高岡郡上ノ加江町の出身で明治二十六年九月生、大正二年三月高知縣師範學校本科第一部卒業後新莊、久禮、兩小學の訓導を経て大正九年三月須崎尋常小學校訓導となるや大正十一年三月須崎町立圖書館司書を囑託された其當時は一ケ年の經費僅かに百七八十圓乃至二百圓位しかなかつたが氏の熱心なる盡力の結果町は二千七百圓を豫算に計上して年々之を補助する事となつた、圖書館に對する氏の功勞は決して尠少ではない、其より氏は大正十三年四月高岡郡書記となり更に大正十五年六月高知縣屬(學務部教育課勤務)となり小學校教員檢定臨時委員を命ぜられ昭和三年十一月勅令第百八十八號の趣旨により大禮紀念章を授與され昭和七年九月須崎尋常小學校長に轉任 同年十一月須崎町立青年訓練所主事を囑託され多年教育界に盡瘁して其功績尠からざりしが昭和八年九月依願退職したので現在では須崎町で文具店と印刷業を營んでゐる傍ら須崎信用組合長、昭和病院理事等の要職に在る

氏は資性濃厚篤實の裡に而も嚴正硬直の風あり而して事に當るや正實公平一片の私心を藏せざる爲め町民の信用も亦高い加ふるに頭腦が明敏で手腕もあり年亦壯なるに於て須崎町民としては更に氏の今後に囑望する處大なるものがある……趣味としては碁と書畫である。

夫人は吾桑小學校の訓導から須崎實業女學校の助教諭となり女子教育として令名があつたが昭和八年八月退職して家庭の主婦となり夫君を助けてゐる。

細川嘉治次氏

安藝郡奈半利町の出身で明治十四年十月を以て生る、安藝尋常小學校を出て明治三十四年十二月歩兵第四十四聯隊に入營同三十六年伍長となつたが、その翌年日露の國交斷絶となるや從軍出征の途に上り五月二十二日高濱港を出發して戦地に赴き硝煙彈雨の中に力戰苦闘大に努め奏功を顯はし、第三軍司令官及び第十一師團長より感狀並に賞詞を授與され更に同三十九年四月戦役の功により金鷄勳章功六級を賜ひ、大正六年歩兵準尉となり同九年勅令改正によつて少尉となり次で中尉に任せられた、大正十一年には西利亞地方派遣の功によつて勳五等雙光旭日章を賜ふに至つた、その後大尉に任官正七尉に叙せられ大正十四年高知武揚協會に入るや幹事の椅子を占め爾來専心會長を補佐

し、その事業の遂行は素より會長指導のよろしきを得て武揚協會活動資金、入退營兵の歡送、現役兵の慰問、金品の募集發送、出征家族戰病歿軍人の弔慰に或は又國防思想普及のため縣民大會講演映畫會、防空展覽會などを開催して之が宣傳に盡し劇務に携はる傍ら昭和七年には愛國機士佐號獻納の計劃を立て之が達成に努め遂に同八年二月九日獻納を了し、今やその愛國機は北滿の地に勇躍し戦功ありといふが如き、氏の渾身これ努力に外ならぬから全く敬服せざるを得ないのである。氏は現に帝國在郷軍人會高知支部幹事、同潮江町分會長の地位に推され稀に見る聖人と崇められてをる。

門脇餘所雄氏

天職の齒醫者よりも民政黨院外團長として志士らしい羽振りが利けてゐることを想はずに充分である。明治二十一年三月一日香美郡曉霞村に生れ、城商の前生だつた高陽中學校に學び明治四十五年私立日本齒科醫學校出の出身で、歸郷後縣下の主なる病院に奉職し熱心に専門的研究を續け理學的療法の極意を体得したのである。後ち獨立して一時帶屋町裁判所前に開業したが大正十一年現在の本町三丁目で開業することになつた、氏は夙に齡ひ二十歳の頃から政治的功名心に趣味を持つて憲

政會時代より政界に奔馳し、前總理大臣濱口雄幸氏が初の舞臺に當市から逐鹿戰にその覇を競ひ可惜慘敗した當時、氏は之が運動に狂奔して二十票といふ異數の得票を獲得してその名を高め自らの力を勝ち誇つたことである、爾來志士の氣焰を吐き院外團幹事長の地位を経て今や民政黨に重きをなす院外團長としての存在せる風景は、偶々氏の人となりを雄辯に代辯せるものであると謂はざるをえない。

氏は町總代、高知市齒科醫師會長、高知町民友會副會長、香北同郷會副會長等々を勤めたる事あり現に町副會長、江ノ口小學校齒科校醫等になつてをるが、家庭には四男二女あり、花惠夫人は産婆を業として知られ長男の速雄君は尼ヶ崎日本電氣會社に奉職し、二男典雄君は大阪市の大西齒科醫院に勤め長女千代子さんは第二高女の出身で現第六小學校の訓導田村竹助氏に嫁し頗る圓滿であり殊に三男の正憲君は海南中學三年で縣主催の選舉肅正に關する懸賞作文に應募し三等賞を得て泊知事より賞狀を授與された秀才であると

武内小太郎氏

氏は須崎町の人、明治三年一月二十八日生、木材輸出商とし聲名高く大阪取引の製材業をも營んで

ゐるが氏の既往及現在に於ける公職としては

(既往の分) 土佐製氷冷蔵株式會社監査役、須崎信用利用組合長(八ヶ年) 須崎町會議員(三十歳の時から二十六ヶ年間繼續) 土佐木材同業組合支部長等

(現在の分) 日本樽材株式會社取締役、須崎信用利用組合理事、昭和病院理事、淨土宗發生寺總代等

前記の公職に依つて明らかなるが如く氏は須崎町の元老株で正實公平徳望あり押しも押されぬ人物として町民一般の信用厚く隠然重きをなして居る。

壯年時代には俳句、釣、碁、將棋等に趣味を持ちしが今は其樂みもやめて公共の爲めに盡瘁してゐる、長男壽郎氏は明治三十六年十一月生れで本年三十四歳、大正十二年三月(二十二回目)高知市立商業學校卒業、一時日本樽材會社へ勤めてゐたが現在は自家の製材業に従事して居る傍ら消防組長、高知縣須崎製材工業組合専務理事、土佐木材同業組合の議員及評議員等の公職に在る長女守子さんは高知市江ノ口小學校長伊藤盛兄氏に嫁し二女貞子さんは土讚線岩原驛長澤田虎士氏に嫁し三女靜子さんは土佐女學校卒業後香川縣三豊村出身の佐長壽氏に嫁し廣島鐵道局高松出張所に勤務してゐる

藤澤喜久治氏

醫學博士藤澤喜久治氏の經營せる本町乗り出しの藤澤婦人科病院は縣下の婦人界に著聞してをる、氏は明治二十年山形市宮町に生れ郷校に學んで夙に俊才を以て稱せられ教學序を追ふて進み第七高等學校造士館を出で、京都帝國大學醫學部に入り専心研學に勵み大正四年優秀の成績を以て最高の學府を卒へ、更に同大學醫學部婦人科に籍を置き大正七年七月まで専攻をつゞけ其の蘊奥を極めたが、高知病院長野並魯吉氏の識るところとなり同年八月野並氏は氏を招聘して婦人科長に据へたのである、是に於て氏は多年修得せる知識經驗を實地に應用して克く患者の診療に従ひ深く野並氏の信任するところとなつた結果、大正十二年高知病院より京都大學へ内地留學の特別待遇を受け滯京二年半にして再び高知に歸り「藤澤先生」の名を倍々高からしめたが居ること半歳にして更に上京した。

上京の目的が何んであつたかは次の事實が雄辯に物語る、氏は昭和二年東京に於て「氣流と發汗との關係に就ひて、及び氣流の人体機能に及ぼす影響、その他妊娠舞踏病の一例、初生兒癩皮症の一例、日本文獻稀に見る初生兒裂症口畸形兒の一例」等々の堂々たる論文を提出後、高知病院に復職

したが、間もなく醫學博士の稱號を受けたのであつた、そして昭和四年まで同病院の婦人科長を勤め同年十月本町乗出しに獨立開業して今日に至り世間周知の光景を展開してゐる、藤澤婦人科病院の副院長は菅居正健氏で博士の衣鉢を傳ふるに足る人物である、藤澤病院は昭和八年四月香美郡赤岡町に分院を設け本年二月以來岩田鹿藏博士が分院長を命ぜられてゐる。

ことさら産科婦人科と云はないでも乗出しの藤澤病院と云へば管々しく説明の必要はないが聞くところに依れば同病院の開腹患者は年々百四五十名を算し、一ヶ月多きは二十五六名に及ぶと云ふ、嘗て大津市開催の研究婦人科學會に「筋腫に扁平止史痛及び腺性痛の二種類の癰腫を合併したる一例」を發表し、次で昭和八年九月三十日診療せし市内某患者による本邦稀に見る「二十五ヶ年間腹腔内に繫留したる腹腔妊娠の一例」を同九年十一月和歌山市開催の近畿婦人科學會に發表したことがある。

氏の家庭には一男一女があり、令嬢なか子さんの令婿三郎氏は文學士で現に中村中學校に奉職し、令息多賀雄氏は海南中學校を卒業して醫學を修めてゐる。

氏は多藝多趣味で時々各方面の人士を招待して雅宴を催すことを何よりの慰樂としてゐるやうであるが、書畫に造詣あるため文士墨客との交際も廣く、書道の達人香取檢事正を始め判檢事達が打ち

伴れて氏の招宴に列する珍らしい顔揃ひの場面に出喰はしたこともある、氏は和洋の繪畫に本質的の嗜好があり曾て自から畫室を造り古今東西の名品を處狭きまでに陳列したもので随つて大家巨匠の逸品數百点を珍藏してゐる、此の如き好癖の所有者であるためか、あの休軀の偉大なるに似ず舞踏など實に輕妙で大抵の藝者は跳足である、それに謠曲、能狂言が最も得意と來てをるから此の隠し藝あつて氏の風流雅筵は何時でも朗らかで春風駘蕩和氣霽然、歡談笑聲坐に滿るの觀がある、趣味と藝術に魂を安ける藤澤氏の人間味は刀圭界の一大異彩であらねばならぬ。

藤 谷 薰 氏

徳島縣三好郡三繩村の出身明治三十三年十二月生、高知に來たのは大正十年である氏は大正十四年下ノ新地で合資組織を以てニヨン自動車を始め昭和二年頃堺町に移轉し同十年九月迄經營してゐたが都合あり之を他へ讓渡した、市内一圓均一自動車の先驅者は即氏である之の一圓均一は三年程前七十錢均一となつたが氏は本縣自動車界に於ける功勞者として推獎に値ひする

自動車界を退いた氏は昭和十年十一月二十六日から高知市の中心地たる新京橋に巍然として宏壯華麗なる其姿を現はしてゐるカフェー春日會館を經營してゐるが前身赤玉時代から有名なもので松原

ミカト等と共に第一流のカフェーとして隆昌を誇つてゐる女給は美人揃で三十名の多きを數へサービスもよく室内の設備や裝飾も申分がない氏は更に三年程前から帶屋町下一丁目のカフェーミナトを經營してゐるが之亦た有名なカフェーで女給二十名位仲々盛んなものである

氏は格別趣味とてなく職業一式で資性温厚の人、夫人末子さんは高知市水通町の生れで一男二女を
 げ糟糠の妻として夫君を助り家業に勤しんでゐる

濱田耕弑氏

明治十七年一月三日の佳日をもつて安藝郡田野村に生れた、縣立第一中學校を半途退學して岡山の關西中學校に轉じ明治三十五年卒業したが、郡の先輩であり縣會議長を勤めた北川忠淳氏に拾はれて百姓を仕込まれたり駄賃持をやつたりして鍛練されてをうち三十七年十二月第十一師團に入隊するや翌年の十二月看護長を命ぜられ通じて七年間兵役に服し除隊後郷里の田野で農業に従事する傍ら大正元年から同十二年まで郷軍分會長となり村の褒め者となつたが、昭和九年野村ムツソリ一ニに見込まれて自動車部の營業部長に据へられ、多年軍隊や地方で鍛鍊した手腕を縦横に揮つて采配頗る宜しきを得爾來益々ムツソリ一ニの信任を博した、最近新聞種となつてあらはれた野村自

自動車主催の敬老會や或は小學生徒の五台山遊覽會など皆な氏の創意に出で野村組自動車部をして一層その認識を深からしめたものである。

氏の性格は徹底的でやり出したら何所迄もやりぬく主義で其所に意力の旺盛を見ることが出来る、趣味は闘犬、狩獵、角力、乗馬、釣等々で何んでも來いだ、就中土佐犬を番犬に使用する風潮を鼓吹することに中々熱心で嘗て故濱口雄幸氏の全盛時代に番犬として土佐犬吉公を贈り、この犬の御蔭で濱口氏が惡漢襲撃の危害より免れた事實があつた、家庭には小民夫人との間に二女あり、長女遊龜さんは秀才利二氏を養子に迎へ頗る圓滿で利二氏は現に野村組鐵道部に勤務中であり、三女貞美さんは縣立第二高女の三年に在學中、濱田氏は性淡泊で人に接して城府を設けぬので野村組の内
 外で評判がよろしい。

寺田善吉氏

寺田善吉氏は香美郡美良布村菲生野の産である城東中學校を経て早稻田大學文科に學び同校を卒業して秋田縣中學校教諭を振出しに各縣の中學校に奉職し教鞭を執つてゐたが、大正十五年四月歸郷招ぜられて財團法人城東商業學校に入り現に同校の教頭としての勢力を有ち、英語、修身の二科目

を受け持ち學徒間の信望頗る厚く好教育家と稱せられ凡く崇敬されてをる、資性温厚篤實の士で本年五十四歳、蓋しまだく教壇に立つて活動の出来る人物とある。

氏の趣味としては野球をもつて唯一とし頗る熱心であり燃ゆるやうな熱烈さを有してゐると承る、故に近來同校野球部の活躍が著しき發達を期するに至つた所以亦なきに非ずだ。

門矢卯三郎氏

高岡郡高岡町の出身で明治十五年四月七日を以て生る、明治四十年明治大學商科を卒へ三菱銀行に入つて深川支店に勤務中途に病に罹り辭職して歸縣したが、明治四十三年頃四國銀行高岡支店長に任命せられその後中村、佐川の各支店長を経て昭和五年江ノ口支店長となり今日に至つてをる、明年が定年に達するそうなが、資性温健で如才のない人物である。

氏は又健康第一主義で一年一日の如く冷水摩擦を如何なる酷寒といへども缺がしたことのない熱心家で趣味として俳諧、漢詩等を嗜み、俳號を歌樓と稱し祖春派に屬してをる、又土佐傳説會の理事となつて第一線に立つて盛んに史蹟の探究に活動してをるから同會の發達する所以亦此處にある。

家庭には夫人との間に一男四女あり、長令嬢は中村手藝女學校出身で大阪岸和田の明神福市氏に嫁

ぎ、二女綾子さんは佐川高女を卒業して甲斐しく家事を手傳つてをる、三女節子さんは縣立第一高等女學校に在學で、長男の修吉君は城東中學卒業後目下大倉高等商業學校に在學中である。

信清誠一氏

故信清權馬氏は私立城東商業學校の創始者で、育英事業に携はる傍ら市會議員などを長らく勤めて巨然たる存在を高知市に示してゐた人物であつた、茲に描かんとする信清誠一氏は乃ち權馬氏の賢息で明治三十四年を以て市内中新町に生れた、そして海南中學校に學んだが途中で退學し東京に上つて、繪畫に志を抱き、東京洋畫研究所に學び洋畫研鑽を積むこと多年、歸國後嚴父經營の城東商業學校に教鞭を執ることゝなつて現に同校専務理事として活躍する傍ら圖畫、商業、美術の科目を擔任してをる、然るに氏はその間南美社、土佐美術協會等を組織し繪畫研究に盡す所多く斯界に缺ぐべからざる人物として重きをなしてゐたが、現在では教職の傍ら土佐美術家聯盟の幹事となり同會發展のため大いに努む縣下中堅作家としてその名を廣く知られてゐる、

氏は性來病弱なれど至つて無慾恬淡の美質を有し頗る犠牲感の強い人物だといはれ、多趣味で數ある中にも近時將棋、映畫を以て最も楽しみ殊に文學、法理など各種の涉獵に耽ける書讀家として推

賞さる。

楠瀬大太郎氏

海外で活躍せんとする農業者の福音……南米の寶庫ブラジルへ移民渡航せんとする希望者の便宜を計つてゐる、楠瀬大太郎氏は外務省公認になる海外興業株式會社の縣下唯一の業務代理人として凡く知られてをる、曾ては市會議員にも出で國勢調査員、高知街方面委員、第三小學校獎勵會役員等々になり、前住地中島町に在つては長らく町の組合長などして重きをなしてゐたが、近時何を感じてか商賣をも廢し漸次各方面より遠ざかつて昨年末居を潮江新田東の丸に移し、専ら移民事業を終生の天職なりとして忠實たらんとする傾向が見へる、氏は明治十二年八月十五日を以て安藝郡伊尾木村に生れ、安藝高等小學卒業後明治三十二年頃出高して當時本町に質店を營む叔父の家を手傳つてゐた然るにその後明治三十五六年頃神戸竹村殖民商會出張所の主任となつて同地に赴任し銳意事に當るうち同商會を退いて、神戸榮町で旅館「土佐館」を約二ヶ年余り經營して廢業後一時歸郷し再び竹村殖民商會に入り輸送部副主任となつて勤務するうち、明治四十三年より大正三年に至る間南米に渡航すること五回に及んで地理、風俗、産業などを究め得る所があつたが感ずるがままに遂

に同商會を退いて土佐に歸り約三ヶ年の籠城生活を續けて揚句、中島町に煙草雜貨商を開店したのであつた、氏が市會議員等に推されたのは此の時代である、そして大正七年から海外興業會社の高知縣業務代理人となつて献身的之が努力を拂ひ今日まで取扱つた移民數は約三千人を算すといふことである、氏は現に高知消防協會蒸氣部長、高知信用組合總代同評定員に擧げられ且又本門佛立教會高知支部長として日蓮宗に歸依し約三百戸の信徒を有して毎月四回に分つて修行に熱心だが、家庭には鹿夫人との間に子寶なく夫人の實母と三名で閑靜な生涯を過してゐる。

門脇卓朗氏

明治二十九年九月二十四日を以て香美郡夜須に生れた、氏は幼少の頃兩親を喪ひ夜學力行で今日の地位を贏ち得た人物で、大正二年四月銀行に入り爾來累進して徳島支店長代理を振り出しに、廣島縣大竹支店長、松山支店長等を経て昭和十年六月同行北街支店長となり現在に至つてゐる、曾ては四銀に入行の前日本郵船會社に勤務し外國航路吉林丸の事務員となつて同船に乗り込み世界一周すること約一ヶ年の苦艱を積んだ人だけあつて体量二十三貫の持主である、資性恬淡、如才のない磊落人で頗ぶるの多趣味家であり俳諧、繪畫、登山、謠曲等々を嗜み俳號を自己の名にとつて卓朗と

稱し、又繪畫は廣島に在勤中その余暇を得て狩野永暉畫伯の手ほどきを受け専ら狩野派を極めたが
爾來獨歩の境地を開拓してその描く所輕妙にして堪能だとの評判がある。

松山秀美氏

伊藤公が八方美人と言はれ、桂公が十六方美人と言はれたと同じ意味即ち善意の謳歌の意味において
白洋松山秀美氏は近代土佐人中の八方美人主義者であり十六方美人主義者である、これは詮する
ところ氏が個性の自からなる流露であつて平生その信奉するところの「己れの如く汝の隣りを愛せ
よ」との博愛主義が滲み出る性格の光だと解釋する。

氏は明治十二年三月三十日の生誕だから本年取つて五十八歳、夙に早稻田大學を卒業して東北學院
の教授を勤めてゐた、此の名譽ある地位を辭して土佐へ歸つたのは何故か、これは本人に訊ひて見
ぬから分らぬけれど、筆者の想像では野村茂久馬氏の御聲がかりではないかと考へる、何んでも歐
洲大戰當時野村氏は安藝愛山氏を主筆とする日刊土佐日日新聞の計劃をしたが、社の一切を任かす
人が無いと云ふところから親戚の松山氏に相談をかけ氏がこれを承諾した結果だらうと考へられる
恰度その頃の事だ、高等批評眼で有名な横山黄木翁が評して松山は漢學、國學、英學の素養がある

から何處へ押し出して月俸百二十圓のネウチが附いてをる』と言ふたことを筆者は記憶してをる
現在高知商工會議所理事長の月俸は確か百二十圓だと聞くが、してみると黄木翁の評價嘘でない。
今年の春、野村茂久馬氏が高知市長になるとの噂が高かつた時、野村氏が市長になつたら松山氏が
高級助役になるだらうとの風來語が飛んだ、それ程野村氏のためには必要缺ぐべからざる松山氏で
ある、若し野村が内閣總理大臣に爲つたら松山氏の書記官長は動かぬところだ、人間は椅子さへ
與へたら大概の仕事は出来る、余程以前の話だが十六方美人の桂侯が同志會をつくる時、筆者は野
中楠吉氏や奴田原香村氏など、桂侯を訪ふた、其の時に出て來たのが秘書の江木翼氏であつた、筆
者は思う、松山氏は秘書として江木以上の人物だと、これはお世辭でも何んでも無い、事實ソウ思
うのである。

氏が土佐史談會の會長となつたのはよろしい、南學會の副會長となつたのもよろしい、何んとなれ
ばソレは適材適所であるからだ、市會議員になつてをる風景は文士久米正雄が鎌倉の町會審員にな
つてをるやうなもので俗物どもに詩の豫算を教へるが爲に結構だ、詩人松山白洋が商工會議所の理
事長になつた時、天下の文壇は悉く驚ひた、だが其處に行くところとして可ならざる無き才の閃き
を看取することが出来る、筆者は氏に「才人白洋」の尊稱をたてまつるのである。

片岡信滋氏

政治家や實業家には學歴の必要がない、政界も實業界も要するに力の舞台である、片岡信滋氏は土地の小學校を卒ばかりでソレ以上の學校へは行つてゐない、そして六尺禪をかく頃から田舎の草相撲を取つた、体格が丈夫なものだから力士として次第に名を成し女にも惚れられた、氏の出発点はこの通り力の舞台である、後ち此の力を政界に應用せんと百八十度の轉回をしたところに氏の聰明さが閃めく、間もなく高岡郡の郡會議長に推され高陵の少壯政客中に黒岩村の片岡信滋あることを知らした、氏の政治生活はこゝから開けるのである。

氏の家は黒岩村の素封家に指を折られてゐた、然るに氏が政界で名を成すと反比例に財産はグンぐん減つた、縣會議員に出る頃は運動費に不自由をする程であつた、併し氏の純潔と高朗と、男性的態度とは高陵北部の人士がやんさと稱讃するところで優勢な片岡ファンが出来たのである、政治家の武器は民衆の支持である、氏は有力なる武器を有つことが出来た、この武器が物を言ふて氏の勢力は高知の中央で伸びはじめた、縣會副議長となり、政友會高知支部の幹事長と爲つた、氏の前途には光明がぶら下つた。

地位の進むに従ふて氏は次第に貧乏となつた、その貧乏たるや文字通り清貧である、だが水を飲み

脰曲げて枕とすと孔子が嘆稱した顔回程の貧乏ではなく酒の嚙は何時でも台所に林立してゐた、感心なのは貧乏に屈托せず不思議に讀書することである、政治經濟の本は書齋の隅に堆をなしてをる、債鬼門を窺ふも平然として本を讀んでをる、然かも其の讀み方が頗る研究的で讀んだ本が悉く肉となり血となるから次第に立派な政論家となる、氏の進歩は實に讀書の賜物である。

氏は板垣伯の崇拜者である、叔中伯が岐阜の金華下で演説した圓心論と求心論は千古の卓見だと案を叩いて敬服するところなど流石に斯の人なる哉と首肯せしめる、辯力もあり識見もあるから將來屹度大成するだらふ、相撲取りのヒーキをするやうに政治家を養ふてソレを楽しむと云ふやうな金持も一人や二人はあつてよからふ、東京の檜舞台へ出したいものだ。

塚本利男氏

舊姓は藤田氏、吾川郡下八川村の出身、下八川の藤田氏は徳川時代の中期から代々の國手で氏はその九代目である、唐様で賣家と書く三代目は商家の榮枯盛衰を物語る皮肉な諷刺だが、氏の先代乃ち藤田家八代目の禎造氏は山内西御屋敷の御殿醫を勤め、當時の城下では水野國手と共に御殿醫中の双璧と稱せられたものだ、塚本利男氏は此の如き名醫の家庭に育ち巖父の指導のまゝに笈を負ふて東京に上り、當時の代表的醫學專門學校として斷然權威を放つてゐた東京濟生學舎に學び、明治

三十八年土佐に歸つて高岡郡日一村に開業し、大正三年京都四條大宮に轉住して三年間門戸を張り大正五年再び歸縣し伊野町において開業し以て現在に至つておる

氏は子福長者としても名高く、長男の嫁御寮は京都市山科の醫師黒澤氏の息女正代女史(二五)で夙に大阪高等女子醫專を卒業し京都赤十字病院の眼科に勤めた才媛だと聞く、そして氏の二女二三子女史(二七)は之れ亦た大阪高等女子醫專の出で内科を研究し昨年三月卒業、現在東京帝大島園内科で腕を磨ひてをる。

氏は温厚篤實の紳士、六年前から自家用の自動車購入して往診に従事してをる、趣味は書畫骨董、刀劍、本年五十九歳と承はる

南部 博氏

高知市役所の課長級で一番非難の無い人物を求めるならば何人も先づ指を收入役稅務課長の南部博氏に屈するに相違ない、多くの課長連の中には随分世間から非難されたり攻撃されたりする人がある、その中において南部氏は富岳の姿である、八面玲瓏である、一点の塵が無い毀譽輕きこと塵の如しと云ふが氏には未だ曾て片言隻語の毀言なく、耳にするところのものは悉く譽言のみである何故に氏は斯くも市民の受けが好いのであるか、勿論南部家が高知市の名門であると云ふことも一

つの理由を成してをるだらふし、在郷海軍機關大尉の肩書も物を言ふだらふが、要するに氏が清廉潔白で、公平で、堅實で徹頭徹尾軌道を踏みはずさない人物であると見込まれてをり、加ふるに事務の才幹も併行する人格と力量の發露が最大原因だらうと想う、高知市は寔に良い收入役を有つたものだ。

氏は往年市會議員に當選し副議長を勤めたこともある、そして高知鐵道株式會社の監査役に擧げられたり、又た帝國在郷軍人會高知支部高知街分會長に就任したこともあるが、現在は市收入役を勤める傍ら公設高知消防組頭、高知武揚協會常設委員をやつてゐる、正七位の位階も伊達でない、明治十八年一月八日生れだから未だ〳〵活動の未來を幾分を残されてをる。

東條 順吉氏

今年の春であつた、市長候補者が二人出來て高知市會が野村派と川淵派に分かれ愈よ決選投票を行はねば埒の明かぬ形勢に押し詰まり傍聽席が滿員の光景を呈した時、その風雲徂徠の眞ツ只中において滿目の焦点となつたのが傍聽席の一角に席を占めて頻りに活躍し、野村派の策動本部たる觀を呈した東條順吉氏の颯爽たる姿であつた、筆者は此の時眼の前にまざ〳〵と「力の人」東條氏の叛骨稜々たる姿を打ち眺めて「この人は仕事が出来るワイ」と痛感したことであつた。

東條氏には前市會議員の肩書がある、前とか元とか云ふ肩書の光る人と、光らぬ人とあるが、東條氏の如きはその前と云ふ肩書の最も光る一人である、何んとなれば赤裸々にした氏は市會議員以上の力を有し、苟も市會議席を占めんと欲せばいつなんどきでも占めることが出来る人物として大衆から評價づけられてをるがらである、氏の如き實力者は議員になつてよく、ならないでもよい、野に居つて議員以上の働きをしてをるからであるこの意味において筆者は氏の前に敬意を表することを忘れない。

氏は明治二十年一月三十日をもつて高知市菜園場町に呱呱の聲をあげた、そして市立商業學校を卒業するや直に實業界に入つて縦横に活動し將來大に爲すあるの人たる足跡を植へ附けた、氏には在郷軍人陸軍歩兵少尉の肩書もあるが、この肩書も決して伊達でない、流石に軍隊仕込み程あつて、實業界を濶歩するにも突進主義であり猪突猛進主義である、株式會社東條廻漕店こそ氏が社長として全魂を打ち込む事業で、海運の土佐に最も必要な使命を有する此の仕事に乗り出した其の着眼点は満点だ、天空海濶の男性的事業に突進する海國土佐の快男子として輝やかしき將來が斷然約束せられてをる事を祝福する好漢自愛せよ。

鎌田正治氏

近頃高知市の金子橋を通つて甚だ面白く感ずるのは浄土眞宗の稱名寺と對立して鎌田正治氏の邸門に日蓮宗の表札が嚴めしく掛けられてある風景である、鎌田氏と日蓮宗とは其の對照が如何にも相應はしい、日蓮の生涯は闘ひの連鎖である、雨と降り霰と降る迫害や彈壓に對して勇敢に闘つた汗血の歴史であると云ひ得る、意志も強く感情にも強い日蓮は遮二無二自信に向つて邁進する以外に幕府もなければ民衆も無かつた、そして自己の信念でもつて一切を克服しやうとかゝつた、そこに日蓮の本領がある、斯く觀察し來つて鎌田正治氏は土佐政界の日蓮だと思ふが如何。

鎌田正治氏は明治十一年二月八日鳥取縣に生れた、生れつき頭腦が飛びぬけて良かつたから刻苦して辯護士試験に登第し大連で開業してゐるうちに不圖した縁から土佐へ來ることになり最初は西弘小路に事務所を設けた、その當時は個人として岡山の犬養毅氏を無上に尊崇し酒席などで浮つかり「犬養が」と呼び切りにしやうものなら襟を正して其の無禮を咎めたものだ、當時の木堂は非政友會の巨頭で彼れが後年政友會入りをしやうなどは人何も夢想だにせざつたところである、然るに政界の動きは他日彼れをして政友會の總裁たらしめた、その時に鎌田氏は政友會の闘將として高知の議政壇上で得意の智勇辯力を揮ふてゐた、多年あこがれの木堂が我黨自裁と爲つたのだから數ある犬養ファンの中でも一番嬉しさを慰じたのは恐らく鎌田氏が其の最たるものであつた筈だ。

鎌田氏はやがて縣會議長に當選してユーモア味たつぷりの議長振りで名議長の名を取り、亦たその

實力材幹に全黨員が歸服した結果、政友會支部長にもなつた、他縣人たる氏が縣會議長となり支部長となると云ふことは蓋し異數である、そこに氏の偉らさがある。

氏は昨年以來少しく健康を害して家庭内に引籠り勝である、だがそれが氏の心眼を他に轉向せしむる動機となつて日蓮の研究に凝ることの出来るやう仕向けられたことは氏の進歩の爲に寧ろ祝すべきではなからふか、地方の政治家としては既に珍木の頂きに達した鎌田氏である、法華經の信者となつて崇嚴なる精神修養の世界に入つたことは何物にも換ゆべからざる佛の慈悲だと思ふ、我等は氏の心機一轉に至大の敬意を捧げる

山崎太郎氏

氏は明治二十六年をもつて長岡郡大津村に生れ、同四十四年城東中學校を卒業し大正十三年居村大津村の村長に推され全村民の信望を背負ふて在職五六年に達し其の間の功績頗る顯著なるものがあった、退職後昭和五年に至り北村健彦、岡田薫氏等が灣内急行汽船株式會社を起すに及び、氏は岡田氏と昵懇の關係で同社に入り高知巡航と對抗し其の間幾多の迫害を受け苦しき立場に置かれたが隱忍自重してゐるうち昭和六年同社の妥協が成立し、共同經營の和やかさを見るやうになり、昨年一月合併が實現せられて浦戸灣汽船株式會社が生るゝや氏は同時に重役となり令名を博しつゝ、現

在に至つてをる、資性溫厚にして純眞、仕事も出来る、趣味は競馬で同好者仲間から競馬狂と言はれてゐる。

畠中卓爾氏

安藝郡の大御所と言はるゝ氏は文久三年七月二十三日をもつて安藝郡土居村に生れてをる、少壯板垣伯の自由民權説に共鳴し青年の志士として憲政扶植のために健闘して名聲を轟かし、早く縣會議員に選ばれて議政壇上の花形と謳はれ、多額納稅者中の異彩たる觀を呈し牢固たる勢力を張つたものだ、安藝郡の大地主が郡農會長になり、縣農會長に推されたのに毫も不思議は無いが、歐洲大戰當時の好況時代に土佐羽二重株式會社を起して其の社長に就任した風景もよろしい、氏の盛名は長期間續いたから

土佐興農合名會社代表社員、安藝郡畜産組合長、高知縣畜産聯合會々長、高知地方森林會議員、三浦商工株式會社監査役、日本勸業銀行高知地方顧問

など實業界に大なる足跡を印し、政界と實業界とに輝やかしき存在を示した。

氏は溫厚篤實、清廉潔白の紳士で夙に政友會内に重きを爲した、そして我等が氏に最も敬服すると

ころのものは自己の利害、自己の榮辱を度外視して一身を黨の犠牲として悔ひざる其の献身的精禁の人一倍旺盛なることである。この犠牲的精神の發露するまゝに氏は晩年に至つて涙を揮ひつゝ黨の爲に縣會議員ともなり、政友會支部長ともなつた、我等は當時能く氏の心事を知つてをる、従つて老後の氏に對する同情が最も熾烈である、氏が支部長を辭した氣持は天地神明の知ろし召すところである、想ふに人生の價値は棺を掩ふて定まる、これは古今の達人の一致する意見である、我等は畠中氏が政友會支部の神に祭らるゝの日が左程遠くないことを信するものである。

井元辰吉氏

氏の出身地は宇佐町で十歳の時須崎町に轉住、十六歳の時から十三年間高知市で商店に奉公し其間二十五歳の時妻帯、奉公中は主家のために刻苦精勵克く忠實に働いた爲め多大の信用を受けたが漸く獨立自活の念を抱くに至つたので二十九歳の時奉公を止め須崎町に歸り米穀商を始め最近は更に製材業をもやつてゐるが奮闘努力の結果は艱難汝を玉にすの譬へに漏れず遂に克く今日の成功を贏ち得たのである

既往及現在に於ける氏の關係事業と公職

須崎町會議員たること數回、高岡郡木炭同業組合長六ヶ年、同組合會計三期（在任中）、營業稅調査委員一期、現在では須崎信用組合理事、昭和病院理事、須崎樽材株式會社監査役、須崎起業株式會社監査役、須崎商工會副會長、須崎融和會副會長等

以上の經歷によつても氏が須崎町の元老株で如何に重きを成してゐるか窺はれる、本年六十八歳趣味としては釣と謡曲とのこと

氏は五男四女の子寶で長男柳作氏は家業を繼ぎ次男隆氏は高知市立商業卒業後同町門田家の養子嗣となり、三男勇氏は城東中學卒業後高知市吉本製綿所に勤務、四男清喜氏は成績優秀にて城東中學卒業後不幸病死、五男敬氏は城商在學中、長女友龜さんは高坂高女卒業後同町吉野氏に嫁し二女時惠さんは京都二商の教諭中平一美の夫人となり四女豊龜さんは高坂高女卒業後中村女學校にて修業今は自家に在つて家事を手傳つてゐるが、生花、茶の免狀を受けて居る。

池田頼信氏

今春二月の總選舉時に池田頼信氏は第一區から衆議院議員の候補者に立つて名譽の落選をした、落選の原因は立ち遅れをしたのと、自分が幹事長の職を有つてをつたから統制上遠慮した爲であつた

それでも香美郡のみで五千の票數を取つた、香美郡における池田氏の人望は非常なもので婦人達までが氏の姿を見かけたならば遠方から御仕儀をする、氏の無帽主義は答禮が餘りに忙がしいので帽子をかぶつてゐては脱ぐ違がないからと言ふにあるらしい。

氏は明治廿一年八月二十六日をもつて香美郡徳王子村の名門に生れ、海南中學校を卒業後徳王子の村長に就任し大に自治の成績を挙げた閱歴の持主であり、爾來香美郡の南部から東部へかけて無数のファンが出来たので或は郡の水産會々長や、畜産組合長などに推され、そして何時の間にかやたら縣會議員に擔ぎ上げられたのである、氏が一たび支部の幹事長となるや郡市の青年は簞食壺漿して之を迎へ、就中院外團の如きは油然たる活氣生色を呈して其の傘下に馳せ參じ氏の用をなすことを競ふて翼ふたものだ、畠中卓爾氏の支部長、池田氏の幹事長は名コンビで形影相伴ふたものである。青年が何故池田幹事長を歓迎したか、それには二つの理由がある、一つは人の面倒を能く見ること他の一つは金錢に淡泊なことである、池田氏はその幹事長時代には自分の物を質に入れてまで黨のために盡した、それだけ氏は幹事長をやらされたばかりに大に貧乏をした、併し政治家に貧乏は付きもので良い御手本が板垣伯だ、それは兎に角として來るべき大問題は次期の總選舉に中谷貞頼氏が再起する場合、池田氏が如何なる態度を執るか、中谷氏を殺すも生かすも池田氏の胸三寸であ

る。

山田嘉治氏

山田氏は明治三十二年五月二十七日須崎町に生れ本年三十八歳、大阪私立藥學校卒業後藥劑師となり須崎町で開業してゐるが昭和六年須崎消防組長に推され爾來熱心誠意其改善發達を圖り功績尠からず依つて一般町民から多大の信頼を拂はれてゐる

氏は資性温良にして正實、徳望もあれば頭腦もあるのでよく部下を統制し部下よりは又た深く敬慕されて居る現在須崎信用組合幹事、昭和病院理事等の公職に在るが年未だ若く新進の人物として一般から其前途を囑望されてゐる

下元鹿之助氏

東京の檜舞台を二度踏んでをるから田舎役者の列に加へるのは勿體ない、圓滿のうちに機鋒があり八方美人主義のその裏には是々非々の嚴肅主義がある、今年の夏のことだ、谷流水氏など瑞山神社の建築委員が七八名打ち伴れ、氏が常務取締役の職を有つてゐる土佐セメント會社へ寄附の相談に

行つた、すると氏は例の如き圓満居士の姿で應接室にあらはれ來訪者の前に丁寧な頭を下げた、そして谷流水氏が先づ口を割つて、貴會社は山内神社へ二百圓の寄附を出してをるから瑞山神社へは百六十圓の寄附を願ひたいと言ふや、下元氏は白扇をパチつかせながら、山内神社への寄附額は貴下から御聞き申さずとも會社の手前で能く分つてゐます、山内神社へ二百圓出さうが三百圓出さうがソレは會社の自由意志で他の干渉は受けませぬ、私方は營利會社ですから儲かつてをる時には或は過分の金も出させうが、此の頃は赤字で金に不自由をいたしてをる際でありますから會社としては御申込の額を出し兼ねます、併し會社が出せないにしても重役と云ふものがあり、それが個人で寄附をする慣例もありますから其の方法で何んとか色の附かぬこともありすまいと、情理兼到餘裕綽々の言葉と態度に一同この句が続かざつた、そして會社の門を出るや互に顔を見合はして、下元と云ふ人は確かに偉いのと感服したと云ふことだ。

もう一つそれも今年の夏の話だ、あの電力統一問題で安藝水電が中々澁つた時、挺身して縣と會社との仲に飛び込んで妥協案を提げ汗ダクの活動をしたのが實に下元氏であつた、他日山脇電氣局長が人に語つて、若し下元氏の努力が無かつたら屹度破裂したであらふと、下元氏は調停の天才でもある、蓋し誠意なくんば到底成功の彼岸へ漕ぎつけることの出来ない調停役である、氏が縣下第一

の調停役者たる評判を取るところに其の眞骨頭が窺ひ得らるゝ。
氏は政治家として二回まで代議士となり、實業家としてセメントの常務以外に製糸業組合や、蠶植業組合や、蠶糸同業組合やの組合長を勤め、尙ほ片倉製糸の四國相談役、司牡丹の取締役、高知瓦斯、高知製氷の監査役をも勤めてをるところ當に千手觀音の如くである、蓋し宇田系實業家の右大臣格か。

藤尾重喜氏

氏は明治二十八年十二月十六日安藝郡室戸岬町三津に生れ尋常高等小學校を卒業して安藝區裁判所に奉職、大正五年善通寺騎兵第十一聯隊に入營、滿期歸郷後大正八年須崎町西町で木炭商を經營約三ヶ年間に一万六千圓の資本金を無くして失敗したが大正十四年五月に七百三十圓の小資本を借入れ夫婦共力朝は五時に起き、夜は星を戴くと云ふ有様で終始一貫奮闘努力の結果は木材、木炭及廻漕業の間屋として大阪市西區南堀江一番町三六に出張所を置き遂に克く今日の大成功を贏ち得藤尾商店の名をしで愈々高からしめた

木炭は高知營林局管内四國一圓の官行木炭年額約二十萬俵、民間木炭年額約十二萬俵の大量を取扱

ひ販賣先は京阪神、和歌山、堺、岸和田、播州地方である、木材は杉檜丸太、杉松椽板、松杉檜の仕成材を大阪及堺の市場に送り、廻漕は五隻の帆船で主として自家用品を積み又た他店の商品をも運送してゐる。

氏は前には自治に關係し議員もやり在郷軍人分會長三期をもやつたが現在では土佐木材同業組合第三支部長、土佐木炭同業組合聯合會代表議員、高知縣木炭移出商聯盟副會長、土佐高岡郡木炭同業組合代議員等の職名を有し斯業界の爲めに盡瘁する事久しく功勞も亦た決した尠くない。

氏の家は昔から士族で嚴格なる父君の訓陶を受けてゐるので弱者を助け強者を挫くと云ふ強き性格を持ち事業經營に付ては『分甘共苦』の四文字をモットーとしてゐるが常に言行一致何事も自分の腹一つで決めて行くと云ふ鞏固なる意志と強い信念の持主である趣味としては何もない只晝夜兼行營業一天張りと云ふ硬漢である、蓋し須崎町に於ける人物中の一異彩であるふ。

池 誠 亨 氏

四國一の建築美を以て稱せらるゝ佐川の妙像寺には四國の佛教界に傑出せる池誠亨師が住職として控へてをるので洵に配合の妙を得てをると思ふ、妙像寺の池師か、池師の妙像寺か、そこには見る

眼の定評が出来てをるから今更ら讃辭の必要もあるまい。

師は明治二十七年七月二十八日高岡郡高岡町に生れ、小學卒業後十二歳の時、潮江妙國寺前住職日船上人の徒弟として佛門に入り上人の感化を受けたが縣立第二中學校三年生の時同校の廢校に依り東京立正大學に學び、中等部より同大學を卒へ、大正八年に一年志願兵として朝倉聯隊に入り、兵役終了後の大正十年五月をもつて佐川町妙像寺の住職たる命をうけた、當時の妙像寺は荒廢その極に達し本堂には雨が漏り庫裡は破れて深尾家時代の名利も荊棘雜草に埋まる状態であつたが、池師の住職たるに及んで文字通り不眠不休、復興に全魂を打ち込みたる爲め、絶へて久しく檀家と云ふものゝ殆んど無かりし此の寺に高知市の富家西川崎家の一家一門を初め入交太藏氏、大阪の濱口駒次郎氏、東京の田中伯爵家、深尾男爵家等に相繼いで有力なる後援者が現はれ、池師の熱と力と人格と學識の結晶するところ、大正十二年早くも書院を改築し、同十五年山門石段を、昭和四年客殿と附屬建造物を改築し、昭和九年本堂の改築に着手するまで十年の間、黙々として不斷の努力を續けたのであつた、蓋し建築は其の人の性格の象徴でもある、池師の流儀は人の眼に着かない奥の方を先つ改築して、人の眼に映じ易い本堂は後廻しにすると云ふのであつて其處に師の奥床かしき人格の光りがある。

妙像寺は日蓮上人自作の鬼子母神を祀つてあるので縣の内外から春秋二回の大祭日には數万の參詣者が押し寄せることに於て余りにも有名であるが、昭和三年の秋には態々村雲尼公の御駐錫あり、翌四年には御安産の守護鬼子母神の名が長くも九重の空に達し、皇太后宮より池住職へ御守り獻納方の御下命があつた、此の如き好因縁から現に本堂上段の間には明治、大正天皇の御衣、種々の御下賜品を奉安する特別の間が作られ、明治天皇の御持佛であつた開運毘沙門天の尊像は客殿の床に清淨な仮祭壇を設けて奉安してあり、そして大奥に奉仕する各女官より此の寺に奉納せる夥しき經机と水葦のあとなど、復興せる妙像寺は皇室との御關係愈よ深く御下賜品は特別の間に溢れ、池師の名は鬼子母神の名と共に斷然天下的となつたのである、併し池師の本統の仕事はこれからであらふ、筆者はこの意味に於て師の今後に恬目する。

大栗次郎左衛門氏

高岡郡佐川町司牡丹會社の銘醸司牡丹を知る者は會社の技師大栗次郎左衛門氏の名聲を必ず知つてをる筈だ、氏は徳島縣名西郡神領村の産で明治十六年三月十七日を以て生れ、郷里の小學校を卒へ次で蜂須賀公に仕へ儒名高き岡本斯文氏に就いて漢學を修め後家庭の人となり、祖父次郎兵衛氏に

よつて氏が蒲柳の質に鑑み後顧の憂に創めて呉れた酒造業を繼いで、銘酒大聖を醸造し専心之が研究とその販路擴張に努め、徳島縣下は勿論四國を壓倒し名聲を高からしめたことは世間周知の如くであるが、好景氣に乗じ大正十二年頃卒先して大聖酒造株式會社を創立し同社の社長として圓滿振りを發揮してゐたが、好事魔多しで重役の放漫な經營に基因し遂に解散となり、負債十萬圓余の痛手を喰ひ漸く之が整理の完了したる頃、撫養稅務署長であり曾ては本縣須崎稅務署長たりし福永定猪氏の周旋勸告を受け大正十四年九月一日佐川醸造株式會社の技師に招ぜられて入社し爾來今日に及んでをる、氏は資性溫和にして人に接するに毫も邊幅を飾らず職務に熱心で只管斯業の研鑽に努むるを以て唯一の樂としてゐるか、今や幾多の難險を経て司牡丹が曩に各種展覽會及品評會等に於て十數回の名譽優等賞を得今又全國酒類品評會にて全庫揃つて優等十點を獲得し驚異的成績を挙げその前途に燦然たる光明を迎へた壯觀は一つに氏の隠れたる偉大の功績を思はずに餘りがある、家庭には茂夫人との間に一男一女あり、長男尙生氏は法政大學卒業後東京松坂屋眼鏡部に奉職し、長女照子さんは岡山縣立第一高等女學校研究科に通學中であると

佐川 薫氏

高知の薬剤師界は多士濟々で、頭八丁、口八丁、手八丁の人物が鮮少でない、と云ふのも近代の薬剤師は所謂高等の學問を修めて知識の領域が廣汎なからである。

高知市會議員、市參事會員、土佐藥業同志會長、高知縣開局薬剤師會議員、高知藥業組合長、大優高知支部理事、縣藥種賣業同業組合評議員、日本度量衡協會參事等々々十指を屈して尙且つ余りある程の肩書を有し、斷然異彩を放つてをる薬剤師、修法學士の佐川薫氏は徳島縣三好郡三名村の産明治二十二年七月五日の生誕だから本年四十八歳の男盛りである。

三名の佐川家は代々の醫者で、三百余年間十余代連綿として醫業に終始する仁術の舊家である、氏は徳島縣脇町中學より關西大學に學んで修法學士の稱號を得、後ち大阪道修藥學校に進み藥學を専攻して薬剤師となり、卒業と同時に内務省衛生試験所に勤務、臨時製藥調査所員となり、所長平山藥學博士の推挽により、製藥の權威武田製藥所に入り、製藥化學を研究して關西藥學院の教授に聘せられ、傍ら大阪藥學研究會を創設して自らその講師を擔當した、この輝やかしき閱歷そのものが藤劑士としての氏の實力、氏の眞價を如實に物語つてをると思う。

氏が本縣入りをしたのは大正五年で、關西藥業の巨商、香美郡岸本町中澤藥局に主任薬剤師として勤務し、同九年高知市八幡通り三丁目、帝大藥局を開設し、調劑、藥品の製造販賣を行ふ傍ら、

本縣の地方病たる脚氣病の特効藥「グラミニン」を創製發賣して特許局第一六七九一號を以て登録し、爾來その聲價隆々として、日本内地は勿論、遠く台灣、滿鮮地方にまで販路を開拓し、脚氣藥王として業界注視の的となつてをる。

そして、その間四たび高知藥業組合長に推され、前記肩書以外、藥業往來四國支局長、徳島日日新聞顧問、メートル法實行委員、徳島縣人會々長、衛生組合長、市政委員、町總代等を勤め千手觀音以上の仕事をしてをる。

氏は容貌魁偉、且つ頗る進取の氣象に富んでをる、それに關西大學で法律、政治、經濟の學を修めた素養も手傳つて、政黨や政治に深き興味と關心を有し、曾ては本縣の新興勢力たりし普選聯盟の總務として旺んに活動し、目的の達成と共に今度は永井柳太郎氏を總裁とする立憲青年黨を組織し其の中心人物に推し立てられたのである、此等の華やかな風景から眺めて氏は政治家としても優に中央政界に伸びる素質と力とを稟有してをるやうに思はれる、政友會の財政通大口喜六氏は職業が藥屋である、佐川氏を政界に活躍せしめたなら民政黨の大口となる日が到來するのだがなあと思はれて仕方がない。

氏の趣味は政治と文藝で鳶風と號して紅潮社を主宰し海南俳壇の明星として名を成してをる、家庭

には一女がある、令嬢は帝國女子藥學士、令弟はドクトル、オブ、デンタルサージエリー、大阪帝大及び齒科醫專の若き教授として鳴らしてをる。

織田眞壽氏（舊名正敏氏）

高知市民にして織田信福氏の名を知らない者はない、氏は高知では最もふるい齒科の専門であり、長らく町田氏の濟生病院にあつて腕を揮ふその一方では、持つて生れた世話好きから或は市政に干與し、或は縣政にたづさはりなどして、熱血の迸しるがまゝに時々千兩役者の頼母しさを見せたことであつた、新進齒科醫、高知縣醫師會長として今を時めく織田眞壽氏はこの快男子織田信福氏の養嗣子である。

氏は明治二十四年香美郡佐岡村に生れ、明治四十四年海南中學校卒業後、日本齒科業專門學校に學び、大正四年首尾克く醫を卒へて榊形織田家の養嗣子となり、養父の下にあつて手腕を揮ふてゐたが、養父の昇天後、昭和元年、榊形の屋敷内に宏壯なる洋館の齒科醫院を建築し、その院長として今日に至つてをる。流石に信福翁の見込んだ人物程あり、縣醫師會長として克く團體を統轄し、會員の氣受けも好く、尙ほ高知縣衛生會評議員に擧げられ其の方面でも令名がある。

資性温順にして高朗、クリスチャンの令夫人、クリスチャンの養母六花夫人の感化もあつてのことか品性が年と俱に陶冶されて甚だ奥床しくある、頗る理財の頭腦に富み、織田家萬代の基礎を築きつゝある、趣味は釣と園藝、家庭は至つて圓滿だと承はる。

田村昇氏

「肛門病の先生」田村昇氏の名は最近世人の耳朵を打つてをる、氏は明治二十二年三月一日を以て安藝郡室戸岬町に生れ、大正二年東京日本醫學校を卒業後、三井慈善病院皮膚科及び東京順天堂病院皮膚科に於て専心研究を重ね、大正三年の夏歸縣し、高知市朝倉町で皮膚、花柳病専門の田村病院を初めて開業したが、自己の天職に忠實なる氏は小成に安んずる能はず、その間更に上京して、東京神田阿久津病院長故阿久津博士に就て専門的に皮膚病を研究し、爾來四、五年間に亘り診療に従事中、肛門病治療の必要を痛切に感ずるやうになつて來たので、氏の進取的氣象は多々益々辯ずる才華を此の方面に向け、台灣肛門病院長田村稻城氏を師として肛門病の手解きを爲し、更にその後東京肛門病院長谷泉氏を前後七、八回自己の病院に迎へ、且つ研究し且つ經驗して、大に自得するところあり、これならばと云ふ自信を生ずるに至つて、從來の皮膚病、花柳病専門を改め、斷然肛

門専門として大正十一年『高知肛門病院』を經營する進化發展の新時代を劃するや、又た醫學博士谷岩太氏を招聘して倍々研鑽に勉め、尙ほ關西の大家加藤甚七博士に就いて其の蘊奥を究はめ以つて現在に至つてをると云ふのが、氏の院長たる高知肛門病院の名譽ある變遷史であるが、從來の朝倉町では狹隘を感じることに成り本年八月一日より、追手筋松永病院跡を購入して此處に移轉し、同時に設備を完全にし愈々肛門病の専門で病患者に接する朗らかな發展振りである。趣味は毎朝冷水摩擦を行ふこと、散歩と、書畫である、家庭には二人の令息と二人の令嬢があるが、長女の幸子さんは縣立第二高女卒業後家庭に在つて活花、茶道を勉強しつゝ家事を手傳ひ且つ裁縫にも従事してゐる、二女嘉代子さんは土佐高女に通學中、長男和敬君は土佐中の五年、次男嘉宏君は未だ學齡期に達しない。仁術に恵まれ、家庭に恵まれ、趣味に恵まれてゐる田村氏は、資性實直、溫厚の好紳士として一般から尊敬されてをる。

川島保次郎氏

人間の眞價はその人の逆境の場合において初めて認められる、氏が今春高知商工會議所の理事長と

して村上正豊氏のために土佐商船に對し好意的の助言をしたことが端なく奇禍を買う事態と爲つた時、氏の平生を知るものは悉く氏の不幸に同情し、就中氏と學窓を同じふした市商校友會の人達は心からなる至誠の遊りを示したことであつた、この美はしき事實が人間川島保次郎氏の眞價を如實に物語つて更に遺憾無しである。

氏は明治十五年二月廿一日をもつて高知市本丁筋なる大川島家に生れた、慶應大學卒業後實業界に活動し縣の内外に颯爽たる行動を取り大に其の將來を囑望せられた、氏が如何に前途ある人物であるかは貴族院勅選議員千頭清臣氏がその愛娘を氏に嫁せしめた一事で分らふ、斯くて氏は關西興業土地株式會社取締役、高知瓦斯株式會社監査役、合資會社日新館代表社員、土佐織物株式會社取締役、寶船冷蔵株式會社取締役、土佐倉庫株式會社取締役等幾多の事業に關係し少壯實業家の白眉として大持てに持てたのであつた、そして氏が一たび高知商工會議所の理事長となるや會議所には常に明朗の空氣が充満してゐたと言はれる。

氏は竹を割つたやうな性質で大家の出に似合はず酸いも甘いも知り切つてをる、そこに亦た氏の間周がある、だから八方無敵萬人から好かれるのである、氏は年齒九十四五歳、前途尙ほ春秋に富んでをるし、然かも其の背景が満點だから大に活動の餘地が残されてをる譯だ、人間は或る場合に

は雌伏する必要がある、何んとなれば雌伏はすなはち雄飛の前提だから、我等は多大の希望をもつて今後の潑刺たる治躍を待望する。

西本直太郎氏

明治の初期以來政界に活躍した土佐人は大概故人と爲つてをる、山本忠秀氏の如き最近物故した其の一人である、西本直太郎氏は安政の生れだから中々ふるい、安政時代の誕生で今尙ほ長壽を保つてゐる名士は氏と横山又吉氏位のものではなからふか、此の點だけでも氏は土佐の國寶たるに値する。

氏は故藤崎朋之氏と莫逆の友であり二人とも高知辯護士界の草分けと言ひ得る、誠に温厚な人柄で如何なる場合にも決して無理を言はない、筆者は氏が時々令夫人と共に袴着で墓参に行く姿を眺めて如何に其の敬虔の人であるかをいみじく感ずることがある、氏は名を賣らざる孝子であり君子人である、一見長者の風のあるところ今の世には全く珍らしい紳士型だと頭が下がる心地がする。

氏は安政五年一月十日をもつて潮江に生れた、少壯板垣伯の自由民権説に心酔して藤崎氏など志士の行動を取り屢々政論壇上に立つたこともある、土佐の政友會が中央派、郡部派に分裂するや氏

は藤崎氏や森下高茂氏など、共に中央派の巨頭として片岡健吉氏の支持者となつた、爾來この中央派系統で一貫し縣會議員に推され岡本方俊氏等と共に大に健闘したものだ、併し元來が君子肌の人物だから反對黨からも悪まれずに独自の地歩を保つて來た、茲に人間西本氏の好きがある、後ち或は高知辯護士會々長を長らく勤めたり、或は土佐商工聯合會の顧問に推舉せられ、或は高知新聞社の取締役となり、或は楠病院の管理者となり、或は全市民より擁せられて高知市長となつたなど勿論その明識實力の致すところではあるが一つには人格の流露せる人徳の反映と見るべきであらふ。藤崎氏亡く、岡本氏亡く、森下氏亡き後において氏はまがひもなき土佐の大先輩であり、日常の行住座臥亦た大先輩に相應はしくある、我等は縣民と共に氏の健康長壽を祈つてやまない。

森岡彦三郎氏

須崎に於ける事業家として森岡彦三郎氏の名は餘りにも有名である高岡郡多ノ郷村の出身で明治十年生、氏の少年時代に嚴父は酒造業を營んでゐたが氏は早く縣外に出で陸軍の用達をして居つた事もある大正七年須崎に居を構へ十數万坪の開墾事業や又た埋立事業もやつた、先年須崎製材株式會社が創立せらると共に同社の専務となり其後日本樽材株式會社と改稱せらるゝや引繼き専務となつ

で今日に及んでゐる、之の外須崎起業株式會社の創立については委員長となり常務をやつてゐた、更に南海製氷と須崎製氷が合併して土佐製氷となり今日に及んでゐるが氏は最初から其常務として手腕を揮ひ須崎、川口、甲浦に分工場を置いて努力健闘同社の隆昌發展を圖つてゐる尙之の外に粘土採掘事業をもやつて居る要するに氏は單て須崎町のみ事業家ではない廣く土佐に於ける有數の事業家であつて森岡彦三郎の名は更に將來に向つて一層の光輝を放ちつゝある

依光牛之助氏

土佐名産中鯉節と共に最も古くより喧傳され愛好せられる蒲鉾は質において風味において壓倒的に他縣に比して優秀さを誇つてゐる、一度び土佐蒲鉾の風味に接するや決して他の蒲鉾を口にする能はざる程の優れた風味を有してをり従つて販路の如きも全國大都市を席捲し土佐蒲鉾の眞價を發揮してゐる素より海の幸に富む土佐の自然の恩恵もあらうが古くより傳統的な土佐人の努力の結晶に外ならないのは勿論である、蒲鉾製造は明かな記録がないが高知市ハリマヤ通り二丁目に現在堂々たる店舗を有し縣内においては蒲鉾店中の白眉とし蒲鉾製造の元祖である依光蒲鉾店は安政年間すでにこの業に従事した家傳口碑があるを見ても随分古き歴史を有して居るは事實である

同店は安政年間以來當主牛之助氏に至る父子三代ともに蒲鉾製造に苦心改良を加へて努力し遂に蒲鉾は依光の名をほしいままにするに至つたのでありその努力に酬ゆるに今日同店の名聲は當然といふべきである

けれど同店の蒲鉾は努力よりなる特殊の加工技術を有して味、質相俟つて斷然他の追従を許さないものであり且つ同店の店是といふべき質をよく値を安くの販賣方法に今や家庭に料理店にまた土産品に贈答用に依光の蒲鉾の名は謳歌されてゐる、殊に現在土佐名産品の一つとなつた鯛の花や折箱販賣等は同店の創始になるものである、而して先きには長き光榮に浴しまた各博覽會、水産共進會等には常に一等賞金牌等を受領してその榮譽は彌が上にも高く木履屋町の本店に加ふるに昭和二年にはハリマヤ町交叉點に支店を設けて年々ともその業は盛んになり東京、大阪、神戸等全國都市よりの注文殺到の有様である、また當主牛之助氏は温厚篤實なる人格の士にて擧げられて蒲鉾同業組合長、市水産會評議員、魚市場幹事の名譽職にありて家業ととも本縣水産界に盡力しつゝある

近 森 茂 樹 氏

吾川郡弘岡中ノ村の出身で明治十七年二月生だから本年五十三歳である氏は尋常小學四年から一足

飛びに豫科をぬきにして縣立農學校の本科に入學した秀才で三年間下駄履で荒倉峠を越へ通學したと云ふ苦學力行の歴史を持つてゐるが優秀の成績を以て明治三十八年三月同校を卒業するや縣吏員となり縣下を巡回して養蠶業の取締をやつた、明治三十九年一年志願兵として入營、歩兵少尉となり同四十年末退營直ちに縣技手として奉職すると同時に農商務省の肥料検査官養成講習所に入所、翌年四月歸縣、縣技手肥料検査官となり大正四年縣屬兼務、續いて勸業課主席、大正九年高岡郡主席郡書記、大正十一年縣會計課長、大正十三年香美郡長、大正十五年郡制廢止と共に地方事務官となり同時に幡多支廳長、昭和二年縣社寺兵事課長に轉任、昭和七年退官、正六位勳六等の肩書を有して居る

以上は履歴の概要であるが在任中に於て氏が力を注ぎたる仕事の重なるものを擧ぐれば

勸業方面では産業是の確立をなすと共に縣茶業の復興、農産物の販賣斡旋所創設、各種生産小組の設置獎勵をなし會計課長時代には滯納處分の勵行、會計諸規定の改廢、歴代課長の手を附け得ざりし据置貸の整理、日本海員救済會支部の刷新等に切れ味を示し大正十二年九月の大震災に對しては縣のチャーターせる天祐丸に首班として乗込み食料品其他を満載して海路上京萬難を冒して縣出身罹災民の救助に晝夜兼行寢食を忘れ又知事代理として天機を奉伺し山内侯爵、岩崎兩男爵、縣選

出貴衆兩院議員を慰問するなど克く其任務を完ふして歸縣せるが縣民より多大の感謝を受け當時の小幡知事は感激のあまり氏を得月樓に招じて大に歡待したとの事だ

郡長時代には小學教員に對し大に軍隊思想を鼓吹し女教員を引率して聯隊視察をやつたと云ふ狀態社寺兵事課長としては兵事々務の刷新、兵事會の創立、敬神思想の鼓吹等仲々やつたものだが昭和二年頃には本縣に於ける海軍志願者の數が佐世保管内十二縣中のビリであつたので氏は之を海國土佐の耻辱なりとし幾多の努力と苦心を拂ひたる結果三百四五十人位のもが三年後には一躍一千名の多數に達し其増加率が全國第一となつたので昭和七年海軍大臣から軍事功勞者として表彰された同年春上海事件の起つた時には知事代理として動員事務の監督指導もやつてゐた

山内神社の創設に就ては氏は専務理事として其功勞多く現在では武揚協會副會長、山内神社奉議會副會長、高知購賣組合理事、高知縣鐵工組合聯合會専務理事等に擧げられ社會公共の爲めに盡瘁してゐる

鹽田德馬氏

高知市内で大衆的娛樂場としての常設活動寫真館は鹽田氏の經營せる千歲館であるふと思はるる其

飛びに豫科をぬきにして縣立農學校の本科に入學した秀才で三年間下駄履で荒倉峠を越へ通學したと云ふ苦學力行の歴史を持つてゐるが優秀の成績を以て明治三十八年三月同校を卒業するや縣吏員となり縣下を巡回して養蠶業の取締をやつた、明治三十九年一年志願兵として入營、歩兵少尉となり同四十年末退營直ちに縣技手として奉職すると同時に農商務省の肥料検査官養成講習所に入所、翌年四月歸縣、縣技手肥料検査官となり大正四年縣屬兼務、續いて勸業課主席、大正九年高岡郡主席郡書記、大正十一年縣會計課長、大正十三年香美郡長、大正十五年郡制廢止と共に地方事務官となり同時に幡多支廳長、昭和二年縣社寺兵事課長に轉任、昭和七年退官、正六位勳六等の肩書を有して居る

以上は履歴の大要であるが在任中に於て氏が力を注ぎたる仕事の重なるものを擧ぐれば

勸業方面では産業是の確立をなすと共に縣茶業の復興、農産物の販賣斡旋所創設、各種生産小組合の設置獎勵をなし會計課長時代には滯納處分の勵行、會計諸規定の改廢、歴代課長の手を附け得ざりし据置貸の整理、日本海員救済會支部の刷新等に切れ味を示し大正十二年九月の大震災に對しては縣のチャーターせる天祐丸に首班として乗込み食料品其他を満載して海路上京萬難を冒して縣出身罹災民の救助に晝夜兼行寢食を忘れ又知事代理として天機を奉伺し山内侯爵、岩崎兩男爵、縣選

出貴衆兩院議員を慰問するなど克く其任務を完ふして歸縣せるが縣民より多大の感謝を受け當時の小幡知事は感激のあまり氏を得月樓に招じて大に歡待したとの事だ

郡長時代には小學教員に對し大に軍隊思想を鼓吹し女教員を引率して聯隊視察をやつたと云ふ狀態社寺兵事課長としては兵事々務の刷新、兵事會の創立、敬神思想の鼓吹等仲々やつたものだが昭和二年頃には本縣に於ける海軍志願者の數が佐世保管内十二縣中のピリであつたので氏は之を海國土佐の耻辱なりとし幾多の努力と苦心を拂ひたる結果三百四五十人位のもが三年後には一躍一千名の多數に達し其増加率が全國第一となつたので昭和七年海軍大臣から軍事功勞者として表彰された同年春上海事件の起つた時には知事代理として動員事務の監督指導もやつてゐた

山内神社の創設に就ては氏は専務理事として其功勞多く現在では武揚協會副會長、山内神社奉讚會副會長、高知購賣組合理事、高知縣鐵工組合聯合會専務理事等に擧げられ社會公共の爲めに盡瘁してゐる

鹽田德馬氏

高知市内で大衆的娛樂場としての常設活動寫眞館は鹽田氏の經營せる千歲館であるふと思はるる其

觀覽料の安價なるに比し映畫は頗る優秀なるもので仲々評判がよい、西高知市の中央に好地位を占めてゐる關係もあるが何時も満員と云ふ隆昌振りを見せてゐるのはまことにお目出度い。

氏が之の常設館を初めて經營したのは今から約二十年の昔であるが活動寫眞に経験のない全くの素人としては意外に經營がうまくつたので年と共に發展隆昌を見るに至り千歳館の名が益々高まると共に氏の手提金庫には毎晩銀貨や銅貨や札が一ぱいと云つた調子で大に儲かつたものだ、其當時活動成金の評判さへあつた程である、最初の素人時代から經營上手であつた氏は多年の経験と共に活動寫眞館經營の骨を覺へ仲々慣れ切つてゐるので不況時代の今日でも觀客満員と云ふ好成绩を収めて居る、蓋し氏は市内活動寫眞界の元老株と云づても敢て過言ではあるまい

内田菊惠女史

高知市内に數ある紙文房具店の中で此の頃斷然光り出したのが播磨屋町の内田文房具店である、店員の中には元小學校々長の閱歴を有する錚々たる人物がをり、その關係から縣下の小學教育界にはこの内田商店を支持する者が次第に多くなつてをる、そして元の小學校長をはじめ殆んど二十名近くの店員を使つて躍進に躍進をつゞけてをる經營者が未亡人の内田菊惠女史だから世人の同情が一

層女史の商店に集中する、良人の久壽龜氏は數年前に病死せられ、もな間く一粒選りの令嬢も亦た逝かれ散々の不幸が重なつたが併し氣丈の女史は諦めるところを諦らめ、追善供養と商賣とを全然區別して、然かも商店の繁榮がやがて亡き良人と亡き令嬢を慰むる手向草だと考へて一心不亂に業務一切を切り廻はし、女實業家の名聲をほしまゝにして今や磐石の基礎を築いたのである、蓋し仁尾丑女史と比肩する女傑であらふ。

高原伊三郎氏

土佐がら一度代議士に出してみたい人物が二人ある、一人は高原伊三郎氏、他の一人は和田和氏だ、兩氏とも代議士の候補に立つたことはあるが不幸にして名譽の落選をした、土佐の人物に心を留むる時我等はこの二氏に對し大なる關心を有つ!

高原氏は明治四年九月七日の生れ、安藝郡奈半利町がその故郷である、夙に法制大學を出で辯護士の資格を獲得し高知に歸り帶屋町(今の水野辯護士の居るところ)において開業し忽ち第一流の辯護士と云ふ評判を取つて花形中の花形と爲り間も無く安藝郡から推されて縣會議員に當選しトシ、拍子で縣會議長となつた、氏が衆議院議員の候補に立つた時代は候補者のカバンの重さで當落が決

すると云はれた程極度に選挙界が腐敗してゐた、清廉潔白で通つた高原氏に馬に喰はすやうな圓札のあらふ筈がない、縣會の名議長も金のためにとり／＼當選が出来なかつた、名譽の落選とは氏の爲に作られた文字ではないかと其の當時我等は思ふたことであつた。

だが併し氏の人格の光りと實力の輝きは世間が黙つておく筈がない、だから西本直太郎氏の後を襲ふて高知辯護士會長となり、本年春辯護士會が司法大臣の直轄に屬し從來よりも其の地位がずつと向上して新たに會長の選挙となつても法曹界の信任は依然として渝はらず氏が會長に就任したのである、議論の多く意見の多い辯護士會の會長は減多なもので勤まる筈がない、高原氏の眞價はこの一事で彰明較著だと思はせる。

氏は曩に民政黨高知支部長に推されたことがあるが、筆者が氏の評論に筆を執る昭和十一年十月には再び富田支部長の後を襲ふて支部長の椅子をあてがはるゝ形勢と爲つてゐた、これも亦た氏の人格と實力の發露に他ならぬ、そして氏は此の外、多年高知慈善協會々頭として非常な功績を樹てゝをる、かく觀じ來ることによつて代議士級以上の人物だと云ふことが何人にも能く理解せらるゝであらふ、氏は近年多少健康を害してをるらしいが、それでも平氣で酒も飲めば得意の一藝廻しもやり、好きな謡曲もやる、そして時々法廷へも立つて颯爽たる場面を見せてくれる、我等は是におい

てか一代の名士てふ尊稱を奉るのである。

上田紫郎氏

香美郡の夜須村には今から三十年程前に二大富豪の對立があつた、片や上田源助氏、片や川村益太郎氏、その川村氏は縣會議員として時の政界に餘りに活動し過ぎ、或は亦た銅山に深入りし過ぎたりして蹉跌したが、上田源助氏は最も堅實にその富を把握して莫大の資産を長子の上田紫郎氏に譲つた。

上田紫郎氏は縣立第二中學の出身で早稻田大學の卒業生である、資性最も溫良、容貌からして福々しい、多額納税者たる事と、畫の天才たる点は西山閣二氏の好敵手とも言ひ得やう、氏は二人の姉サンがある、長は橋田早苗氏の夫人、次は水野吉太郎氏の夫人、斯う云ふ姻戚關係において氏は實業界の巨人と、政界の巨人とを義兄に有つてをる。

この兩義兄から見た氏は、牝鶏のハラ／＼監視する鷲の雛かも知れない、青年の客氣が迸發するに任かせ猫額大の土佐の小天地で老ゆるのは甚だしく倦怠だと云ふところから、或は滿洲或は南洋方面に驥足をのべたりする、虎穴に入つて虎兒を獲ることを痛快とする氏の壯圖を、老人の兩義兄は

青年の冒険だと云つて之れを止めるやうな氣配がある、こゝが老人と青年との考へ方の岐るゝところでも亦た如何ともすべからざる自然の相違である。

氏は冒険性に富んでゐるかも知れぬ、日本の實業家で最も冒険性に富んでゐたのは岩崎彌太郎と雨宮敬二郎であつた、氏は油繪でしばしばこの二人者の似顔を描ひたであちふ、其の時二人の冒険性は氏に乗り移つたかも知れない、併し鶴見祐輔の英雄待望論を讀むと安逸を欲する青年は駄目で若いうちに思ひ切つたことをやれと書いてある、我が上田紫郎氏は畫筆を捨て、第二の岩崎彌太郎となつて見る氣がありはしないか、氏の將來には多分の興味がある。

竹内英省氏

高知には「竹内英省」といふ同姓同名があつて時々間違へらるゝので、新聞記者の竹内英省氏は、その間違を防ぐため「元」といふ名を選んで、爾來「竹内元」と名乗つてゐる。大阪毎日新聞高知號外の題字の下に「竹内元」の姓名が麗々しく印刷せられてあるとほり、氏は大阪毎日新聞高知支局長の重職を托せられてゐる、然かも高知支局創設以來の支局長として斷然光つてゐる地方新聞の記者から一躍して大新聞の支局長に拔擢せらるゝのは全國的に稀觀である、氏が高知新聞の記者か

ら大毎の支局長を贏ち得たのは確かに異數だ、それだけ何處かに見どころがあり、大毎の本社が氏を高く買つた所以だと肯かれる。大毎と對立する大阪朝日は、野村組がその販賣を引き受けてゐるに拘はらず、通信部長は必ず本社から派遣して來る、前の長谷川氏の如き、現在の勝田氏の如き乃ちそれである、此の点において竹内氏の大毎支局長は異數であると俱に縣民と親しみが濃厚だ、我等は決して大毎の高知版と、大朝のそれを比較するものではないが、兩方の高知版を並べて置ひた時に、讀者の眼と手は何れを先にするか、こゝに竹内氏への親しみがあらはれる。

竹内氏は長岡郡國府村の出身だ、紀貫之の遺跡を環境として育てられた氏は、青年時代から立派な田園詩人で同時に新聞記者がその素願であつた、そしてその素願に酬ひられて高知新聞の記者に採用せられ通信部長、編輯長として早くも鋭腕の譽れが傳へられたのであつた、當時の高知新聞社は大毎の販賣をもやつてゐたが社の幹部は氏に其の通信を擔當せしめたこれが抑も氏と大毎との機縁の結ばれであつて、後ち大毎が高知新聞社の手を離れて、本町二丁目の北側に直營の販賣店を設くるや、大毎本社は破格をもつて氏を支局長の位地に迎へんとした。然るに多年高知新聞で養はれて來た氏は利害觀と情誼觀との錯綜から自己の進退を決するがために相當苦慮したものゝ遂に拒絶したので大毎は高知社長野中楠吉氏に頼んで入社方を交渉した結果野中氏は「何も心配することはな

い進んで大毎へ行きたまへ、僕の社長給よりは、すつと君の待遇がよいでないか」と氏は是において漸く決心して現職を引き受けたのである、我等は氏の榮達を心から祝福する。氏の榮達は忽にして美望の的となつた、土佐人は由來、大神根性で他人の榮達を嫉む悪い癖があるけれども忠實と實力で自然に與へられた支局長の椅子だ、喬々たる珍木のいただき豈に金丸の懼なきを得んやなどゝの心配こそ、それこそ無用の心配といふものだ。

下村次男氏

小學校の教科書へ入りたい立派な立志美譚の主、下村次男氏に筆を染める機縁に恵まれたのは筆者の最も欣幸とするところである、氏は明治廿四年十一月廿七日を以て長岡郡高須村に生れ、高須尋常小學校、土佐郡高等小學校を卒業後、進んで中學校に入りたいたと考へたが、家貧にして意の如くならぬ、十五歳になつて將來何に成るかの目標が立たなかつたところ、祖母から「お前は醫者になるがよい」と勵まされた其の一言に天來のインスピレーションを感じ、早速村の國手先生のところへ書生に棲み込み、此の先生に就ひて基礎醫學、解剖、生理、化學、物理などを注入されたが少年時代の事として充分に咀嚼し消化することが困難で眞當の苦學をつづけた、その當時氏の家庭は祖

父母と一人の令弟と都合四人暮しで貧しい上に暗い生活であつたに相違ないが、氏は往時を回顧して語るらく

私にはこの當時の勉強が左程苦しいとは思はなかつた、夜は「カンテラ」を燈して遅くまで勉強した、「カンテラ」を携げて隣の店屋へ石油を買ひに行つたことを今も記憶してゐる、こうした淋しい生活が寧ろ僕の勉學心を強めた。

若い時の苦勞は買ふてせよ、果然艱難汝を玉にして、二十一歳にして美事試験に合格し二十三歳の時初めて醫師の資格が出来、歡喜と希望に燃へて追手筋の楠病院に勤め、一時は須崎でも開業したが現在の場所即ち高知市城見通りで開業して以來十一年の歳月を閲し「下村先生」の名は附近に知れ渡つてをる、研究心に強く知識慾の旺盛な氏は、目下土佐風土病、特にワイル氏病と土佐熱に就て仕事の余暇に研究を進めてをるさうだが發表の曉には定めし學界に貢献することが著大であらふ氏の趣味は書道で之は天性らしい、尋常一學年の時、縣教育會の展覽會に出品して第一等の褒状を授けられたこともある、大正七年には東京の近藤雪竹先生に師事し、昭和三年頃から名古屋の佐分移山先生に入門し斯くて書道の堂に入つた、そして日本書道作振會、名古屋泰東書道院展、東京市泰東書道展、名古屋一樂會關西書道展等に入選の名譽を荷ふてをるところを見ると中々の名筆だら

ふと思う、氏は曾て太鼓の稽古に熱中したこともあると聞くが現在は中止してをる、人格と云ひ、その趣味と云ひ醫者には持つて來いだ「人中の龍」とは蓋し氏の謂ひであらふ。

川崎幾三郎氏

既に故人となりし先代の川崎幾三郎氏と云へば宇田友四郎、松村寛藏氏等と共に當時土佐財界の巨頭として其名は餘りにも有名である二代目即ち現在の幾三郎氏は先代の甥に當る川崎庄五郎氏の長男で乗出し川崎家の養嗣子となり大富豪の主人公として納まつてゐる。全國富豪番附表なるものによると同家は本縣富豪中の筆頭に位し全資産五百万圓と稱せられてゐるが流石に名門だけありて先代幾三郎氏の如き財界の大御所なりしにも似て謙讓の美德を有し弱者と云はず青年と云はず何人に對しても平民的態度を以て應接した、同氏のエライ處は即ちここにある、現代の幾三郎氏はまだ弱年と云つてよかろうが温厚の好人物で富豪臭い處がなく其如才なき態度應接は寧ろ平民的紳士として敬愛を受くる以所だとは氏を知るもの、齊しく云ふ所であるこの好主人公を有する川崎家は其基礎愈々磐石の如く大富豪川崎として何時迄も搖ぎはあるまい。

徳平幸吉氏

氏は先代元太郎氏の長男に生れ嚴父死後襲名して二代目の元太郎氏となつてゐる、明治三十八年生れで本年三十二歳、大正十年市立商業卒業後神戸關西學院商科に學び病氣の爲め退學するや歸高、嚴父を助けて今日に及んでゐるが資性温厚巨万の富を擁して先代よりの製紙業に従事し青年實業家として多望の前途を有してゐる、能樂、寫眞、音樂、登山、旅行等に趣味を持ち夫人光子さんは土佐高女の出身で生花をよくし二人の仲に二女を擧げ長女綾子さんは市第四小學一年在學中

義兄秀實氏は吾川郡森山村の出身大正五年第一中學卒業後徳平家の養子となり幸吉氏の實姉初衛さんを妻として製紙業に従事してゐるが、頭腦明敏、穩健、着實而も其の鞏固なる意志と努力的精神は實業家として前途の大成を語るものである、秀實氏は釣に趣味を持ち夫人初衛さんは土佐高女の卒業、琴、生花に堪能で二男三女を擧げ長男秀雄氏は市第四小學五年在學、二男實氏はまだ學齡に達せず長女幸子さんは縣立第一高女二年在學、二女昭子さんは市第四小學三年、三女悦子さんは同校一年在學中である、

幸吉氏の實妹敏子さんは縣立第一高女の卒業で琴、生花、手藝に熟達し數年前養子廣馬氏を迎へ東

京在住、夫君は一中卒業、早稲田大學商科の出身で和光堂製藥會社に奉職中である

徳平家が如何にして巨万の富を作り克く今日の大成功を贏ち得たるかに就ては先代元太郎氏の苦心談と其人物觀を叙する必要があると思ふので左に其の大略を附記する事とする

先代元太郎氏は明治八年八月十五日高岡郡高石村に生れ父安馬氏と共に高知市に轉住、水通町の某紙屋に職工として働いてゐたが其内に同店の漉槽を借り漸く自家製造の端を得、其後北奉公人町川岸端で工場を開いたが之が抑も成功の基で當時現在の箇所久松某が小さい工場を持つてゐたのを買ひ受け之を擴張して今日に至つたものである其間氏の苦心と努力は尋常一様でなく全く血と汗の奮闘史と云つてもよい、艱難は遂に汝を玉にす即ち氏多年の刻苦精勵は遂に克く今日の大成功を贏ち得、立志傳中の人物として紙業界に盡したる功績は決して尠少ではない更に氏は温情主義の徹底せる實行者で二百の従業員よりは恰も慈父の如く敬慕され同工場に於ける勞資の問題には幾多の美談があり發病に際りては全従業員涙を以て全快を神佛に祈願したと云はれる又氏は篤志家として知られ先年巨費を投じて出身地隣接の高岡町清瀧寺に大佛像を建立して四國の靈場に新名所を作つた事は一般の知る處である即ち氏の如きは現代得やすからざる努力奮闘の人物として後進の範とするに足るであらふ。

土居政之助氏

日本内地、鮮滿、支那、南洋、北米、南米、歐洲諸國に販路を有して世界的飛躍をつづけつゝある日本紙業株式會社伊野工場長の土居政之助氏は「紙業王國土佐」の有つ輝やかしき存在で其の名聲は津々浦々に響いてをる氏の督する工場の主なる製品は

各種コツピー紙、典具帖紙、謄寫版原紙、複寫用薄葉紙、帽子原紙、金箔用原紙、内地向半紙、書院、青寫眞及び陽畫感光紙

などで一ヶ年の生産高は

昭和八年	五二〇、〇〇〇貫	一、一五五、〇〇〇圓
昭和九年	五八八、〇〇〇貫	一、三二五、〇〇〇圓
昭和十年	五七五、〇〇〇貫	一、二九五、〇〇〇圓

の統計で一目瞭然である、日本紙業は資本金九百万圓、全國屈指の一つに數へられ、伊野工場は日本紙業三工場の筆頭だと稱せられてをるだけ、工場長土居政之助氏の任務は中々に重い、同工場の沿革を簡単に叙すると

伊野精紙合資會社時代 自明治十九年
 合資會社土佐紙工業部時代 自明治三十七年
 土佐紙工業株式會社時代 自明治四十三年
 土佐紙株式會社伊野工場時代 自明治四十四年
 日本紙業株式會社伊野工場 自大正十五年

となつてをり、第一期、第二期、第三期といふ如き歴史的變遷を経て現在の組織に進展した譯で此の間に於ける氏の嚴父土居喜久彌氏の功績は土佐紙株式會社の沿革史に特筆大書せらるべき地位に在る。

氏は明治二十六年九月十八日を以て伊野町に生る、市立高知商業學校第十回の卒業で、卒業後直ちに土佐紙株式會社の技術部に入り茲に紙業家たるの第一歩を勇敢に踏み出した、伊野は由來紙の黄金郷であり夙に紙業家の驥北をもつて著聞してをる、偉人はこの環境の産物であり、氏の材幹が年と俱に鋭脱して大正十五年日本製紙伊野工場の工場長に選任せられたことは極めて自然の順序であり亦た天の好配劑だと首肯せしめる、蓋し氏の資性剛直にして磊落、將に將たる器を備へたる人物價値の然らしむる處であつて職員間に信望厚く、二百數十名の従業員が父の如くに慕ふ徳望の發露

でなくてはならぬ、氏は稀に見る紙業界の偉人だとの折紙を附けられてをるので其の全貌を窺知することが出来る。

家室には二男二女あり、長令嬢一恵女史は縣立第一高女の出身で當年十九歳、長令息卓君は伊野小學の五年生、二女千繪さんは伊野小學校の一年生、二男は家庭で賢母の膝下に嬉戯してをる。氏の趣味は運動でゴルフ、ドライブウエーが御得意だと承はる、その他の運動も何んでも來いた、酒豪家で斗酒尙ほ辭せずの元氣滿腹背てビールを二人で四十七本仆した逸話の持主である。

上田 榮 治 氏

和紙の本場、吾川郡伊野町において古き歴史と堅き信用を有する株式會社上田商店は名實ともに土佐紙の代表者たる地位にある、同店は慶應年間の創業に屬し、明治三十年合名會社となり、三十七年伊野製紙合資會社上田商店の合併に依り土佐紙合資會社の創立となれり、

氏は明治十九年十月二十二日、長岡郡三里村、吹井、坂本馬平氏の二男に生れ小學校卒業後土佐銀行に入り約八年間勤続、明治三十八年十一月伊野町の紙業家上田哲次郎氏の婚養子に迎へられ三十九年土佐紙合資會社に入社、四十三年五月退社して上田合名會社を再起し業務代表社員に推され、

大正六年株式會社上田商店常務の任に就き現在に至る、爾來躍進又た躍進、大正六年に至り資本金五十万圓の株式會社に組織を變更し、年産額二百五十万圓を突破する驚異的飛躍振りで上田商店の名は偉大なる權威を以て業界一般尊敬の標的と爲つてゐる、上田榮治氏は實にこの株式會社上田商店の常務取締役として我が世の春を奏で、ゐる。氏は頭腦と人格と手腕の三拍子が揃ふてゐるから伊野町に於ける信望は驚く程厚く且つ盛んで幾んど神様の如くに尊敬せられてゐる、乃ち

昭和四年六月伊野消防奉仕會副會長に當選し、その年亦た町會議員に當選、翌五年九月伊野食料株式會社專務取締役に、六年二月町信用組合理事に、七年二月伊野商工會長に、八年四月再び町會議員に、同年六月伊野上水道株式會社の專務に、同年九月伊野食料株式會社の社長に、同十年八月土佐紙業組合議員に當選、又たヤンキー式丸網抄紙機を伊野、國分、井口に据へ附けてゐる等のかす／＼の事實が氏の郷黨間に有する徳望の如何に隆昌なるかを如實に物語つてゐると思ふ、そして昭和十年の秋には縣會議員の候補者に推薦されて當選し、初の縣會に於て都市計畫高知地方委員と爲つた、氏は尙ほ余力を籍し、高知市下知町に「土佐興業株式會社」を設立すべく、筆者が本稿を草する頃は自から中心となつて計畫を進めてゐた、氏は豊富なる財力を背景にし實業界と政界に大に驥足をのべる全盛時代が近づいたので各方面から多大の希望を以て其の一舉一動に深甚の注

意を拂はれてゐる。氏の趣味は圍碁と將棋と網打。家庭には二男五女ある、長男富三郎君は高商出身の三等主計で現に店に在つて業務に携はつてゐる長女の淑子さんは第一高女の出身で栃木縣眞岡中學校教諭(小高坂出身)東大出の土居氏に嫁し、二女喜久子さんも第一高女出で帝大出身京城總督府土木課(香美郡東川村出身)末久氏に嫁し、三女美代子さんも亦た第一高女を卒業し家政を手傳ひ、四女は第一高女に在學中、五女と二男は伊野小學校に通學中である。何んと恵まれたる家庭ではないか。

倉 橋 繁 氏

香美郡大楠植村の出身、海南中學校卒業後、大正二年五月四國銀行山田支店詰として入社、恪勤精勵累進して同十五年に至り出納係長に任せられ次いで江ノ口、田野、高岡等の各支店長を経て益々腕を磨き、本年一月伊野支店長に榮進し頗る令名を博してゐる、立派な事務的頭腦の持主であり堅實主義をモットーとしてゐる、蓋し支店長中の大星である。

柳 瀬 勇 氏

土佐の産みたる一代の偉人濱口雄幸氏は既に故人となりて土佐人物の凋落感を深からしめ今後土佐から總理大臣を出すことは到底不可能の事とせらるゝに至つたがこの偉人に對する崇拜者は實に民政黨支部の諸公のみではなく東西七郡を通じて濱口熱は少くとも百度以上の高潮に達してゐた、柳瀬氏も亦た濱口黨の一人であつて濱口氏の爲ならば敢て死を辭せずと云ふ意氣を示し大正十一年頃から民政黨支部の下級團體たる吾川同志會の總務として活躍し更に民政黨支部の遊說部長として東西に馳驅し濱口氏の爲めに萬丈の氣焰を吐いたものだ、氏は天性の雄辯家として態度重厚、其の音吐の朗々たる明快なる頭腦の持主たる事を一般に認識せしめ前途を囑望された、昭和四年には市會議員に當選し市參事會員として市政に參割してゐたが、今は大同生命の高知出張所長として納まり縦横の手腕を揮つて同生命の爲めに努力し異數の成績を擧げてゐる、今後の氏は胸中果して何物を藏してゐるか好漢自愛あれ

竹村謙三氏

縣下知名の一人に數へられた有名な故竹村吉太郎氏の次男で明治二十七年長岡郡介良村に生る、市立商業學校の出身で曾て高知貯蓄銀行に勤務してゐたが明治四十三年四國銀行に入つて早くも襄中

の錐のやうに鋭脱した、中村支店長を経て現在貸付課長として今日に至てをる、氏は温厚にして頭腦頗る明晰であり随つて人向のするさわりの好い人格者で行内の課長級でも新進中堅人物として最も前途を囑されてをる

大石金重氏

株式會社野村組の會計主任である、氏は香美郡曉霞村の産、高等小學校を卒業後の大正五年野村組運送部の給仕として入社、堅實と温厚の性格が次第に上層部の信用を得る資本と爲り、昭和二年白洋ビルに本社を置くに及んで會計主任に就任し以て現在に至り御大野村ムツソリーの御覺へ頗る芽出たいと聞く、尙ほ株式會社三業組の監査役にも擧げられてゐる、年齒三十七歳、まだ、これからと言ふところぢや、自愛自重して大に自奮自勵せんことを切望する。

松井襄氏

氏は大阪市北區伊勢町の出身、明治三十六年十月十九日生れと云ふから本年三十四歳。壯年醫學博士須崎昭和病院長として令名を馳せてゐるが左に氏の略歴を擧ぐれば

大正十一年四月大阪高等學校理科甲類入學、同十四年三月卒業、同年四月京大醫學部入學、昭和四年三月卒業、同四月京大醫學部副手囑託、同六月醫師免許狀を受く、同七月大阪北區北野病院囑託、同六年六月京大醫學部に入り内科學專攻、同九年三月京都市下京區朱雀寶藏町にて診療所開業、同年十一月學位論文通過醫學博士となる、同年十一月十六日高陵利用組合（組合區域は須崎町外二十四ヶ町村）昭和病院長就任今日に至る

松井博士は昭和病院長就任に際し「若し不幸にして豫期の成績を擧ぐるを得ず之の病院をして不名に終はらしむるが如き事あらんには宜しく海底の藻屑と成つて諸君に陳謝せんのみ」との決意と信念を披瀝したとの事である之の悲壯なる決意と信念の披瀝は即博士の責任感の如何に強大なるかを語るもので博士就任と共に同病院の前途は恰も光明に満ちたるかの如き感があつた過去七ヶ年間甚だ振はざりし同病院は博士の就任と共に果然院勢一變して益々隆昌に向ひ患者はいつも満員で松井院長の令名は嘖々として擧つてゐる

氏は資性濃厚篤實の好紳士で患者に接する頗る親切、職務に對して愈々忠實壯年有爲の博士として其の前途の多望なる一般から囑目されてゐる

武市源三郎氏

氏は明治十九年を以て長岡郡大篠村に生れ、大正三年四國銀行に入社するに至つて爾來各支店長を経て考査係主任となつて大いにその才幹を揮つてゐたが本年九月一日附を以て企劃係轉動を命ぜられ今日に至つてゐる、資性濃厚で頗る圓滿を以て目され評判がよいので敵がない、それに氏の擔任が銀行經營の方針に當つて如何に改造發展に資する乎の重点にある特種へのツトを持たなくては眞似の出来ない業務であるから他に比肩して行内でも重要な人物として幹部から重寶がられてゐる。

原 重 壽 氏

四國銀行須崎支店長として重きを成してゐる、氏は香美郡佐古村の出身、赤岡銀行の給仕を振り出しに土佐銀行の行員から四國銀行へと順調に昇格し、或は北町支店長を勤め、或は本店詰と爲りなごして行くところ可ならざるなしの手腕力量を認められ、最高幹部の眼鏡で須崎支店長の要職をあてがはれたわけなのだ、性質至つて淡泊で行の内外から好かれてゐる、須崎支店の成績が擧がるのは氏の人に好かる、性格の反映だと言つていゝだらふ、家庭も至極圓滿で長男寛十郎君は農林學校の五年、外に二男一女ある、趣味は多方面で狩獵、碁、釣、謡曲等々何んでも來いである、本年四